HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	異文化接触としての姉妹都市交流 ： 守口市とニューウエストミンスター市のケース
著者	井上，真蔵; INOUE，Shinzo
引用	北海学園大学人文論集(53)：1-136
発行日	2012-11-30

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

異文化接触としての姉妹都市交流
── 守口市とニューウエストミンスター市のケース ──

井　上　真　蔵

はじめに

守口市がカナダのニューウエストミンスター市（ブリティシュコロンビア州）と姉妹都市提携を結んだのは，1963 年（昭和 38 年）のことである。日本とカナダとの間に締結された初めての姉妹都市である。1960 年代は，日本が戦後復興を果たし，さらに国際社会に復帰しようとする時期であった。1960 年には池田首相により「所得倍増計画」が策定され，1964 年 10 月１日には東海道新幹線が開通し，その年の 10 月 10 日にはアジアで初めてのオリンピックが東京で開催された。高度経済成長の時代が始まり，テレビがようやく一般家庭にも入ってくる。アメリカのテレビ番組が日本の茶の間でも放映され，人々はテレビの中に映し出された豊かなアメリカの生活に憧れた時代である。しかし，1 ドル＝360 円の固定為替制度であり，一般の庶民にとっては，海外へ行くことは不可能と言っても良い時代であった。

そのような状況下で，1961 年（昭和 36 年）守口市の当時の市長木崎氏が欧米の地方自治制度を視察する機会があり，世界一周をして最後にカナダに立ち寄ったことが姉妹都市提携の発端となる。カナダでは市町村会主催のパーティに出席し，たまたま美人の女性市長と隣り合わせに座ったのがご縁となったとのことである[1]。1962 年（昭和 37 年）には，当時の駐日カ

---

[1] 議事録『日本カナダ姉妹・友好都市会議「21 世紀における多様な交流をめざして」』2001 年 7 月 9 日，カナダ大使館，20 ページ。

ナダ大使がニューウエストミンスター市との間で仲介役を果たし，姉妹都市提携は守口市議会の承認を得て，正式に姉妹都市提携をすることになるのである。翌年の1963年には，エリザベス・ウッド市長が守口を訪れ，姉妹提携盟約書に調印する[2]。

以来ほぼ半世紀にわたり，市民訪問団，青少年吹奏楽団の相互交流，スポーツ交流，中学生の相互派遣，ダグラスカレッジへの短期留学生の派遣などの様々な交流が活発に行われてきている。このような活動は，自治体国際化協会より「姉妹自治体優良事例」として取り上げられている[3]。それらの活動の中でも，特に継続して行われているのが，中学生の相互派遣と一般市民の短期留学である。中学生の相互派遣は，1965年より始まり，隔年ごとに相互訪問が行われている。一般市民の短期留学に関しては，期間は3ヶ月であり派遣人数は4名程度である。

本論文では，これら二つのプログラムを取り上げて，異文化接触の視点から考察するものである。対象とされるのは，守口市でカナダ人を受け入れたり，カナダへの派遣団に随行していく担当者や職員の方々，そして提携校に派遣される中学生たちとダグラスカレッジへ短期留学をする一般市民の留学生たちである。これらの人々は，実際にカナダ人やカナダ文化と接して，どのようなイメージを抱くのであろうか。カナダ人やカナダのどの側面を見てどのように解釈しようとしたのであろうか。カナダという異文化に出会うことにより，どのような影響を受けたのであろうか。これらの問に答えることが，本論文の目的である。

---

[2] 守口市国際交流協会ホームページ，http://m-interex.daa.jp/shimaitoshii.htm

[3] 財団法人自治体国際化協会ホームページ，http://www.clair.or.jp/j/simai/jirei/oosaka.html

第１章　守口市・ニューウエストミンスター市姉妹都市関係の特徴

守口市とニューウエストミンスター市の姉妹都市提携がなされたのは1963年のことであるから，もうかれこれ50年という歴史を持っている。その間，様々な交流が行われ，親善使節団の相互訪問，中学生の相互派遣，ダグラス･カレッジへの市民特別留学生の派遣，スポーツ交流，音楽交流，キルト展の交換などが行われてきた。それらの中から，ここでは中学生の相互派遣とダグラス・カレッジへの市民特別留学生の派遣，そしてそれらのプログラムおよび姉妹都市運営に関わっている担当者の役割についての概略を見ておこう。

Ⅰ　姉妹都市提携プログラム

１　中学生派遣

この中学生派遣プログラムは，姉妹都市提携がなされた2年後の1965年から実施されている。これは守口市国際交流協会が実施にあたり，守口市内在住の中学生を姉妹都市に派遣し，「ホームステイを通じて，異文化を体験するとともに，生の英語を習得し，あわせて将来の個性ある人材の育成」を目指して，始められたものである。いままでに200名余りの中学生たちがこの事業に参加している。現在では，教育委員会から選考された教員１名と市の職員１名が引率にあたっている[4]。

(1)　選考基準 ── 英語力よりもコミュニケーション

募集人数は20名程度であり，隔年ごとの相互派遣である。守口から今年カナダに行けば，来年はカナダから守口にやってくるということである。派遣時期は３月末の１週間である。この時期は日本では春休みにあたるが，カナダではまだ授業が行われており，現地の生徒たちと一緒に授業を受けたり交流することができる。このプログラムは，非常に評判が良く，両親がこのプログラムで行ったから「自分も行きたい」というような場合や，

---

[4]　守口市国際交流協会ホームページ，前掲。

引率教員から「スゴク良かった」という話を聞いて応募してくる場合もある。親御さんからは,「来年ですよね！　来年3月にうちの息子行けますよね？」と問い合わせの電話かかってくることもある。派遣人数は15名から20名程であるが，議員の中には「隔年だからもっと増やすようにできないのか」という要望もでているとのことである。しかし，担当者の話では，カナダ側の受入れ状況は「40人，50人は無理な話で，20人ぐらいが可能」な数字ということである[5]。

このように非常に人気のあるプログラムであり，20名程の枠に対して，その2倍ほどの応募者があるとのことだ。どのような生徒を，どのように選抜するのかという点について，担当者の方はその基本的な考え方を次のように語っている。

> おもろい子を取ろうやという話をしているんですよ。そんな子には，是非海外行ってもらいたいんです。だいたい倍くらいは応募してきます。1日くらいかかって，一般面接ですわ。「あなたは何故カナダに行くのですか？」と日本語で面接して，簡単な英会話もしますけど。英会話ができなくてもいいんですよ。中学生にそんな英語能力を試してもあまり意味のないことやから。しかし，積極的にコミュニケーションできるかどうか。ホームシックにならんような子，英会話とかそんな事よりも，なんとかやる子やったらええなぁ，いうような感じですね[6]。

このような基準で選ばれた生徒たちを実際に引率していった教員の方は，次のような感想を述べている。

5　聞き取り調査：財団法人守口国際交流協会にて，2005年9月21日（以後，「聴き取り調査：9月21日」と略す。）

6　同上。

子供は普段の授業では考えられないくらい，すぐに自然に人の中にポーンと入れるという感じ。言葉じゃなくてね。あれは多分，選別しているからだと思うんですよ。たくさんの募集の中から，こちらの方でコミュニケーション能力のわりと高そうな子を選んでいるから。

向こうの授業に参加させてもらうプログラムがあったので，それなんかは，普通なかなかできへんことやから，そのセカンダリースクールそのものの中にポンと自分らが入って，一瞬，ほんとに留学したかのような，そんな感覚で，子供らにしてみればその印象が強かったみたいで。続けて留学したいって言ってますもん[7]。

上のように，定員の約 2 倍の生徒を丸一日かけて面接を行い，「英語力よりもコミュニケーション」という選考基準で選んでいる[8]。これは，かなり特徴的だと言ってもよいだろう。例えば，東京の世田谷区や江東区などのように，区内に公立中学校が 30 校ほどある場合には，学校長の推薦によるという形式が一般的である。しかし，守口市の場合には，国際交流協会が独自の基準で選考し，それが非常に上手く機能している。子供たちはカナ

---

[7] 同上。

[8] ここでの基準は「英語力よりも積極的にコミュニケーションできるかどうか」ということである。選考された中学生たちは，「自分は英語ができる方ではないので，合格通知がきた時にはビックリした」とか，「自分が選ばれたのは不思議だ」とか，「受かるとは思わなかった」と言う生徒たちが多い。しかし，それぞれユーモアのセンスがあり前向きな姿勢は報告書からも見られ，面接でも多分にそのような点が評価されたものと思われる。「姉妹都市派遣中学生報告書」財団法人守口市国際交流協会，1999 年（以後，「姉妹都市派遣中学生報告書（1999 年）」と略す），３，９，10，12，15 ページ。「姉妹都市派遣中学生報告書（３月 22 日～３月 29 日）」財団法人守口市国際交流協会，2001 年，６，10 ページ（以後，「姉妹都市派遣中学生報告書（2001 年）」と略す）。「姉妹都市派遣中学生報告書（３月 25 日～４月１日）」財団法人守口市国際交流協会，2004 年，７ページ（以後，「姉妹都市派遣中学生報告書（2004 年）」と略す）。

ダの授業に溶け込んで「続けて留学したい」と言うくらいであるから，大成功である。そして，このように生徒たちに同行した教員が自分自身の目で子供たちの様子を確かめながら，それを再度選考現場にフィードバックさせるということも非常に大切なことである。

(2)　ニューウエストミンスターでのホームステイ

ニューウエストミンスター側には，民間の友好協会やボランティア組織は存在しておらず，提携校であるセカンダリースクールの担当教員が守口市からの生徒のホームステイを手配している。この場合には，一度守口を訪問した生徒がいる家庭がホストファミリーを引き受けるという配慮がされている。しかし，必ずしもホストファミリーの数が十分ではなさそうで，１軒に二人の生徒がステイしたり，時には１軒に三人がステイするような年もある。また，年によっては，１軒に二人がステイするケースが６件もある場合も見られる。守口の担当者は，「ほんまは，一人でステイさせるのがエエと思う」と述べているが，カナダ側のホームステイの事情は厳しいようである[9]。しかし，カナダの家庭の場合には，部屋数は十分あるので，守口からの生徒が複数でステイすることには問題はない。

生徒たちにとっては，一人でホームステイするよりも，友達と一緒の方が心強いようである。生徒たちは，「私はさやと同じ家だったのでさやがいれば100人力って感じ[10]」とか，「２人で泊まるということもあって，初めて，ホームステイするにもかかわらず，緊張よりもどんな人たちなんだろうとわくわくする気持ちの方が強かったです[11]」とか，「３人で，１つの家に泊めてもらったので，何とかなるだろうと思いました[12]」と述べている。かなり心理的にリラックスしている様子が窺える。引率の教員も，次のような感想を述べている。

---

[9]　聞き取り調査：９月21日。

[10]「姉妹都市派遣中学生報告書（2001年)」，６ページ。

[11]「姉妹都市派遣中学生報告書（1999年)」，８ページ。

[12]　同上，５ページ。

今回は二人とかで１つの家庭に泊まっていたんで，そういう意味では心強いみたいだったから，単独よりもちょっと強気で二人で相談して，こうしようとかああしようとかできたみたい。中学生レベルだと単独でポーンよりもやっぱり友達と一緒の方が違うみたいね[13]。

子供たちを送り出す担当者としてみれば，異文化の中で一人でホームステイする方が全て自分で決めて行動しなければならないので，より成長が期待できると考えるのは，まさに正論である。しかし，時には「三人で１軒の家にホームステイ」という現状もあり，上のような状況が現実的な対応策であると思われる。

II　ダグラスカレッジ短期留学プログラム

1　基金設立の経緯

守口市の姉妹都市交流プログラムには，ダグラスカレッジ短期留学プログラムがあり，これは極めてユニークなプログラムである。現在，カナダと姉妹都市関係にある自治体は日本全国で 70 件[14] であるが，このダグラスカレッジ短期留学に相当するものは恐らく皆無であろう。

それでは，どのような特徴を持ち，なぜユニークなのかを簡単に見てみよう。まず，このプログラムは，1993 年に「守口・ニューウエストミンスター市姉妹都市提携 30 周年記念奨学金基金」として基金が設けられ，その基金により運営されている。そして，この基金設立は，守口市とニューウエストミンスター市だけでなく，ブリティッシュ・コロンビア州の高等教育省とダグラスカレッジの 4 者の拠出（各 3 万ドル）によるものである。周年記念行事としては，記念碑を相互に設置したりすることが多いが，このような短期留学プログラムを設置するということ非常に珍しく，さらに

---

[13] 聞き取り調査：9 月 21 日。

[14] 財団法人自治体国際化協会ホームページ，http://www.clair.or.jp/j/simai/jirei/oosaka.html，9 月 29 日現在。

州政府や受入れ機関も加わるということは他に例をみないのではないだろうか。実際，筆者は約40のカナダと姉妹都市提携をしている自治体を訪れたが，このような留学プログラムを持つ自治体は守口市のみである。

この「記念奨学金基金」が設立される経緯について，担当の方は次のように述べている。

> 30周年の時にね，何か記念行事をやろうやないか，ニューウエストミンスター市の市役所の前に時計台，ソーラーのがありますやん，そんなん起用したらどうやろかって。う～ん，物もなぁ～。
>
> この基金は，ウエストミンスターと守口で，この時ちょうどお金が沢山ありまして，さらに州の教育省まで出してくれたりしました。ダグラスカレッジもです。最近は先生の首切ってるみたいなことがあったりするから，もうなかなかお金が出へんらしいけど，たまたまこの時は良かったみたいで。
>
> それで，キーワードがダグラスカレッジにいてはる細井さんという方ですわ。具体的に話がでてきたのは[15]。

一般的に，カナダでは納税者意識が高く，姉妹都市交流にたいして公的資金を使うことは難しい。しかし，この基金創設にあたり，ブリティッシュ・コロンビア州政府やダグラスカレッジもそれぞれ3万ドルを拠出している。これは教育分野への公的資金の拠出が，関係する4者（守口市，ニューウエストミンスター市，ダグラスカレッジ，州政府）にとって極めて有益であると認識されたためである。そして，このような共通認識が得られる背景には，上に触れられている細井氏という方の存在がある。細井忠俊氏は，ダグラスカレッジの国際教育センター長であり，守口にもたびたび訪れている。このような方の存在がなければ，記念奨学金基金のよう

---

[15] 聞き取り調査：財団法人守口国際交流協会にて，2005年9月22日（以後，「聴き取り調査：9月22日」と略す。）。

な創設は困難であろう。関係者の間の調整役のみならず，教育ヴィジョンが描けてそれを具体化する能力が必要だからである[16]。さらに，当時の日本はまだバブル期であり，カナダ側にも財源的な余裕があったことも与っていると言えよう。

2　プログラムの特徴

(1)　目的と資格

このプログラムは，既に上に触れたような経緯で 1993 年に設立され，守口市民を毎年ダグラスカレッジの夏期英語研修プログラムに派遣して，英語を母国語としない人々と共に英語を学びながら，「異文化体験を通して国際的な視野を広げ」将来守口市の国際交流協会に参画しうる人材の育成につとめるのが，その趣旨である[17]。

「夏期英語研修プログラム」の期間は，５月初めから６月末までの７週間である。毎年２月ごろ守口市の広報紙で募集がなされ，３月中旬に選考がなされる。応募資格は，守口市民であり高校卒業以上，英検２級以上か同等の英語能力を持つ者である。面接試験で選考されるのは４名程度である。留学中は守口市の代表として，ニューウエストミンスター市の公式行事に参加し，留学後は市の国際交流や国際交流協会のボランティア活動に協力できる人という条件がついている[18]。この奨学金の内容に関しては，授業料の半額が免除，ホームステイ費用のうち C$500 が奨学金として支給される[19]。

このように，ダグラスカレッジの奨学生は，一般市民の応募者から選ばれ，奨学金を受けての７週間に及ぶ語学留学であり，英検２級以上かそれと同等の英語能力を持つと認定された人である。実際，応募者はみんな留

16　細井忠俊「レポート：カナダの視点」（2001 年５月～６月実施）。

17　守口市国際交流協会ホームページ，「ダグラスカレッジ特別留学生派遣事業」http://m-interex.daa.jp/dagurasu1.html

18　同上。

19　財団法人自治体国際化協会ホームページ，「提携 30 周年記念奨学金基金の活用について」http://www.clair.or.jp/j/simai/jirei/oosaka.html

学したいという強い動機をもっており，試験前には英会話教室に通ったり，日本語と英語の面接を想定して練習を重ねたりして合格した人々である。中には，大学を休学して応募した現役の大学生，仕事で英語を使いながらも「自分自身に伝えるべきものがないと薄っぺらな会話になってしまう」と考えた人，英語教師になる気持ちがありながらも迷っている人など，実にさまざまな人たちが応募している[20]。

(2)　プログラムの内容

特別留学生は，現地でホームステイをしながら，ダグラスカレッジで英語漬けの毎日を過ごすことになる。前半の2週間は，英語を母国語としない留学生や中国，韓国，タイなどのアジア系学生とともに授業を受ける。そして後半の5週間はフランス系カナダ人と授業を受けることになる。午後にはワークショップや野外活動を通じて，英語でのコミュニケーションを実践し，異なる文化圏からの学生と友達になったり，カナダ社会を体験することになる。

後にどのような体験をするのかは詳述するが，一言で言えば，まさに「異文化の中での英語漬け」であり，その影響は非常に大きい。

Ⅲ　姉妹都市担当部署とコミュニケーション

守口市側では，姉妹都市関係に関わる行事やプログラムは，実質的には財団法人守口国際交流協会が担当している。この国際交流協会は，1993年に設立され，2億円の基金の活用で事業を行っているが，中国との友好都市交流，外国人のための日本語教室なども担当している。近年では，経費の面なんかでも厳しいとのことである。このように，守口市から委託を受けて，実質的な企画，立案，運営は国際交流協会が担当するという意味で

---

[20] 「ダグラスカレッジ夏季英語講座派遣留学生報告書5月7日～6月22日」財団法人守口市国際交流協会，2001年，5ページ，〝Summer English Language Institute Bursary Program Spring Session〟財団法人守口市国際交流協会，2004年，1ページ，7ページ。

は，日本の他の自治体でもよく見られる形である。

ところが，この守口市の国際交流協会が相手とするニューウエストミンスター市側の担当部署が，かなりユニークな形式である。一般的に言って，カナダの場合には日本の市役所の国際交流課のようなものも，行政の委託業務を行う国際交流協会のようなものも存在しない。姉妹都市に関する行事や活動は民間の友好協会あるいは民間のボランティア団体が実質的に担当することが多い。ところが，ニューウエストミンスターの場合には，このような民間の友好協会が存在していないのである。

それでは，誰がどのように担当しているのであろうか。それは，プログラムごとに異なっているようだ。まず，市民の相互訪問については，市長秘書が取り扱う。中学生の相互派遣プログラムに関しては，ニューウエストミンスターのセカンダリースクールの日本語担当教員が担当している。日本に派遣する生徒の募集，守口からの中学生のホームステイの手配，受け入れのプルグラムなど，を実質的に担当している。さらに，ダグラスカレッジへ短期留学生を派遣する件については，ダグラスカレッジの国際教育センター長の細井氏が中心となり取り扱っているようだ[21]。これらのプログラムを一元的に調整する組織は存在してはいないが，実質的な調整には細井氏がかなり関わっているようである。

このような事情であるから，守口の担当者は，中学生派遣についてはセカンダリースクールの教員と実質的な連絡を取ることになる。そして，守口の担当者はセカンダリースクールの教員と連絡をとる前に，市長秘書に「セカンダリースクールに連絡を入れますから，よろしいですか」と相手方の調整にも気をつかっておりポイントをちゃんと押さえている。そうして，秘書の方から「来て下さい，ウエルカムしますよ」との連絡がきて，セカンダリースクールの担当者と詳細な打ち合わせをすることになる[22]。

ダグラスカレッジへの派遣については，細井氏と連絡することになるが，

---

[21] 細井忠俊「レポート：カナダの視点」(2001 年 5 月～ 6 月実施)，106 ページ。

[22] 聞き取り調査：9 月 21 日。

相手は日本語が分かるので,コミュニケーションは非常に密にできている。また，セカンダリースクールの担当教員とのコミュニケーションに関しても問題があるような場合には，守口の担当者はこの細井氏に相談することができる。守口市の担当者が「姉妹都市のキーマン」と表現しているように，交流がスムーズに行くうえで，この細井氏の存在は大きいと言える[23]。

さらにダグラスカレッジには,細井氏以外にも日本人スタッフがいるし,日本人学生も多数留学している。これらの日本人や留学生は，守口からの中学生を受け入れる際にも，ボランティアとして積極的にサポートをしてプログラムが円滑に運営されることに役立っているようである[24]。

第2章　日本側担当者の見たカナダ

守口市の担当者がカナダ人やカナダ文化と接するのは，いくつかの場合がある。姉妹都市に関わる案件の連絡や調整のためのコミュニケーションに始まり，ニューウエストミンスターからの訪問団を迎えたり，守口からの訪問団に随行員となり付き添って行く場合などである。それでは，このような種々の局面で，守口の担当者たちはカナダ人やカナダ文化の何を見て何を感じたのかを見ていこう。

---

[23] 姉妹提携が始った初期の段階では，他の日系の方が関わっていたようである。担当者の方は，当時のことを次のように語っている。「それがね，やっぱり最初はですね,日系の人がどうも居てはったみたいですね。日本から最初のころの学生が行った時は,その人の家にホームスティしたりね,そんな事をやっていた記憶が残っているんですよ。最初のころは吹奏楽の交流もやりましたから,その段取りとかいうのは日系の歯医者さんの方がやってたんですけどね。その方が実はかなりのお年でね。もう90歳近くなったんちゃうかな。」聞き取り調査：9月22日。

[24] 「姉妹都市派遣中学生報告書(2004年)，2ページ。「姉妹都市派遣中学生報告書(2001年)，1ページ。「姉妹都市派遣中学生報告書(1999年)，1ページ。

Ⅰ　ニューウエストミンスターよりカナダ人を受け入れて

1　ホームステイが決まらない

ニューウエストミンスターに中学生を派遣する間際になっても，カナダ側からホストファミリーのリストを送ってこないということが，これまでにも起きている。日本側にすれば，どうなっているのかと不安になって当然のことである。以下は，その件についての担当者の言葉である。

> セカンダリースクールの先生が，ホームステイについてやってくれる。で，これが，なかなか決まらない。親が僕の所に「まだ決まらないんですか？　カナダもう行かなあかんのに。」と言ってくるんです。だから，「あわてないでください。カナダはゆっくりしてますねん。」ほんで僕も「早く決めて下さい。まだですか？まだですか？」って，催促するんですよ。ほんなら，「そんな慌てないでよろしいがな。」って。僕，ちょっとも英語できないんやけれども，これは明らかに怒っている文面やねって。英語分かっている子が見たら，そう言いますねん。そやけど，もう出発するのにまだ決まれへんって，ホストファミリーの名前を渡す言うてんのにどないすんのん。「そんなん，まだ決まらないならカナダなんか行かせられません！」って怒った母親もいてましたわ。そういう感覚の違いがね，ありますね。最近こそありませんけど。何年か前はそんな話もありました[25]。

カナダ側とのやりとりで，このような時間の感覚が一致しないこともよく見られる。行く間際になってもホストファミリーが決まっていないのも稀ではなく，時には行ってからホストファミリーが変更になっているような場合もある。カナダ側には確かに時間に対して悠長な所が見られるが，一般的に言って個人が個人の裁量で行動する場合が多い。日本の場合のよ

---

[25] 聞き取り調査：9月21日。

うに，例えば出発する1週間前には全てが確定しているということはあり得ないのである。日本側の担当者の方は，当初は戸惑うのであるが，何度かやってみると，まあ何とかなるという経験をするのが普通のようだ。しかし，やはり事情を知らない普通の日本の親御さんにしてみれば，カナダ的基準は想像できないことであり,「まだ決まらないならカナダなんか行かせられません！」と言うのも，もっともなことである。従って，担当者としては，上記のように双方の間に立って，カナダ側に対しては催促をし，日本の親御さんに対しては説明をするというのが現実的対応だと言えよう。

2　スケジュール通りは進まない

守口市の担当者は，カナダからの訪問団を受け入れる際も，当然のことながら標準的な手順で物事を行おうとする。スケジュール表を作って，時間通り進行しようとするのである。しかし，相手が日本人であれば，集団行動ができて予定通りに進行するのだが，カナダ人相手ではなかなかスケジュール通りにはいかないようである。担当者は，次のように述べている。

> 表敬訪問の時間なんかはね，まず集合して，そこから市役所へ連れて行くんです。10時からだから，5分か10分くらい前にちゃんと座って，「おい，まだ来てないのか？」って一応言うわけですよ。その時間にはホストファミリーに連れてきてねって言うてあるんです。「いやぁ。なかなか来ません〜。」って。その辺はなかなか気を使う。あとは，どこか観光に連れて行ってあげるっていうのは，それはもうズレますわ。どうしてもズレる。だから，ちょっと，割愛せなあかんなぁという部分がでてくるんです。だから，ちょっとザックリと組んでいかんとアカン。キチキチと組んだら絶対遅れますから。何回もやっているうちに解ってきたんです[26]。

---

[26] 同上。

担当者とすれば,表敬訪問の時間が10時だとすれば,その5分から10分前には会場にきて着席しているように伝えてあるのだが，カナダ人たちはなかなか時間通りには現れない。「5分前に集合･着席」というような分刻みの行動には慣れていないのである。観光に連れていくにしても，これも集団で移動しなければならないので事情は同じである。日本人の担当者にしてみれば，予定通りにはいかないので，省略せざるをえない部分もでてくるのである。こんなことを何度か経験して，予定は「ザックリと組んでいかんとアカン」という認識に達するのである。一般的に，日本側は予定通り遂行するのが大事な事であり「当然のこと」でもある。一方，カナダ側は「予定に縛られる」ことなく，行った先々で「楽しむこと」に重点を置く傾向がある。ここでは，日本側の担当者が，カナダ人を相手にして日本的な基準では上手くいかないことを経験して，日本的な基準に固執することなく物事に対処していこうとする姿がうかがえる。

3　個人行動のカナダ人と組織重視の日本人

お互いの文化の違い，行動の仕方の違いによって，実際に交流事業の運営に支障をきたすようなこともあるようだ。しかし，そのような文化的な違いにより問題が起きるような場合には，根気よく相手に分かってもらう努力が欠かせない。担当者は，その模様を次のように述べている。

> そのトニー・ジャクソンさんは，僕より前の国際交流の担当のもう一つ前のものすごい長い人いてはりまして，その人とも友達ですわ。そうするとね，日本に来たときに個人的に担当の人に連絡してくるんですよね。僕らは逆に言うと公で動くでしょ。ちゃんと市長から市長に信書を届けてね。それ基本でしょ。そんなことやらんと，個人的にボンボン，ボンボンやるんすよ。僕らの関係ない所でやってはる時もあるんです。トニー・ジャクソンなんかは，急にバーンと来るねん。だから，そん時は真田さん所に泊まったりしてはるんですわ。過去にいろいろトラブルあったこともあるんです。勝手にそんなことして，「誰が決めたんや！市が面倒見るのと，ちゃうんか！」ってなことに

なって。

生徒を一緒に連れてきたりとか，その辺のボーダーラインが分からへん部分があったりして。で,「そんなん，よう気を付けや。上手いことやらんとあかんで」，みたいな話しをしたんです。今，私がコンタクトを取っていたセカンダリースクールの先生には,「来る時はそのようにしてね」と，僕が何回も言い含めてますから。先にうちに連絡くれるのはいいけれども，これからこうするよというのを市長に出そう思ったら，市長の決済もらわなあかんですから[27]。

非常に決定的な文化的な違いが現れている。守口市の担当者は，全て公的な手続を踏んで稟議書を作り，上司の決裁を仰がなければならない。そうしなければ，物事が進められないのだ。ところが，カナダ側はどちらかと言うと，個人の決定で物事が動いていく文化である。そのような個人志向の文化から見ると，個人的に生徒を連れて守口を訪問した場合には，公的な手続を踏むことなどには思いが至らないのである。従って，何度か問題が起こってトラブルを経験してみて，担当者は「何度も言い含め」るということを繰り返して，文化的な溝を埋めるように努力をしているのである。このような文化的な処理の違いは，カナダ側にはなかなか理解が困難な事柄であろう。セカンダリースクールの教員が子供たちを引率して守口に来る場合は，子供たちは守口市内にホームステイするが，教員は単独で京都や奈良のユースホステルに泊まったりすることもある。こんなところにも，個人的行動をするカナダ人の特徴を見る思いがするが，守口の担当者は特にこのために書類作成をすることも必要はないので，問題とはしていない。

4　カナダの生徒を受け入れて

(1)　思ったことを言う生徒たち

守口からカナダに行く生徒たちは，試験により選ばれ，研修も受け,「守

---

[27] 聞き取り調査：9月22日。

口の代表」だという意識をもっている。ところが，ニューウエストミンスターからやってくる生徒たちは，守口の生徒たちとは大いに異なっている[28]。正直，戸惑うようなこともあるようで，担当者の方は次のように述べている。

> 今度はおとなしいええ子ばっかりかと言うとそうでもなく，もう来た子の中にはむちゃくちゃと言うか，すぐ何かあったら怒ったり，ふてくされたりする子とか。それと，しゃあないんやけど，ベジタリアンで全然食べない子とかね。ベジタリアンとかでなければ，結構，生ものでも食べますよね。向こうでもあるんでしょうね。寿司バーとか，そんなんもあったりするんでしょ？[29]

以上のことから，日本の生徒たちからはとても想像できない態度であることが窺える。普通は日本の生徒と無意識のうちにも比べることになり，あまりにも自己主張が強いことに戸惑っているのである。しかし，カナダ人の生徒にすれば，「思っていることを言葉にする」ということであり「当たり前」のことである。さらに，カナダ人の生徒にすれば，普通は学校代表や地域を代表するという強い意識はない。セカンダリースクールの日本語のクラスで先生が「行きたい人は？」と呼びかけたので，自分たちで手をあげて応えただけである。個人の意思に基づいての行動であるという意識が強いのである。集団のために自分の感情を殺すということは考えられないことである。ところが，そのようなカナダ人生徒の行動について，日本人の担当者には馴染みのないことであり，ついつい上のような愚痴になってしまうのであろう[30]。

---

[28] 日本とカナダとの教育制度の違いから，カナダから来る生徒訪問団は中学生と高校生である。

[29] 聞き取り調査：9月22日。

[30] ここで触れられたベジタリアンのようなケースの場合には，特にそのような

(2)　日本食とマック

ところで，食事について言えば，ニューウエストミンスターからの生徒たちの場合には，ベジタリアン以外に特に問題はなさそうである。しかし，これはなかなか珍しいことである。時には内陸部から来た生徒たちの場合には，全く生ものに手をつけないだけでなく，日本食を食べない場合もあるのである。ニューウエストミンスターは海の近くでもあり，さらにカナダにおける日本食の浸透にもよるものだと思われる。

以上のように日本食については何ら問題がないのは述べた通りであるが，なかなか守口の担当者の方は面白い方で，次のような話を聞かせてくれた。

> お昼にちょっと出かける前に集まって言うたら，そこにマクドあったんですよ。それで，「食べるか？」言うたら，エライ喜んで「食べるー」言うんですよ。みんなで，50名以上おったけど，ガッーとやったことありますよ。もう，みんなニコニコで[31]。

この担当者のパーソナリティが伝わってくるエピソードである。一般的に言えば，姉妹都市の担当者は，「折角，日本に来たのだから日本食を」という考えの人が多い。ところが，守口の担当者の方は，上のように臨機応

扱いができる人に依頼しているとのことで，担当者の高い問題処理能力がうかがえる。担当者の方は次のように述べている。「ボランティアの中に旦那さんがポーランド人で守口に住んではって外資系の会社に行ってはる人がおるんです。その人はパーティー大好きで「ええよ。いつでも受けてやるよ，何もせえへんよ，その代わりって。」それはもう向こうの感じですわ。そういう方が居てはりますねん。で，「ベジタリアンを受けて。」って。そういう人とか過去に経験のある人がホームスティ部会にいますから。これはね，そんな人に頼まんとね。そんなの市の公募見て，初めてですねん言う人にぶつけたらね，むちゃくちゃや。」聞き取り調査：年9月22日。

31　同上。

変にマクドナルドに連れていったのである。マクドナルドは，カナダ人の子供たちにとっては精神安定剤なのである。日本人がカナダにしばらく滞在していると，「寿司が食べたい」と思うのと同じである。このように，マックでハンバーガーを食べてからは，カナダの生徒たちと，この担当者の間の距離はグッと縮まったことであろう。

⑶　カナダの生徒が好む場所

カナダの子供たちを連れていく場所として，守口からも近い京都がもちろん組込まれている。伝統的な京都の街も面白いが，子供たちが喜ぶ場所として，担当者が話してくれたのは次のようなことであった。

> むこうの子供たちも，アニメとかゲームの色んなのがある所は，やっぱり，ほんとに大好きですねー。そういう所へ連れてったら，ものすごい喜びますよ。ほんまに，もう１回行きたいとか，何度も言ってくるんですよ[32]。

神社仏閣などは，一般的に日本側の担当者がカナダの子供たちに見せたい場所なのだが，子供たちはあまり興味を示さないことが多い。ここにあるように，守口の担当者はアニメとかゲームのお店が色々ある所に連れていったようである。この分野では，カナダの子供も日本の子供と同じような事柄に興味を抱いているのが，よく分かる。しかし，ここでも特徴的な事柄は，「もう１回行きたいと，何度も言ってくる」とあるように，自分の望むことを言葉で何度も表現してくるという点である。日本人の子供の場合には，例え行きたいと思っても，自分の方から「言葉で表現」して相手に伝えようとすることは稀なのである。

さらに，カナダの子供たちに評判が良かったこととして，お祭りをあげている。

---

[32] 聞き取り調査：９月21日。

ちょうど秋なんかに来た時に祭りなんかに連れて行ったとしたら，我々が想像以上に溶け込みますね。お立ち台なんか乗って龍踊りやりますよ。龍踊りってね，天神祭りの龍踊りいうのがあるんですよ。びっくりしましたわ，僕も。雨降ったけど，連れて行ったら喜びましたわ[33]。

カナダにはないしおそらく初めて見る日本の伝統行事であろう。見れば何をしているかが分かるし，おまけに体を使って参加できる。単に見学するだけではなくて，体と五感を使って日本人の中に溶け込んでいく感覚を経験することの意味は大きい。言葉によらないで文化を越える一つの方法である。

5　晩餐会でのカナダ人

守口を訪れたニューウエストミンスターの訪問団が，晩餐会に参加した時のことである。一行の中には，日本では考えられないようなフランクな行動をする人もおり，文化的な違いに驚く場合もある。日本側の担当者は，その時の模様を次のように語ってくれた。

晩餐会でね，10月の終わりでしたかね。何にも言わんとね，なんかごそごそと仮装してるんですわ。歌が好きでね，エルビスプレスリーの真似してね，その後，ワッーと喜ばしといて，バッ―とお菓子をみんなに配ってね。市会議員なんですよ，その方は！　そういう演出とかね，そんなことね，我々，想像もできないですよ。例えば，表敬訪問の時はガチガチになるでしょ？　きっちりと進行表作って，はい，次こうですよ，こうですよって言うといてもね，向こうさんは「フゥ～ん」ちゅう感じでね。それでフランクに言いたいこと言うし，喋るし，非常に和みますね[34]。

---

[33] 同上。

[34] 同上。

もちろん全てのカナダ人がこのような行動をとるわけではないが，ここには非常に対照的な日本人とカナダ人の行動様式の違いを見ることができる。日本側は晩餐会という儀式を進行予定表どおりに進ませようとするが，カナダ人には上手く通じていないようである。仮に通じたとしても，日本側の期待通りに振る舞うのは，慣れていないことであり難しいかもしれない。個人的な思いを表現し，個人的な行動が基本にある。従って，少しサービス精神がある人であれば，例え市会議員であったとしても，上に述べられているようなパフォーマンスになっても不思議ではない。

このような非日本的な行動に出会った担当者は，おどろきながらも，その受け取り方は非常に柔軟である。「フランクに言いたいこと言うし，喋るし，非常に和みますね」と述べているように，肯定的な評価をしているのが分かる。たまたま，この担当者の方は「面白い方が良い，異文化を楽しもう」というタイプの方だったので，このような受け取り方をしたものと思われる。

しかし相手の行動の理解はできても，相手の土俵で相手の基本的なやり方に従って行動するのは容易なことではない。上の状況と逆の場合を考えてみるとよく分かる。日本では，ほとんどの場面において，何事も式次第に従って物事が進行していく。そのような日本的基準からすれば，公の場で個人的な行動様式を取ろうとしても極めて難しいことなのである。お互いが「ある程度」相手のやり方が実行できるようになるには，おそらく2～3年は相手方の社会で生活し基本的行動様式を身につけることが必要であると思われる。

6　ネクタイは必要なの？

服装についても，日本側とカナダ側の間で，次のような食い違いが生じる場合もある。しかし，カナダ側も日本側の習慣に合わせて，場違いなことが起こらないように気をつかっている様子が窺える。担当者の一人は，次のように述べている。

カチコチにはめ過ぎてもねー，日本人はスーツを着て，向こうは楽

な格好している時なんかあったりして，気まずいときなんかもありましたね。そんなことで，例えば，フレンドシップパーティーなんかでも向こうは気にしてるんですよね。服装はカジュアルなのかフォーマルなのか色々聞いてきますから[35]。

ここにも「向こうは楽な格好している時なんかもあったり」と述べられているように,一般的に言ってこのような状況が多いのではないだろうか。と言うのも，カナダ人にすれば「友達の所に行くんだ」からと考えるようであり，ネクタイを持ってこないこともよくあることである。

日本の場合は大体が儀式張ることが多いので，スーツにネクタイという姿が多いことになる。そのような状況下で，いくら「友達の所にいくんだ」とは言っても，日本人がスーツにネクタイの中，さすがにカナダ人であってもバツが悪い思いをするのである。普通は何度かそのような体験をして，上に触れられているように，「服装はカジュアルなのかフォーマルなのか」などと日本の状況に合った服装をしようと心がけるようである。このような状態が生まれるということは，そこにお互いに対する感受性の存在と両者の間でのコミュニケーションも良好な状態だということを示すものであろう。

II　ニューウエストミンスター中学生派遣団随行員として

守口よりニューウエストミンスターへ中学生を派遣する場合，市の職員一人と教員一人が引率して行き，現地でホームステイをしながら，生徒たちと行動を共にする。この随行する二人も，カナダ人やカナダ文化に接することになる。市職員の目，教員の目，あるいは日本の社会人としての目で，カナダを観察することになるが，一体，カナダのどのような側面をみて，どのように解釈したのであろうか。

---

[35] 同上。

1　街の中で ── 他人への関わり合い方

街の中を歩いているだけで，日本とは随分と人と人との関係が違うと感じるようである。随行の職員の方は次のような感想を述べている。

> 地形的にいうたら，傾斜があって，神戸みたいな感じですよ。あれほどきつうはないけど。朝早く起きて散歩していてもみんな散歩してはるし，外国人特有の会ったら全然知らない人でも「おはよう！Good Morning！」って言われれば，こっちも片言でも「Good Morning！」って返すでしょ。外国の人ってそういうのありますやんか。「ええなぁ」と思いました。日本人もこうじゃないとあかんわって。外国行く度にそう思います。日本に帰ってきて大阪で自分もしようかなと思っても相手がこんな顔していたら，ええかぁって[36]。

全くの見知らぬ者同士でも，朝の挨拶を交すという雰囲気は，ほんとうに日本には無い雰囲気である。日本では，朝の挨拶だけではなく，一般的に見ず知らずの他人に対して，挨拶を交すことは稀である。日本語での挨拶は，普通，顔見知りや仲間内で交されるものだからである。そのような日本社会を基準としてカナダ社会に触れると，ちょっとしたカルチャーショックである。そして，「気持ちが良いな。日本人もこうじゃないと！」と思って，大阪に帰って挨拶をしようとしても，やはり日本じゃ無理だと気づくのである。

2　1週間禁煙

タバコを吸う人は，毎日の生活の中で大きな環境の違いを感じることになる。それは，完璧と言えるほどに，喫煙者にとってはタバコを吸うことが「非常に肩身の狭い」思いをせざるをえないからである。職員の方は，次のような感想を述べている。

---

[36] 聞き取り調査：2005年9月22日。

タバコ，僕吸うけども。その時だけ，一週間向こう行った時だけ禁煙しましたけどね。タバコ吸う所がないんです。スーパーに行ったら自動販売機はあるんだけどね，若い子やったら必ず身分証明書を見せて，確認を絶対される。自動販売機の上に，汚いタバコ吸う人の肺の写真をカラーで，貼ってますもん。見ただけで，もうええわっていうような写真やからね。立ちタバコ，吸いながら，歩きながらタバコを吸う人はいてないしね。バンクーバーの街はいろんな国際色の人がおって，黒人，日本人，中国人おるからね。銜えタバコしていたりっていうのはありましたけどね[37]。

日本の分煙環境というのは，カナダの基準からすれば，生温いものである。そのような日本社会からカナダの禁煙社会に行くと，日本の喫煙者は一服するにも容易にタバコを吸う場所が見つからないので「タバコを吸うのが面倒になる」のであろう。さらに，灰皿も目につかないので，それこそポータブル灰皿のようなものを用意していかないことには，到底タバコを吸う勇気もでてこないことだろう。もう何十年も前でも，大都会では吸い殻が目についたが，地方の町では吸い殻も見当たらない。そんな所では，タバコを吸っても吸い殻を捨てる訳にはいかないので，ついに1週間タバコは吸わずに帰ってきましたという人も珍しくはない。

3　レストランでも，人懐っこい

日本人は，見知らぬ人に話しかけるということは，ほんとうに少ない。ところが，カナダの場合には，見知らぬ人に話しかけることは珍しいことではない。従って，レストランでも，次のように市の職員の方が経験したような事も起こりえる。

まぁ，外国行ったらいつも思うけれども，人懐っこいいいますか。

37　同上。

要するに，挨拶がすぐできる。僕らはビールが好きだから，レストランに入ってもビール飲みますやんか。横の人が全然知らんのに「どっから来たん？　どこ行くんや？」って。怖いですわ，ごっつい黒人とかおるからね。「お前，中国人か？」とかって。

食べ物は量がむこうはごっつい多いですからね。で，残りますやん。それで，「急ぐから帰る，これ食っとけ」みたいな感じで。何言うてるか，分かりますか？　僕はビール飲んでいるから，「お前まだ飲んでるんやったらこれ食っとけ」みたいな感じで。残ったものでも，フライドポテトみたいなもんやから，汚いわけもないやんか。そういうのが，ありましたね[38]。

日本とカナダでは随分と違う点が色々あるが，上のような状況は普通カナダでもトロントやバンクーバーなどの都会のレストランでは起こらないものと思われる。ちょっと町の中心を離れた「近隣の人が集まる」ような所では起こるかも知れない。

ここではレストランと述べられているが，カウンターに並んで座ったのかも知れない。それであれば，こんな風に会話が進行するのも自然である。ところが，日本であれば他人から話しかけられることはないし，こんな風に話しかけられると警戒をするのが普通である。まして，見知らぬ「ごっつい黒人」から話しかけられると，「怖いですわ」と言うのが正直な気持ちであろう。

さらに，町の中のレストランであれば，「食べきれなかった分」は持ち帰り用のドギーバッグに入れてもらうのが普通であり，上にあるように余った分を他の見知らぬ客に勧めるようなことも，ちょっと考えられない。カナダの場合でも都会から遠ざかれば，このような状況はあり得るものと思われる。

---

[38] 同上。

4　カナディアン・ホームステイ

随行する市の職員や引率の教員も，ニューウエストミンスターではホームステイを体験する。そこで日本とは異なるカナダ人の家庭の様々な側面を見ることになる。

(1)　普段の生活の中に

日本との大きな違いは，カナダでは「普段の生活の中に」受け入れるということである。引率の女性教員は，次のように表現している。

> 向こうの受け入れはる側は，お気軽にどうぞみたいな感じの扱いですが，日本の受け入れる人っていうのはそれなりの気構えで受け入れる。お客さんが来たら，高い物を飾ってみせるとか。その間の自分の行動も，お客さんを中心にやっぱり考えなきゃみたいな。この人を中心にして家庭のあれを組むっていう感じやけど，あちらはそうじゃない。あくまで自分の生活があって，そこに来ていただいても結構ですよって感じやから，自分のスタイルみたいなものをほとんど崩さないっていう感じが強いですよね。考えさせられましたね[39]。

日本では，外国のお客を迎えるとなると，家中の掃除をし，お客のスケジュールを中心に生活を変えることも多いのではないだろうか。そのような日本的なやり方からすると，カナダ流は全く異なっている。気構えることなく普段通りの生活をしながら客人を迎え，しかも自分たちの生活のリズムを狂わすことはない。実際に体験してみると，最初は戸惑いながらも，特別扱いはされないので喜楽に感じるかも知れない。いずれにせよ，日本とは異なるホストファミリーのあり方を知り，「考えさせられる」わけである。

さらに，肩肘を張らないだけではなく，例えば食事なんかも非常に気軽

---

[39] 聞き取り調査：9月21日。

な感じで親族や顔見知りの人たちの所で一緒に食べたりするのも，カナダの特徴と言えるだろう。前述の女性教師は，次のような説明をしている。

> 私が泊まったところは，食事は今日はここの人と，今日はこちらの人とみたいな感じでした。おばあさんのお家の時もあれば，ローリーさんのところもあったし，トニーさんってそのおばあさんの息子さん夫婦一緒に外でという時もあったし。それが予定されていたのかどうなのかは，ちょっと分かりませんが[40]。

顔見知り同士が，頻繁に行き来をして食事を一緒にしている様子が分かるし，カナダ人の人間関係も知ることができる。自分の家族だけでホストファミリーをしようとすれば，肩肘をはって頑張ることになるが，このような感じで気楽にホストファミリーができれば引き受けるのも簡単になるのではないだろうか。しかし，カナダ流のホストファミリーができるには，毎日５時には一緒に夕食ができるという時間的余裕と，気楽に行き来ができる人間関係の存在が必要条件としてなければならないのかも知れない。

⑵　多彩なホームステイ

ニューウエストミンスターでのホームステイは多種多様である。若いカップルの場合もあれば，独り暮らしのおばあさん宅や大家族の場合もある。そして，時には「居候」を抱えたホストファミリーという場合もある。かなり珍しいと思えるが，そのような所にステイした引率教員は，次のように述べている。

> そのローリーさんっていうお家がまたビックリしたことに，雑居していたんですよ。知人の方が。私と一緒にルームメートでいてはったんが，身寄りがない方っていうんで連れてきはった女の人やったんで

40　同上。

すよ。ほんで，もう一人，下の所では，別に猫の世話をするというか，そんなお友達が下の階に住んでいて，３人女の人がいてたんです。どんな関係なんでしょうみたいな感じだったです。で，そのあとに私と一緒にいたルームメートの人がローリーさんのお金を勝手に使い込んでしまった。それで「もう出て行け」ということで，えらいショック受けてはったけど。だから，すごいなんかビックリしたんです[41]。

ほんとうに，「ビックリした」という表現以外に適切な言葉はないと思われる。このローリーさんという方は市会議員をされている独身女性である。それだけであれば，極めて普通のことである。しかし，ここに述べられているように，身寄りのない知人の女性と，猫の世話をする女友達を居候させているのである。そして，守口からの女性教員は，居候をしている女性と相部屋になったのである。相部屋というからには，余った部屋もなかったということであり，小さな家のようである。

日本的な基準からすれば，あり得ないことである。しかし，カナダの場合には，大学生なんかは一軒家を借りて，見知らぬ学生たちと「シェアハウス」をすることも珍しくはない。その意味で，上では「雑居」と述べられているが，それほど違和感がないのかも知れない。しかし，現職の議員であるし，二人の居候を抱えており，その居候の一人の部屋を守口からのお客さんにシェアしてもらおうと言うのである。そのような状況下で，客人を迎えるということは日本的基準ではあり得ないことである。もちろん，ここでも議員と普通の一般人も変わりはないし，「普段の生活の中に」客人を迎えるのが「カナダ流」と考えれば，納得のいくことである。

(3)　ホストは91歳 ── 自立するカナダ人

そして，またしても驚かされるのは，守口市役所の職員の方のホストファミリーが，何と91歳の独り住まいのご婦人宅なのである。1週間お世話に

41　同上。

なったこの方は，次のように述べている。

若いですわ，しゃきっとしてはりますわ。最初，年齢聞くまで 80，90 なんて全然思いませんでしたね。お齢を聞いたときにびっくりしました。お一人で暮らしてるんですよ。その方だけかどうかはわかりませんけどね。日本ではごくまれなことが，こちらでは普通のことのようやったです。ただ，1 週間，10 日おって，お料理だってしてくれるし，2 階建ての一戸建てのお家なんですけれど，地下もあり，私は地下で泊まらせてもらいました。

昼間は生徒と一緒にセカンダリースクール行ったり，ダグラスカレッジ行ったりしてますわな。夜は向こうのパーティーとかに参加して，ほとんど朝だけですけどね，お母さんと一緒に食べるのはね。パンやハムエッグみたいなのとかね。おいしいですよ。お弁当も一回作ってもらったかな[42]。

私の単語だけを並べた英語にも真剣に耳を傾けていただき，NW の様子と守口市のことをお話しました。でも「I'm sorry.」「No problem.」ばかりの会話だったように思います[43]。

この老婦人の息子さん夫婦が近くに住んでいて，かなりホームステイの手助けをしたようであるが，ともかく上の職員の方は 1 週間という時間を，このご婦人と共に過ごしたのである。日本の基準では，まずは考えられないことである。これには同行した英語教員の方も驚いて，次のように述べている。

おばあさんは 90 幾つで，お独りで住んではったというその現実にま

---

[42] 聞き取り調査：9 月 22 日。

[43] 「姉妹都市派遣中学生報告書（2004 年），2 ページ。

ず，あぁ，歳をとってもひとりで自立するということ，生活をするということを基本に考えてはるっていうこと，どっかにすがって，頼ってというんじゃないっていうあたりでは，日本とはちょっと感覚としては違うから[44]。

さらに周りを見ると，子供たちが近くに住んでいながらも，カナダの老人は独り暮らしが多いという事実を知るのである。

ローリーさんは女性の方で，おひとりなんですよ。55を超えてるかなくらいですかね。そこも，近くに実のお母さんがいてはって，実のお母さんが，私らが行くっていうので来はったりとか，だからやっぱり年配の方が一人で生活してはるんでしょうね[45]。

「老いては子に従え」，もう古くなった言葉かも知れないが，日本では老いた親が子供と住むのは自然である。そのような日本人の考え方からすれば，カナダの親子関係の理解は難しいかも知れない。老齢の親とその子供が近くに居ながらも決して同じ家に住むことはない。近くに居て，離れて住んではいるが，いつも行き来がある。このように日本とは全く異なる現実を前にして，日本では考えられない親子関係が存在することを知るのである。そして，そこには「歳をとってもひとりで自立するということ」が，カナダ人の基本的な価値観であることを知るのである。まさに上の指摘は正しいと言える。もっとも，その価値観を理解するには，人間としてこの世に生まれでた時から，両親とは別の部屋で独りで寝かされるという原点からの理解が必要であろう。そして，自立するように育てられて，大学に行くともなれば自宅から通えるとしても家をでて独り住まいをするのが普通である。そうであるからこそ，歳をとっても子供とは離れて暮らすこと

44　聞き取り調査：9月21日。

45　同上。

は極々普通のことなのである。

(4)　ホームステイでの食事

食事もホストファミリーが何系のカナダ人なのかによって，随分と異なってくる。中国系カナダ人とかフィリピン系人の家庭にホームステイした場合には，割と日本人の口に合うようである。さて，それでは随行の人たちの場合はどうだったのだろうか。

> 内容は，だいたいオーソドックスなお肉とサラダ，ポテトっていう感じでした。量は，家庭で食べる場合は「自分で取りなさい」という形式だから，自分の量に合わせて取りましたけどね。さすがに食後の甘いものが，これがもう食べられへん。「何でこんな甘いもん食べるの！」とか思って。エェーと，おばあさんのところはイギリス系でした。ローリーさんはドイツ系の感じ。だいたい甘いものはたっぷりやからね。子供らはやっぱり食べきられへんって言うてましたね[46]。

肉とサラダとポテトという具合で，味付けには問題がなかったようである。なかなか最初からお皿に盛られてだされると，量が多すぎても断りきれない場合がよくあるが，この場合には大皿から好きなだけ自分で取り分ける形式だったので，量の点でも問題はなかったようである。もちろん，そうではなくても，この方は英語の先生だったので，そのような問題も起こらなかったことだろう。ただし，生徒たちの場合には，どうも断りきれなかった生徒もいた模様が読み取れる。味も良し，量も良しではあったものの，やはり食後のデザートは問題であったようだ。いきなり，「何でこんな甘いもん食べるの！」と叫びたくなるような甘さに出会った訳である。多分，自家製のケーキだと思われるが，日本のケーキと形は同じであるがサイズは大きい。ただそれだけかと思って一口食べると，水で流し込まな

---

[46] 同上。

いとならないほどの甘さである。日本人の口に合うのは，ハンガリー系とかドイツ系のケーキであるが，ケーキにもこんなにも甘いケーキがあるのだという発見は，かなりのカルチャーショックである。

5　カナダの教室で

引率の教員は，中学生たちと一緒にニューウエストミンスターのセカンダリースクールを訪れる。そこで，守口の生徒たちは，ドラマのクラスや日本語のクラスにカナダ人の生徒と一緒に参加するのである。そこで，引率教員が見たもの，感じたことは，次のような言葉で語られている。

> 子供のコミュニケーション能力は大人に比べてすごく高いですよね。言葉じゃないもので通じ合わそうとするから，あれはやっぱり若いときじゃないとできへんなぁと思いました。私らみたいにある程度言葉が喋れたら，言葉で勝負しなきゃみたいに思ってしまって。子供らは逆に知らなくてもどんどん，「こういう時はどう言うたらええの？」とか言うから「こうこうこう言い。」と言うたら，その言葉をどんどん使いだすしね[47]。

ドラマのクラスには，ゲームを通してコミュニケーションが取れるような仕組みがあったようであるが，この教員は「地元の学生たちと積極的にコミュニケーションをはかろうとする姿勢に，若者の持つ可能性を見た気がしました。」と語っている。言葉だけに頼る授業ではなくて，ゲーム的な要素を取り入れ，守口の生徒たちにも参加しやすいような考慮がなされているところが素晴らしいと言える。また日本語のクラスについて，次の様に述べている。

> 日本語のクラスに私達が行って，授業をするっていうのがあったん

---

[47] 同上。

> です。一応，私の方で日本の文化をクラスの生徒に教えてあげてねっていうことで，折紙をやってみたり，剣玉をやってみたり，自分の得意とするものを教えてあげるっていうのをやったんですけれど，そうすると子供らは自分の土俵に乗っけられるから，「こうして，ああして。」って簡単に積極的にコミュニケーションが図れる。それがおもしろいなと思いましたね[48]。

これも非常に効果的な組み合わせである。カナダ側の日本語のクラスに行って，剣玉や綾取りなどの日本文化を教えるというのである。カナダ側の生徒たちは日本文化への興味と関心があり学ぶ意欲は旺盛である。一方，日本人の生徒たちは，自分たちの「土俵」で相手に教えることができるのである。しかも，言葉を使わなくても，身振り手振りで教えることができるのである。こうして，子供たちは「伝える面白さ」を知り，文化を越える実感を味わった時に，大きな自信を得ることになる。

引率の教員にとっても，自分の生徒たちが上のような体験をするのを見ることができるのは非常に貴重なことである。そして，教員自身も日本では得られない次のような視点を得るのである。

> 案外私が中学校で見ていて，すごい成績の優秀な子でも，ものすごい慎重派な子やったら中に入ってもアカン。全然ダメ。それよりも，言葉なんか喋れんでも，「自分こんなんできんねん，あんなんできんねん。」って言える子はやっぱり強いね。そんなところにポーンと放たれても大丈夫。これ，ほんまに面白いです[49]。

やはり，餅は餅屋。教員は教員の目で見ているのである。子供たちが異

---

48 同上。

49 同上。

文化の中で生き生きと行動し，成長していく様を見るのは，この上ない喜びである。プログラムに関わる現職の教員が，このように現地で子供たちの行動の実体を見ることの意味は非常に大きい。それにより，これからのプログラムを自信と信念を持って進めていくことができるからである。

6　市長を表敬訪問して

(1)「市長らしくない」市長

相手方の市長を表敬訪問するのも，大事な行事の一つである。日本では，市長に会うこと自体が大変なことである。しかし，緊張しながら実際に市長に会ってみると，かなり異なった印象をいだくのである。次の言葉は引率教員の感じた印象である。

> 日本と比べれば立派な建物なんです。市長さんとの対応がざっくばらんな感じで，直接，言うてはったのが，「若い子と一緒にこうしていられることが僕としてはすごい嬉しい，一緒に話をしたりするのが嬉しいんです。」みたいな感じで。その辺，文化の違いみたいなのを感じましたけどね。生徒たちは，議会の中を歩きまわったりし，市長さんのお部屋に案内してもらって，みんな市長さんと一緒に写真を撮ったり，サインして～みたいな感じですよね[50]。

そして，市役所内の一室で，付き添いの教員と生徒たちは市長と昼食をともにするのである。その時の模様を，教員の方は次のように述べている。

> 市役所の一室の会議室で，そんなに大きい会議室じゃなかったけど。お昼の用意しておいて下さってたんです。お寿司とか，サンドイッチとかジュース。なんかカジュアルな感じで，エライ人の話しとか，誰の話もなかったです。いきなり始まっていたみたいな感じでしたよ。

---

[50] 同上。

もし守口に来てもらうんやったら，ほんとに食べて，話してって感じでやれるとね[51]。

やはり一般の日本人が，このような感じで市長と話し合い，昼食までも共にするという状況は，今までに経験したことがないことで，ある意味カルチャーショックな出来事である。日本では，普通，市長とかに会うこと自体限られており，一般市民との距離感があるのではないだろうか。それが，カナダでは，中学生との関係もフランクで距離感がなく，フラットな関係なのである。しかも日本では当たり前の儀式めいた事柄も堅苦しいスピーチもないのだ。カナダという異文化との出会いと言っても良いだろう。そして，「こんなやり方もあるんだ」と感じるのだ。だから，付き添った教員の方は，「もし守口に来てもらうんやったら，ほんとに食べて，話してって感じでやれるとね。」と述べているように，カナダ流を見習おうとしている様子がうかがえる。

⑵ 「君が代」を歌うということ

日本の中学生たちが，君が代を歌うという機会は入学式や卒業式以外にはないのではないだろうか。その時にすら，問題が完全に解決されている訳ではない。観光でカナダに行くような場合には，カナダで日本の国歌を歌うような機会はまずないと言って良いだろう。しかし，姉妹都市の訪問のような場合には，そのような機会にでくわすことも少なくない。ニューウエストミンスターを訪問した中学生の場合にも，そのようなことが起きている。議会を見学してから議長と市長の挨拶があり，カナダ側から国歌の交換をという提案があり，〝O Canada〞を歌いだしたのである。その場に居た教員は，その時の模様を次のように語っている。

今回もあったんですよ。最初，市長さんの所に行く時に，そこで，

---

51 同上。

私達お互いに国歌を交換しましょうというので，ほんで，4人で日本の国歌を歌って下さいって，もう，子供ら慣れてないでしょ。子供らは一応,歌っていましたけどね。向こうの国歌はこっちの国歌のイメージとは全然違うから，そういう時に一緒に交換をする歌のレベルとはちょっとやっぱり違うちゅう感じです。「さくらさくら」くらいやったら子供らも，もうちょっと歌えるかなみたいな感じ[52]。

同行した守口市の職員の方も，次のような感想を述べている。

議場行って議長さんの挨拶，市長さんの挨拶があって，エールの交換をしましょうと。向こうがね，国歌を歌い始めたんです。みんなで。こっちも国歌をね，歌うことになったんですけど，いろいろ考えさせられますでしょ。いろいろ考えさせられるけど，まぁ，歌いましたけどね[53]。

カナダ側からの提案は,国と国との関係では普通のことであり,特に変ったことではない。カナダの国歌〝O Canada〞は，編曲することが許されている。事実，フォーク・バージョンとかバラード・バージョン，インスツルメンタルなど，様々なバージョンが存在している。フォーク・バージョンなどは，普通のポピュラーソングと変らないような感じなので，リビングのステレオで聞いても iPod で聞いても違和感はない。〝O Canada〞は，カナダ人にとって，非常に身近な存在なのである。従って，カナダのこのような事情から，国歌の交換をとの申し出は，不思議ではない。しかし，日本国内の入学式や卒業式では，教育委員会の指導により君が代斉唱が何とか実施されるという事実がある。子供たちは，しっかりと教わったこともないし，周りの状況を気にせずに歌ったこともないのである。

---

[52] 同上。

[53] 聞き取り調査：9月22日。

このような複雑な事情を，カナダ側に伝えることは非常に困難であるし，ほとんどの自治体は「この問題」には手を付けずに放置しているのが現状である。上で教員が述べているように，『さくらさくら』であれば，違和感なく歌えそうだと述べているが，問題解決にあたり妥当な案かも知れない。

7　カナダ的歓迎パーティー

市長を表敬訪問し一緒に食事をするということも驚きであるが，一般的な歓迎パーティもやはり日本人にとっては新しい経験である。教員の方は，次のように語っている。

> みんなの持ち寄り形式でした。カリフォルニア巻が出されましたね。一人１つずつ家から作ったのを持ってきたり，注文したりしたのを持ってきてはりましたわ。日本の留学生がボランティアでお手伝いして，その子らがカリフォルニア巻を作ってくれたそうです。日本の巻き方と違ってましたけども[54]。

これもカナダ文化である。こんな風に，一人一品ずつ料理を持ち寄るパーティ形式はカナダでは普通のことであるが，日本では学生を歓迎する場合でもホテルで行うことが一般的である。担当者の一人が「40 周年とかの記念式典はやはりシッカリしなきゃあかんですけれども，学生同士とかについては，『みんな何か持ってきて！　向こうにも何か一つ作ってね！』っていうようなので良いかも。[55]」との感想を述べている。会場さえ手配できれば，費用の面でも安く押さえることができるので，経費削減の風潮の中では適切な方法かも知れない。しかし，料理を一品ずつ用意するということは，自分たちが動かしているんだという「当事者意識」が必要である。このような文化がない日本では，カナダ式パーティ形式を取り入れるには，かなり時間がかかるかも知れない。

---

[54] 聞き取り調査：9 月 21 日。

[55] 同上。

8　カナダ人の車のマナー

初めてカナダに行く随行の人たちにとって，カナダでは見るもの聞くもの，ほんとうに驚くことが多い。そのような中でも，単なる観光客としては経験することができないような事柄を，ホストファミリーと共に行動することにより初めて出会う事もあるようだ。随行の職員の方は，次のように述べている。

> 驚いたのが，こちらの車社会のマナーです。NWは坂道ばかりの街で，必ずと言って良いほど移動するときは，車を利用しています。私が，お世話になったおばあちゃんの家から歩いて2分程のところに，今回ご一緒させて頂いた「S先生」が滞在しておられました。先生はNWの女性市会議員「ロリー・ウィリアムス」さんのお宅にお世話になっていました。
>
> ロリーさんの家からおばあちゃんの家まで帰る途中での出来事です。おばあちゃんの家から3軒ほど手前の家の方が，その時，道路に車を止めてガレージで何か作業をしているようでした。道が狭いので，車が通ることができない状態でした。トニーさんは，躊躇無く車のギャーをバックに入れ，さっさとバックして大通りに出て，大回りし，反対側からおばあちゃんの家に送ってくれました。このときのトニーさんの行動が日本人に無いことのように感じました。
>
> 相手を思いやるために，自分の取るべき行動が何の躊躇もなくスムーズにそして平気に習慣として身に付いているように感じました[56]。

このような状況が大阪あたりで起こったとしたら，「動かせよって『プップッ』とクラクションを鳴らす」ので，トニーさんがバックをして遠回り

---

[56]「姉妹都市派遣中学生報告書（2004年)」，2－3ページ。

をしたことに驚いたのである。そして，トニーさんに尋ねると，「それは普通やん，何驚いてんねん？　別に急ぐ用事もないんやから，遠回りしてこっちから入りましたねん。」って言われて，感心したとのことである[57]。

筆者はニューウエストミンスターを訪れたことはないが，上の説明から分かることは，坂が多い街であり，歩いて２～３分の距離でも車で移動するのが当たり前のようである。つまり，車は完全に足の役割を果たしている。車では１分あれば，１キロは移動できる。従って，歩いて２～３分の距離であれば，バックして多少大回りをしても，２～３分余計にかかるだけである。そして，恐らく大半のカナダ人は上に書かれているような行動をとるものと思われる。その理由は，時間があまり変らないのと，次のようなカナダの車文化によるところが大きいと思われるからである。

カナダの車文化は，日本の車文化とは大いに異なっている。簡単に言えば，「車が威張っていない」社会である。例えば，横断歩道の道路端に人が立った場合，車は必ず止まってくれる。これは交通法規である。日本も同じような交通法規はあるが，車は止まってはくれない。さらに，カナダでは横断歩道のない普通の道路の端に立った場合でも，車が止まるのは普通のことである。そして，「我が物顔」に運転するのではなく，〝defensive driving〟という考え方が浸透しており，〝Yield（譲れ）〟と書かれた交通標識もよく目にするし，そんな時には止まって相手に譲る車が普通である。

「車が威張っている」日本社会から「車が威張っていない」カナダに来ると，この職員の方のように，あまりにも大きな違いに驚いても無理はない。日本国内でも，地域によって運転の仕方に特徴があるが，この職員のよく知っている守口や大阪の周辺では，かなり荒っぽい運転をするのではないだろうか。もし，そうだとすれば，驚きも倍増したものと思われる。

9　カナダ人への親近感

引率された教員の方は，以前守口で一緒に仕事をしたことがあるALTに再会したとのことである。このALTと上手く仕事ができたせいも大き

---

[57] 聞き取り調査：９月22日。

いと思われるが，ニューウエストミンスターで出会ったカナダ人一般に好印象を抱いているようである。その理由を，次のように述べている。

> たくさんの人と出会ったわけじゃないから，カナダ人はこうだとは言えないんでしょうけど……バンクーバーから守口にALTで来てて，結構たくさん一緒に仕事をしていた人がいるんです。その人が，またバンクーバーに戻ってはって，会ったんです。ちょうどこのツアーの日にも一緒に参加してくれはったんですよ。「子供らにも会いたいから」って。やっぱり，ものすごい気さくな感じやから，よかったですよ。人柄がいいし，アジアの方に町全体が向いているでしょ。西に向いているでしょ？　一緒に仕事をしている時なんかは，やっぱり，バンクーバーの人たちやカナダのこっち側の人って言うのは，すごい親しみが持てる。それは，イギリスの人とかアメリカの人とは違う感覚がありますわ。仲間っていう感じがするから，受け入れてくれる感じがする。本当に私達の方向に向かって面しているんやっていう感じが伝わってくる。土地柄，こっちに割と仕事を求めている人が多いですよね[58]。

ここでは「すごい親しみが持てる」とか「ものすごい気さくな感じ」という言葉で表現している。「仲間っていう感じがする」とか，「受け入れてくれる感じがする」という言葉も使われている。そして，同じように英語を話す「イギリスの人とかアメリカの人とは違う感覚がありますわ」と述べている。距離をおいてなかなか親しくなれないイギリス人，そしてグイグイとこちらの中まで入ってくるアメリカ人，このように考えると，カナダ人はイギリス人とアメリカ人とのちょうど中間ぐらいで，日本人にとっては「ちょうど良い距離感」であるのかも知れない。そして，とりわけバンクーバーを中心とした西海岸の人々は，日本に対して興味関心を抱いて

---

[58] 聞き取り調査：9月21日。普通，車で2～3時間の所であれば，車を飛ばして会いにきてくれる。

おり，親近感も持っている。そして，実際には，このALTのように日本人と一緒に仕事をした経験のある場合には，非常に親しみを感じるのだろう。それは，「子供らにも会いたいから」と言って，会いにきてくれるといった行動にも現れていると言えよう。

第3章　中学生の見たニューウエストミンスター

わずか1週間のカナダ異文化体験ではあるが，守口の中学生たちが受ける影響は極めて大きい。ここでは，中学生たちはカナダの何を見て，どのように考え，具体的にどのような影響を受けたのかを見ていこう。

Ⅰ　初めてのカナダ

ほとんどの生徒は，海外は初めて，飛行機に乗るのは初めて，家を離れるのは初めて，ホームステイは初めて，と初めて尽くしであり，まさに期待と不安と緊張を抱きながらカナダへと向かう。そして眼下にバンクーバーの街並が広がってくると，感激と興奮に包まれるのである。初めてのカナダに降り立ち，空港を出てバンクーバーの街並に触れ，生徒たちは何を見てどのように感じたのであろうか。その時の気持ちを次のような言葉で表現している。

> 飛行機に乗るのも外国に行くのも初めてで，すごくワクワクしていました。空から見たバンクーバーは本当に外国だぁと思いました[59]。

> テレビや写真でしか見た事がない外国。たまに「本当にあるのか？」とか思っていた私にとって，全てが新しく見えた[60]。

---

[59] 「姉妹都市派遣中学生報告書（2004年）」，9ページ。

[60] 同上，4ページ。

カナダの空気を吸った瞬間，10時間に及ぶ長いフライトの影響もあり，私は感動した。私の念願であった，カナダの大地を踏んでいるのだ。バンクーバーの街を徘徊している間中，興奮が冷めなかった。すべての物がとても大きく，そして急な坂道や広い道路に圧倒されていた。また歩行者が少なく，日本の人口密度の高さを改めて実感させられた[61]。

そして9時間のフライトを経てカナダのバンクーバーに到着。私はまず広大な土地，緑の多さに驚きました[62]。

そして，なぜか心が広うなるような気がした。物が大きく広いということも要因の一つだと思うが，やはり自然が多いからだろう[63]。

「初めてのカナダ」との出会いとその興奮した様子が伝わってくる。目に入ってくるもの全てが見慣れた守口とは異なっているのだ。広大な土地と緑の多さ，広い道路に少ない歩行者。圧倒的な自然とゆったりとした空間。そんな環境の中では，同じ人間であっても感じ方が異なるという感覚を意識している。それは，「なぜか心が広うなるような気がした」と述べている生徒の言葉に現れている。

不安な気持ちを持ちながらも，初めての環境の中に入っていき，段々と慣れて行く。些細なことではあるが，このプロセスを通過する意味は大きい。この感覚の一つひとつが経験となり，「今までの自分の世界」の枠を越えることになるのである。

---

61 「姉妹都市派遣中学生報告書（2001年）」，3ページ。
62 「姉妹都市派遣中学生報告書（2004年）」，14ページ。
63 「姉妹都市派遣中学生報告書（2001年）」，3ページ。

II　カナダの街の中で

空港の外にでて，街の中を歩いて目に入ったカナダは，どのようなものだったのだろうか。生徒たちの目には，どのようなカナダが映ったのだろうか。まずは生徒たちの目に映ったカナダのいくつかの側面を取りあげて，どのように観察しているのかを見てみよう。

(1)　街の景観と自然

家と家との隙間がちゃんとあった[64]。

家の周りの道路，公園，何もかも日本より大きくて感動した[65]。

カナダは，自然が豊かで，各家には必ず広い庭があって，芝生もきれいに整えられていて，家の前の道路もすごく広い[66]。

日本とカナダの違いを一言で言うと，やっぱり自然だった。緑がたくさんあり，その中にかわいい家が点々とあった。車がブンブン走り，排気ガスでけむい日本とはだいぶ違っていた。日本にもどって風景を見た時，本当に日本がいやになった[67]。

カナダはとても自然が多い所で，日本みたいにせせこましいイメージはぜんぜんなかった。車に乗っていると，映画の撮影をしている所も見れて，友達とキャーキャー騒いだりもしてたのしかった。カナダはよく映画の撮影に使われるらしい。それもカナダの魅力である[68]。

---

64 「姉妹都市派遣中学生報告書（2004 年）」，4 ページ。
65 「姉妹都市派遣中学生報告書（2001 年）」，14 ページ。
66 「姉妹都市派遣中学生報告書（1999 年）」，2 ページ。
67 同上，11 ページ。
68 同上，7 ページ。

(2)　国旗

私が今回の旅で目についたのは，いたる所にかかげてあるカナダの国旗。多分，みんなすごくカナダに対する愛国心が強いのだろうと思いました[69]。

(3)　スーパーで

楽しい事，驚かされた事は山ほど！　スーパーのレジにベルトコンベアーがあった。お菓子の袋が日本と比べたらいけないぐらい大きかった[70]。

(4)　多民族社会

カナダは多民族国家ではありませんが，それに似たような感覚を持ちました。中国，日系の人は街中で何度も見ましたし，アメリカ系の人はもちろん，私がホームステイした家族はフィリピン出身だと言っていました[71]。

もう一つ，驚いたことがある。バンクーバーには白人以外の人種，特にアジア人が多いということだ。そして彼らは英語を現地の人と同じように話す[72]。

(5)　自由なカナダ

学校だけではなくて街全体の雰囲気がそう（自由）でビックリもした。けっこう寒い日とかでもヨユーで半そでで歩いているし，そうい

69　同上，2ページ。

70　「姉妹都市派遣中学生報告書（2004年)」，4ページ。

71　同上，8ページ。

72　「姉妹都市派遣中学生報告書（2001年)」，3ページ。

うのがとてもいいなぁと思った[73]。

街の景観や自然，国旗，スーパーの店内，人種など，日本とは異なるさまざまな側面が目に入ってくるのである。ゆったりとした街並が目に入ると，守口では隣の家との間に隙間がないのが当たり前であり，「家と家との隙間がちゃんとあった」という表現が口をついてでてくるのである。街の中にも自然が沢山あるカナダと，ついつい「車がブンブン走り，排気ガスでけむい日本」を比べてしまうと，「本当に日本がいやになった」というのも無理はない。空を見上げればメイプル・リーフが否が応でも目に入ってくるので，当然のことながらカナダ人は愛国心が強いのだろうと考えてしまうが，これがキッカケとなりカナダの国旗の歴史を考え，日本の日の丸のことをも考えるようになるかも知れない。スーパーでも，自然と目に入るのは，レジ係が次の客の商品を手許に運ぶベルトコンベアーや日本では見たこともない大きな袋に入ったお菓子の類いであるが，さらにもう少し滞在すればレジの応対の仕方も日本と随分と異なっているのに気がつくかも知れない。そして，多様な人種も目につき，アジア人も「英語を現地の人と同じように話す」と驚いているが，ここから多民族が共存しようとしている社会であることを認識するであろう。さらに，日本のように「衣替え」があり，ほとんど同じような服装をしている社会から来ると，服装の違いにも目が行くことになる。「他人の目を意識することなく」，着るものは自分で決める社会に「自由」を感じるのである。このように子供たちは，子供たちなりに，日本とは異なるカナダ社会に出会い，その特徴を理解しようとしているのが分かる。

Ⅲ　ホストファミリーとの対面

生徒たちは，セカンダリースクールでホストファミリーと初対面をし，

---

[73] 同上，9ページ。

その後それぞれの家に向かうことになる。ホストファミリーのいくつかは，既に守口で滞在しており顔見知りの場合もある。このような場合，既に知っている子供の家へいくのであるから，割とリラックスして対面することになる[74]。しかし，全く初めての場合は，ドキドキしながら対面し，緊張してホストファミリーの家庭に入っていくのが普通である。

1　緊張する初めての出会い

初めてホストファミリーと出会う緊張した様子を，子供たちは次のように述べている。

> はじめは，すごく緊張して，ホストファミリーの人々と，どう接していいのか，どう話したらいいのかわからなくてすごく大変でした。でも，しばらくたつとどんどんしゃべれるようになりました[75]。

> カナダに着いて対面したホストファミリーのマッケイ一家は，とても楽しく，おもしろい一家だった。両親と子供3人の5人家族で，みんなが私を暖かくむかえてくれた。同い年のブリアンはとても大人っぽく見えた[76]。

> 会ってみると，私と同じ歳の子供がいて，すごく大人っぽくてびっくりしました[77]。

> ホストファミリーと対面し，家に帰りついた。初対面の人にはつかみが肝心と思った私は，頑張って知っている単語を選んで自分の事を

---

74 「姉妹都市派遣中学生報告書（1999年）」，2，14ページ。「姉妹都市派遣中学生報告書（2004年）」，19ページ。

75 「姉妹都市派遣中学生報告書（2001年）」，8ページ。

76 同上，11ページ。

77 同上，13ページ。

いっぱい喋った(つもり)，精一杯さが通じ，つかみはOKといったところだ[78]。

ホストファミリーと初のご対面！　ホストマザーが私のコトを見つけてくれて，帰りの車でもいろいろ会話をしてくれた。娘は私と同じ13歳で，家には『ヨシ』という犬もいてスゴイ家庭的な家族だった。その日の夜はキャンディス（娘）とダンスパーティーに行った[79]。

大体みんな緊張する初対面を無事乗り越えて，何とか次のステップに進んでいるようである。ここにもあるように，同じ歳であれば，カナダ人の方が「大人っぽく」見えるのが普通である。温かく迎え入れられて，積極的に話しかけようとする姿勢も見られる。また，その日の夜に早くもホストファミリーの娘とダンスパーティーに行ったという非常に積極的な行動をとった子もいる。

2　ホストファミリーは顔見知り

既に守口でホストファミリーとしてカナダの生徒を世話したことがあり，今度はそのカナダ人の生徒の家にホームステイをする場合は，比較的精神的にも余裕があるようである。その子たちは，次のような感想を述べている。

3月25日に，カナダへ旅立つ10日前ぐらいに，僕がお世話になることになったホストファミリーの三男坊，ラヒームという同じ年の子が僕の家にホームステイにきていました。そのおかげで，カナダに着いて，デジャファミリーと対面した時，リラックスできたと思います。そして，1日目からどんどんデジャ色に染まっていき，話したり，日

78　同上，10ページ。

79　「姉妹都市派遣中学生報告書（1999年）」，3ページ。

本の遊びを教えたりしていました。

そのせいか，僕の記憶の中では「カナダ＝デジャファミリー」という公式ができあがるほど印象に残っているし，好きになりました[80]。

私達がカナダへ行く前に逆にカナダからも学生が来た。私の家にもカティナという女の子が来ました。はっきり言って辞書なしには会話はできなかった。でもだんだん日が進むにつれて，カティナの言っている事がわかるようになっていた。そして，私がカナダへ行った時には，カティナの家にホームステイすると聞きました。全く知らない人の所へいくよりは，知っている人のほうがいいと思っていたから安心しました[81]。

私がお世話になったホストファミリーの一員であるヘザーは，一年半前の私の家に一週間ホームステイをしていた女の子です。私は，ヘザーにもう一度会えてとてもうれしかったです。しかし，私はお父さん達とは初めて会うので，「どんなひとやろ？」と不安でいっぱいでしたが，みんなすごくあたたかい人達でしたのですごく安心しました[82]。

この他にも，同じようにホームステイで引き受けた子供の家庭でステイする子供たちもかなりいるが，馬が合わないとか，嫌いだというようなケースは見られない。やはり既にホームステイで世話をした子供の家庭に行く場合は，かなり精神的にリラックスできるようである。中には上の最初の例のように，「カナダ＝デジャファミリー」とまで言うほどの緊密な関係になる場合も見られる。全体として，ホームステイの決め方が上手く機能していると言えるだろう。

80　同上，14ページ。

81　同上，10ページ。

82　「姉妹都市派遣中学生報告書（2004年)」，19ページ。

Ⅳ　ホームステイにて

1　ホームステイで知る習慣の違い

習慣の違いは，文化が違えばつきものである。今まで聞いたこととか，頭の中では分かっていたことでも，実際その場に立ち会ってみると，戸惑うことも多いようだ。生徒たちは，その時の気持ちを次のように述べている。

> 家に着いて靴で家に入るのはなんかドキドキしました。家族は4人家族で，みんな私達を歓迎してくれました[83]。

> たった6日間でしたが，〝カナダ〟と〝日本〟との文化の違いや，習慣の違い（特に，家に入っても靴のままというのには，再度驚きました。）をたくさん学ぶことができ，少し視野が広がった気がします。楽しいそして，これからの自分の為になる6日間でした[84]。

> ホストファミリーの生活模様は予想していたものとは異なっていた。まず，家の中では常に靴を履いていると思っていたが，私がお世話になった家庭ではアジア系の家族ではなかったのに，土足と靴下で歩く部分の境界線がはっきりしてないにしてもちゃんと靴をぬいでいた[85]。

生まれてこのかた家に入る時には靴を脱ぐのが日本の常識である。ところが，家の中では靴を履いたままということが事実として分かっていたとしても，なかなか感覚的についていかないのである。さらに，カナダでは全ての家庭で靴を履いたままだと思っていると，家の中では靴を脱いでい

---

[83] 同上，13ページ。
[84] 「姉妹都市派遣中学生報告書（1999年）」，16ページ。
[85] 「姉妹都市派遣中学生報告書（2004年）」，11ページ。

る家庭にホームステイをして驚くのである。ところが，家の中では靴を脱いでいるものの，必ずしも日本人のように「土足と靴下で歩く部分の境界線」が明確ではないとの観察は的確である。つまり，日本の玄関に相当する場所がないので，靴を脱ぐ場所は決まってはいない。また，裸足や靴下のまま，ちょっと庭にでて，そのまま足を拭かずに家の中に入ることもあり，日本人の感覚とは異なっているということである。

さて，ホームステイにより靴を脱いだり履いたりする違いはあるが，これは基本的には見ていて分かることなので真似をすればよい。ところが，お風呂やシャワーの場合には，自分一人で入るので，聞かなければ分からないこともある。ある生徒の場合には，次のように述べている。

> 困ったことがもう一つあった。それはおふろ。シャワーの使い方が自分の家とちがっていて，どう使うのか分からなかったり，シャワーカーテンも,「これでいいのかな？」とか思ったりして大変だった。やっぱり１日の疲れをとるにはお湯につかって，のほほーんとするのが一番だってあらためて思った[86]。

本当に一日の終わりには湯船につかって「のほほーん」として疲れを取りたいというのが日本人の一般的な思いではないだろうか。ところが，カナダでは普通湯船に湯を張って首まで浸かるという習慣はないので，湯船も浅いことが多い。シャワーカーテンも日本のお風呂には付いていないので使い方が分からないかも知れないが，基本的にシャワーの水を湯船の外に飛ばさないためのものであるから，論理的に考えれば分かりやすいかもしれない。しかし，シャワーとなると，水をだすレバーの操作方法が日本の場合と根本的に異なっている。「押したり，引いたり，回したり」するので，日本人にとっては戸惑うことが多いようである。この生徒の場合も，

---

[86] 「姉妹都市派遣中学生報告書（2001年)」，11ページ。

気軽に尋ねれば解決したと思われるが，どうも大変な思いをしたようである。

さらに，トイレのドアについても，日本とは使い方が異なっているのをホームステイ先で知った生徒もいる。

> 向こうの習慣を知った事です。例えば…… Bath Room などの扉は，いない時には開けておくなどと僕にとってプラスになったと思います[87]。

ここに書かれているところから判断してみると，これはホストファミリーに教わったことだと思われる。カナダ人にすれば，トイレのドアは使用していない時には開けておくのである。ところが，日本人が使った後は，誰も中に居ないのにドアを閉めてしまうのである。これでは，カナダ人にとっては「使用中」という意味であり，トイレが使えないということになる。恐らく，このホストファミリーは，そのような経験を既にしており，この中学生に対してカナダの習慣を教えたものであろう。

生徒たちは色々と日本の習慣と異なるところを観察しているが，次のような点を指摘している生徒もいる。

> このホームステイで，私はいろんな文化の違いを見ることができた。例えば，トイレットペーパーをセットする向きが逆だった……。口ではうまく説明できないけれど，とりあえず逆だった。ほかにもいろんな違いがあって驚くばかりの毎日だった。それはみんなも同じだったと思う[88]。

ここでは，トイレットペーパーのセットの仕方が逆だということである。しかし，どうもこの解釈は無理があると思われる。トイレットペーパーは，

---

[87] 同上，15 ページ。

[88] 同上， 9 ページ。

トイレットペーパー・ホールダー

カナダも日本もロール式の紙で，それを適当な長さに切って使うだけである。ペーパーホールダーの上に金属部分がついているのが一般的だが，その端を使って紙を切りやすいようにトイレットペーパーをセットするのが普通である。カナダのトイレットペーパー・ホールダーは，上に述べたシャワーのレバーとは異なり，日本のものと同様の作りが普通である。筆者はカナダに7年間住んでいたが，トイレットペーパーの切り方で困った経験は一度もない。ちなみに，トイレットペーパーによると，ごく稀に写真のようなタイプ[89]もある。この場合には，ペーパーを反対にセットする方が切りやすいので，切るのには問題はない。このようなタイプはネットのカタログには掲載されてはいるが，実際にお目にかかったことはない。そこで，考えて見ると，日本のトイレの場合にも時たまペーパーを逆にセットしているトイレに遭遇する時がある。これは，向きも何も考えずにセットしたような場合であろう。本来とは逆の方向にセットされているのだから，非常に使いづらい。おそらく，このようにカナダのホームステイでも，子供かあるいは大人であっても，何も考えずに間違ってセットした可能性が高いと思われる。そうだとすると，それは「文化の違い」でも「習慣の違い」でもないのである。

---

[89] AMAZON, http://www.amazon.com/InterDesign-Classico-Over-Tank-Tissue-Holder/dp/B000SQMDTC/ref＝sr_1_11?ie＝UTF8&qid＝1350284866&sr＝8-11&keywords＝TOILET＋TISSUE＋HOLDER

2　ホストファミリーとのコミュニケーション

ホームステイは生徒たちが一番待ち望んでいる事柄だ。同時に，カナダ人の家庭に入り英語で上手くコミュニケーションができるのだろうかという不安も大きい。ごく稀には,「ホームステイの面ではなに不自由なく暮らすことができ……言語や国を隔て，共に生活するということはとても素晴らしいことだ」と述べるような生徒もいる[90]。しかし，ほとんどの生徒たちは，初めての英語でのコミュニケーションに直面し，何とか乗り越えていくのである。その様子を見てみよう。

(1)　バンバンしゃべる

最初は緊張のあまり，言葉がでてこない生徒たちも多い。しかし，2～3日もすれば大体慣れてくるようだ。中には，次のような元気な生徒もいる。

> 何かめっちゃ良い人ッぽかったので，安心しました。ホストファミリーとの会話を心配しまくっていたので,最初の会話は,パクパクだったんですが，2日目くらいたったら，もう，バンバンしゃべってました。でも，1日中観光ばっかりで，家に帰るのが8時，9時だったから，あまりしゃべる時間はなかったのですが，少しの時間でもバンバンしゃべりました。やっと5日目くらいでかなり交流は，深まります[91]。

ほんとうに人それぞれで，ホストファミリーとどのように話せるようになるかは，性格による所も多い。この生徒のように最初はパクパクで会話にはならなかったようだが,ホストファミリーの雰囲気も良かったようで，すぐに「バンバン」と喋るようになっている。そして，このような姿勢で話せば話すだけ，コミュニケーションの仕方が自然と身についていくものである。

---

[90]「姉妹都市派遣中学生報告書（2004年)」，8ページ。

[91]「姉妹都市派遣中学生報告書（1999年)」，5ページ。

(2)　やさしい英語で，ゆっくりと

ホストファミリーたちは，みんな何とか相互に分かり合えるようにとの努力を惜しまない。その様子を生徒たちは，次のように述べている。

今回，ホームステイをした所はディーンさんの家庭にお世話になりました。お母さんのシドニーさんは学校の先生ということで，英語があんまりはなせないぼくの英語をちゃんと一言，一言聞きとってくれて，ぼくにもわかるやさしい英語で会話してくれました[92]。

家族は私達が分かるようにゆっくりと話しかけてくれて，私達が理解できるまで何回も言ってくれました。そして私達がすぐ答えられなくて時間がかかっても待っていてくれ，ゆっくりと考えることができました[93]。

僕のホームステイ先の人達は4人家族でみんなとても親切でした。すべて英語で分からない事もあったけど，分かるまで聞きました。簡単に言ってくれたりして，とてもよく会話ができたと思っています[94]。

ホストファミリーは，とても優しくて，私がなかなかホストファミリーが言っている事を理解できなくてもゆっくり話してくれましたし，私の不出来な英語もがんばって聞いてくれました。そして通じた時は，とてもうれしかったです[95]。

紙を見ながら「のどが乾いていますか」「お腹がすいていますか」と

---

[92] 「姉妹都市派遣中学生報告書（2004年)」，15ページ。
[93] 同上，13ページ。
[94] 「姉妹都市派遣中学生報告書（2001年)」，15ページ。
[95] 「姉妹都市派遣中学生報告書（1999年)」，13ページ。

日本語で聞いてくれて，気を遣ってくれているのがわかりました[96]。

ホストファミリーの人たちは，守口の中学生に対して，「やさしい英語」や「簡単な表現」を使って「ゆっくりと」，しかも「分かるまで」，「何度も」繰り返してくれのが分かる。普通の状況では，このようなことは起こらない。普通は，こんなに辛抱強く，時間と手間暇かけて，相互に理解し合うということはありえない。ホームステイの家庭の中だからこそ，起こるのである。また，最後の事例が示すように，紙に予め書いてある日本語で尋ねてくれるなど，心遣いが伝わってくる。このようにして，中学生たちはカナダ人の家庭において，言葉の違う者同士がどのようにしてコミュニケーションをしたらよいのかを身をもって学ぶのである。

(3) 実戦的コミュニケーション

上のように，いくら「やさしい英語で，ゆっくりと」話してもなかなか理解できないこともある。そこで，身振り手振りや，時には絵に描いたり，辞書を片手に，何とか必死にやり取りをするのである。その様子を生徒たちは，次のように述べている。

私は，最初この英語の早さについていけず，聞き取れなくてなかなか答えることができませんでした。すごく悲しかったです。しかしここで黙ったままではいけないと思い，身振り手振りで何とか自分の言いたいことを伝えようと頑張りました。伝わった時は本当に嬉しかったです[97]。

初めの１日目は，少ししか話せなかったけど日がたつにつれて仲良くなれるようになりました。と言っても，話すというか，身ぶりで説明したり，時には絵を描いて説明するなどしなければけっこう通じなかっ

---

96 「姉妹都市派遣中学生報告書（2004 年）」，17 ページ。

97 同上，14 ページ。

たり，相手の言っていることがわからなかったりとたいへんでした。けど一生懸命理解しようとしてくれて，とてもうれしかったです[98]。

そしてやっぱり一番の壁は「言葉」，聞きとることはなんとかできても，自分の思っている事がしっかり相手に伝わらない。めげそうになったりしたけど，辞書を片手になんとか気持ちが伝わった時は，すごくうれしかった。そういうのって，日本にいたら味わえない事だと思った[99]。

このように「気持ちが伝わった時」の感覚は，日本では経験したことのない感動である。日本の英語の時間には，身振り手振りで伝えることや，絵で表現することなんかは教わらないし教えてもくれない。言わば，異文化の中での問題解決のためのサバイバルの仕方は，英語の授業では対象外なのである。もし，そんなことをやろうとしても，実際差し迫った問題が目の前にある訳ではなく，生徒たちも恥ずかしがってとてもやらないであろう。従って，カナダのホームステイで目の前の差し迫った問題に対処するために，身振り手振りで辞書を片手にして相手と関わっていくことが必要なのである。そして，この経験の意味は非常に大きい。生徒はこれにより「何とか伝わった」感触を得て，喜びと「自信」とを身につけるのである。

(4)　一歩踏み出すということ

カナダに行く前には，日本でできないことをイッパイやろうと思っていても，カナダのホームステイという異文化の中に身を置いてみると，戸惑ってしまい消極的ななってしまうケースもある。

---

98 「姉妹都市派遣中学生報告書（1999年)」，8ページ。

99 「姉妹都市派遣中学生報告書（2001年)」，11ページ。

カナダに行けば自分の好きなことが言えるし，授業にない色々なことを学べると思っていました。けど実際行ってみると全然でした。いつもは話せる簡単な英会話さえホストファミリーを前にすると全く出てこないのです。それだけならまだしも，今度の悩みは彼女達が何を言っているのか全く聞き取れないことです。聞き取れなければ答えは導けません。その結果，私はだまりがちで何でもわかったふりをしている人になっていました[100]。

はじめ，私はカナダに行ったら積極的に英語を話そうと思っていたけれど，全然，会話が通じず，消極的になっていました。そのせいで，なかなかホストファミリーとなじめず悩んでいました。先生に相談すると，自分から心を開かないとあかん，と言われました。受け身ではなく，自分から一歩踏み出さないと，何も始らない……。こんな簡単な事を私は，忘れていました。その日は，家でホストファミリーのペイジと夜の２時までしゃべっていました。ジョークを言ったりしてとても楽しかったです。その時，なんでもっとはやく自分から話しかけなかったんやろうと思いました。そしたらもっと仲良くなれていたのに……[101]。

まず，最初の例に，「いつもは話せる簡単な英会話さえホストファミリーを前にすると全く出てこない」と述べられている。普通は，誰しも上に触れたように，最初は緊張のあまり話せないこともあるが，大体は何度も聞き返したり，身振り手振りで，何とかコミュニケーションができるようになるものである。ここでは，そんなことはせずに，格好よく英語で話そうと思ったのかも知れない。さらに，ホストファミリーが「何を言っている

[100] 同上，５ページ。
[101] 同上，７ページ。

のか全く聞き取れない」とあるが，最初は聞き取れなくて当たり前である。むしろ，聞き取れないのが普通である。上に述べたように，「やさしい英語で，ゆっくりと」何度も話してもらって，徐々に聞こえるようになるのである。「分かったふりをする人になっていました」と言う表現が現しているように，分からなくても相手に尋ねなかったのである。聞き返すことができなかったのはプライドのせいかも知れないが，これではカナダ人のホストファミリーとしては，当然分かったものとして話を進めるのが普通である。その結果，ますます会話が成立しないことになってしまったようだ。このような「負のスパイラル」にはまり込んでしまうと，先ほどの「バンバン喋るケース」とは逆になってしまう。文脈も分からなくなるし，心理的にも不安になり，「いつもは話せる簡単な英会話」も出てこないという結果になっても不思議ではない。

二つ目のケースは，「全然，会話が通じず，消極的になっていました」と述べられている。カナダのホストファミリーという異文化の中で悩み事にぶつかってしまうと，大局的に物事が見れなくなってしまうのである。しかし，この生徒は幸いにも引率の教員に相談することによって，自分が何をすべきかに逸早く気づくことができたのである。教員のアドバイスは，「自分から一歩踏み出さないと，何も始らない」というものであったが，この生徒も言っているように，異文化の中で一旦問題を抱え込んでしまうと「こんな簡単な事」も忘れ去ってしまうのである。早速，このアドバイスを実行に移した「その日」には，「家でホストファミリーのペイジと夜の2時まで」話し込むという嬉しい結果になったのである。

(5)　大事なことはコレだ！

中学生たちは，1週間のホームステイでのコミュニケーションから，それぞれ多くの貴重なことを学んでいる。そのような現実の体験から得られる結論は非常に重要である。

> そして私は気付いたことがあります。どれだけ勉強できても，それだけではだめだということです。大切なのは，伝えようと努力するこ

とだと思いました[102]。

ホストファミリーとしゃべれるかとても不安だったけれど，そんなに心配することもなかったです。ただ，思いついた事をすぐにでもしゃべろうとする積極的な態度はすごく大切だと思いました。別にペラペラと英語を話せなくても，自分の伝えたい単語を言えたり Yes，No，Thank you などが言えるだけで，英語をしゃべれたと思えてすごくうれしかったです[103]。

（中国系の）彼らの父と母はよく働いていて，会う機会が少なかったが，皆，優しかった。夜，シャワーの使い方が分からなくて，１階にいるおばちゃんに使い方を聞いた。そしたら，彼女は中国語で僕に教えてくれて，英語が通じないから日本語で答えた[104]。

まさに「勉強がいくらできても駄目」である。大切なのは，実戦において「伝えようとする努力」だというのは，正しい。単なる言葉ではなく，実戦を経験した者の結論である。〝Yes”，〝No”，〝Thank you″の意思表示も，簡単なようで，実は日本人にとってはそれほど簡単なことではない。とりわけ〝No″と〝Thank you″は，日本語でも言い慣れていないので，英語でこれらの表現ができるようになるには思考回路が英語の回路になるということが必要である。従って，これが言えるようになれば，英語のコミュニケーションの基礎をつかんだということであり，上出来であると言えよう。

そして最後の例。この生徒は英会話をしようとしているのではない。「シャワーが使えない」という問題を解決するために，コミュニケーション

---

[102]「姉妹都市派遣中学生報告書（2004 年）」，10 ページ。

[103]「姉妹都市派遣中学生報告書（2001 年）」，12 ページ。

[104] 同上，14 ページ。

をしているのだ。しかも，家にはオバアちゃんしか居ない。恐らく，最初は英語で尋ねたのだろう。ところが，返ってきたのは中国語だったので，生徒の方も日本語で答えたということが分かる。日本語と中国語でやりとりをしながら，恐らくシャワーの所まで一緒にいって，無事シャワーが使えたということなのだろう。この生徒の場合には，たとえ英語がうまく話せなくても，どこに行ってもコミュニケーションをとることができるだろう。異文化コミュニケーションにおける素晴らしい事例である。

3　食事は文化

食事は文化であり，生徒たちはホームステイの家庭で，日本とは異なるカナダ文化を体験することになる。生徒たちが，何に驚いたのかを見てみよう。

(1)　食事の量

カナダの家庭にまじって生活して，一番日本との違いを感じたのはやっぱり料理だった。ボリュームがありすぎるほどのすごさで，そこはやっぱりちょっと辛かった。でも，私を楽しませようとたくさんがんばってくれた[105]。

食事は日本とだいぶちがっていて，ピザとかハンバーガーが多かった。朝食はトーストかシリアルとフルーツで軽いものだったけど，とにかく量が多かった。1時間に1回は,「おなかすいてる？」と聞かれ,(もちろん英語で)「すいてる」と言えば，おかしか何かが，ドバドバッと出てきて，胃は破裂寸前だった。おいしいことはおいしいんだけど……。あの食生活にはついていけないな[106]。

(2)　ギョーザにメイプルシロップ！

カナダ人は肉料理を全般に何にでもメイプルシロップをかけて食べ

---

[105]「姉妹都市派遣中学生報告書（2004年)」，12ページ。

[106]「姉妹都市派遣中学生報告書（2001年)」，11ページ。

る。と，どこかで聞いたことがあり少し心配していたが，全然そうではなかった。ただ，春巻きとギョーザを食べた時に醤油の代わりにメイプルシロップをかけるのには驚いた[107]。

(3) 器用に箸を使って

欧米系の人々は箸を使えないのがあたりまえだと思っていたが，これも私の思い込みだった。近くにチャイナタウンがある影響だと思うが，春巻きとギョーザを食べた時，家族みんなが揃って器用に箸を使っていたのだ。でも普段使い慣れていないだけあった時々，物を落としてしまっていた[108]。

(4) デザートがある！

ママさんが作る夕食後のデザートは甘くて美味しかった。私の家ではデザートなんてない。感激だった[109]。

(5) 夕食の祈り

私を温かく迎えてくれたウィルソン一家は，とても優しい人だった。夕食のときはいつも手をつないで，お祈りをするのが習慣だった。日本の「いただきます」を教えてあげたけれど，やっぱり外国の方がかっこいいなと思った[110]。

子供たちは実に様々な側面を観察している。ともかく育ち盛りの中学生にとってもカナダの食事は「ビックリするほどの量」である。そして，なかなか「断りきれない」様子であるが，事実，英語で断るのは難しく，つ

---

[107]「姉妹都市派遣中学生報告書（2004 年）」，11 ページ。

[108] 同上，11 ページ。

[109] 同上， 4 ページ。

[110]「姉妹都市派遣中学生報告書（1999 年）」，11 ページ。

いつい食べ過ぎてしまうのが普通である。またカナダ人の基準からすれば，日本人の食べる量はあまりにも少ないので，信じられないということもあるようだ。日本では春巻きや餃子には醤油が普通だが，何とホームステイ先では「メイプルシロップ」をかけるので，これまた驚きである。また箸も「家族揃って器用に」使っているのを見て驚いている。そして，日本では食後のデザートは一般家庭ではでなくて普通である。ところが，カナダの家庭では甘いデザートが必ずでてくるのだが，このデザートが出てくると言うこと自体に感激している。最後に，夕食のお祈りがでてきているが，ここで日本の「いただきます」を教えてあげるなど，積極的な姿勢が窺える。ここでは単に「やっぱり外国の方がかっこいいなと思った」としか書かれていないが，これを契機として，さらに興味を持てば「夕食を始める時にも神様の存在を日々確認している」という点にも気づくようになるだろう。

4　家族と共に過ごす時間

(1)　家族と出かける

1週間のうち実質的にホストファミリーと終日過ごせるのは，1日だけである。その日には，ホストファミリーも守口の子供たちを食事や買い物や映画などに連れ出している。その様子を，子供たちは次のように述べている。

> 休日には教会に行ったり，日本のレストランに行きました。こんな風にホストファミリーの人と遊ぶ方がお土産を買っている時よりもずっと楽しかったです[111]。

> 3日目，ちょうど日曜日なので，家族と出かけた!!　昼ご飯は飲茶で，（中国料理店）食べ，その後，アメリカとカナダの国境まで行き，ホワイトロックCity（たぶん名前があってると思う……）に行き，買

[111]「姉妹都市派遣中学生報告書（2001年)」，5ページ。

い物をした。夜ご飯は，カニやロブスターや，カリフォルニア巻き（？）を食べた。美味しかった[112]。

ホストファミリーといる時間は少なかったものの，外食に連れていってくれたりボーリングにと楽しませてくれました。また映画が大好きみたいでたくさん映画を見ました。私も映画が好きなでけに「あれ見た？」とか共通の話題ができてよかったです[113]。

この旅行での一番よかった点はやっぱり，ホームステイをして生の英語や，カナダの習慣に触れることができた点だ。ホームステイ先の家族はとてもやさしく，ホームシックなんてぜんぜんならなかった。むしろ，帰りたくなかったくらいだ。いっしょにボーリングをしたりホームパーティなどをして，とても楽しい時を過ごせた[114]。

カナダのホストファミリーも気を遣っているのが分かる。あちこちに連れていってもらうのも，子供たちにとってはもちろん楽しいことであるが，やはりホストファミリーと一緒に過ごすのが一番印象に残るようだ。日本では中学生ぐらいになると，家族一緒にでかけたりすることは少なくなるのではないだろうか。ところが，カナダでは結構家族で行動を共にすることが多い。ここでは明確な言葉では述べられていないものの，守口の子供たちも，そのような日本とカナダの家族のあり方の違いを何となく感じたことであろう。

⑵　料理を作る

料理を一緒に作るということは，最高のコミュニケーションであり，心理的な距離感をも縮めるものである。

---

[112] 同上，4ページ。

[113]「姉妹都市派遣中学生報告書（2004年）」，14ページ。

[114]「姉妹都市派遣中学生報告書（1999年）」，7ページ。

3月28日の日曜日は，ちょうどお兄さんのジェイソンの誕生日でした。お昼にショッピングに行き，西田さんとささやかなプレゼントを買いました。そしてその日は，前から天ぷらを作ると言っていたので，天ぷらをつくる準備もしました。しかし，天ぷらだけでは足りないと思い，お母さんに「天ぷらだけだったら足りないと思うから，ほかの料理も作ってほしい」とお願いをしたつもりが，お母さんは「私たちが天ぷら以外の料理も作りたい」と解釈して，結局もう一品鶏肉の料理を作るはめになりました。苦労しながらも何とか全ての料理を作ることができ，早速皆で食べることにしました。皆「おいしい!!」と喜んでくださってとてもうれしかったです[115]。

日本の生活では，中学生が家で食事を作るということも普通はないのではなかろうか。ところが，カナダのホームステイ先で，たまたまホストブラザーの誕生日だったので，天ぷらを作ってあげたとのことである。〝天ぷら〟ならカナダ人にも喜ばれる料理でメニューとしては大正解である。そして，レシピを教えてあげることもできる。日本の生活では，中学生が家で天ぷらを揚げたり食事を作ったりすることは稀なことだとおもわれるが，料理ができることは優れたコミュニケーションの手段を持っているのと同様である。そして，みんなからの「おいしい」と言う言葉は，心と胃袋によるコミュニケーションが成功したということである。

この他にも，ホストマザーと一緒にオーブンでケーキを焼いたり，ピザを作ったりした子供たちもいる[116]。料理を一緒に作ることは，言葉はそんなに要らない。しかも，自分たちが作った物を後で食べる楽しみがある。

5　ホームステイでの観察

子供たちは，ホームステイという異文化環境の中で，色々な観察を行っている。そして，日本とカナダの同じ点を発見したり，日本では決して考

---

[115]「姉妹都市派遣中学生報告書（2004年）」，19ページ。

[116] 同上，13ページ。「姉妹都市派遣中学生報告書（1999年）」，3ページ。

えもしないようなことを考えるのである。それでは，子供たちが，何をどう考えたのかを見ていこう。

(1) カナダ人も同じ

このホームステイで学んだことはたくさんある。外国人と言っても考え方はみんな一緒だということ。十四歳のロビーは少し年頃からか最後まで恥ずかしがり屋さんだったような気がする。それでもトランプした時は少しテンションが高かったけど……。やっぱりどの国も中学生の男の子は恥ずかしい年頃なんだぁ，と学びました[117]。

そして最後に，笑いは共通ってこと。ファジィーはとてもおもしろい奴で，何度も爆笑の渦にのみこまれた。やっぱりみんながおもしろいと思うことはおもしろいんだねっ。でも人をバカにする笑いは少なかったような気がする。ジェイミィは私が車で頭をぶつけた時，真剣に心配してくれた。私の友達ならたぶん大爆笑だろうな[118]。

上に述べられているように,「どの国も中学生の男の子は恥ずかしい年頃なんだ」という発見は面白い。自らの観察により，このような結論に至っているからである。そして，二番目の例も非常に鋭い観察がされている。日本でもカナダでも,「笑いは共通」で，面白いことは面白いということ。しかし，その「笑いにする」内容が異なっているということに気づいている。日本では，いつの頃からか，お笑いタレントが相手の頭を叩いたり，相手の困る様子を見て，笑いにしてしまう風潮が普通になってしまっている。この生徒が「人をバカにする笑いは」とは,「その種の笑い」が中学生の間にも存在するということであろう。ところが，カナダでは「その種の笑い」は存在しないのではないかと言っているのである。それは，この生徒が「車で頭をぶつけた時，（ジェイミィが）真剣に心配してくれた」から

117「姉妹都市派遣中学生報告書（2004 年）」，6 ページ。

118 同上，6 ページ。

である。このような状況では，当然，カナダ人は〝Are you all right?〟と何度も言って，心配してくれるのが普通である。ところが，もし日本で同じことをしたら，居合わせた友達は「大爆笑」するだろうと述べているように，大きな違いが存在することを指摘している。このように考えることのできる生徒なら，これを契機にして，もやは人の不幸を笑いの種にするようなジョークには付き合わないことと思われる。

(2)　カナダの父親

日本と同じだなと思ったところもあった。〝休日は，遅くまで寝る〟ということ。もしかしたら，全世界共通??　私の家と少し違うと思ったのは，パパさんが料理をしたり，家事を手伝ったりしていた事。ハンバーグは美味しかった。日曜日の朝に芝刈りをしているなんて，ママさんに言われて初めて気付いた[119]。

休日は体を休ませるために遅くまで寝るということは，人間として同じであり，文化ではない。ところが，父親の役割は文化であり，カナダでは随分と異なっている。父親が料理をし家事をし，日曜日の朝に芝刈りをする。ママさんに言われて気づいたとあるが，ホームステイをすれば，こんな風にカナダの家庭の様子や父親の役割も身近に知ることができる。随分と日本と違うとか，日本の父親もこんな風になってもらいたいとか，それらについては何も書かれていないが，少なくとも新鮮な知識として頭の中にインプットされたはずである。

(3)　行動の自由

何でもできるMELは毎日学校まで車で送ってくれて，夜に買い物，バスケット，ボーリングにも連れて行ってくれた。私は初めてボーリングをカナダでしたこと，絶対忘れない。16歳で車の免許取れるのも羨ましい[120]。

119　同上，4ページ。

120　同上。

「あれをしてはイケナイ，これをしてはイケナイ」という日本から来ると，カナダはまるで自由の国である。「日本ではダメで，カナダでは O. K.」なもの，運転免許がまさにそうである。16 歳で運転免許が取れて，実際に毎日運転しているホストシスターを見ると，「羨ましい」と思っても無理はない。日本の都市のように公共の交通手段が発達していないので，車がなければ実際どこへも行けないのである。従って，車はまさに毎日の足であり，特に学生が運転する車は「動けば良い」という車が多い。日本のように見栄とかステータスとは縁がない。そのような事情が理解できたとしても，実際，自分たちと同年代の子供たちが自由に車を運転しているのを目の当たりにすると，憧れの気持ちを抱いて当然のことである。

(4) 何カ国語も話せる

外国の大人はけっこう何カ国語も話せる人が多いってこと。ホストファーザーのファジィーなんか，フランスとポルトガルと英語が話せた！　びっくらこいた！　マザーは中国も話せた！　日本という島国にいる私には，バイリンガルはとてもクールに思えた[121]。

私のステイ先は，お父さんが日本人でお母さんが，たぶん中国人だと思う。で，子供の YUMI は，日本語少し話せて，英語，中国語（たぶん）話せて，そして，今，スペイン語勉強中らしいです。スゴイ!! 私もいつか，英語ペラペラに話せたらなぁって思います!![122]

ホームステイの家庭の中で，英語以外の言葉が話せるというような状況は日本では考えられないし，ちょっと想像がつかないことである。そして，ホームステイをして，何カ国語も話せる人たちを目の当たりにすると，色んな意味で衝撃的である。それで，「日本という島国にいる私には，バイリンガルはとてもクールに思えた」という感想がでてきても不思議なことで

[121] 同上，6 ページ。

[122]「姉妹都市派遣中学生報告書（2001 年）」，4 ページ。

はない。そして，当然のことながら，「英語がペラペラ話せるようになりたい」という知的刺激につながるのである。

6　ホストファミリーを通して知るカナダ

カナダのホストファミリーは，行き来がある他のホストファミリーや，親戚や知人の所へも，生徒たちを連れていき，他人と共に過ごすことも多い。そこでも中学生たちは，自分のホストファミリー以外のカナダ人の側面を知ることになる。生徒たちは，次のように述べている。

> 夕食をウィルソンさんの家に行き，ピザを食べた。日本より少し小さかったが，12人で10枚というすごく多い量だったがみんなたくさん食べていた。朝食と夕食の量を見て，「カナダの人はよく食うな。」といつも思っていた[123]。

> 待ちに待った日曜日には，日本では考えられない大きさのデパートに連れていってもらい，夕食にお母さんのお友達の家族と一緒に，とてもたくさんのピザを食べ，いろいろな話をして，もう言葉では言い表せないほど楽しかったです[124]。

> 僕は以前にもオーストラリアでホームステイをしたことがあったのですが，今回の家庭は子どもがいなかったこともあって，ショッピングモールや日本食専門店等に連れていってもらうことが出来ました。また，彼らの祖父母の家にも連れて行ってもらい，皆で日本とカナダの違いについて討論したり，ビリヤードをしたりと交流を深めると同時に自らの外国への視野を広めることが出来ました[125]。

---

[123]「姉妹都市派遣中学生報告書（1999年)」，4ページ。

[124] 同上，16ページ。

[125]「姉妹都市派遣中学生報告書（2004年)」，16ページ。

私が１番おもしろかったのは，ホームパーティだった。２家族合同で行った。ピザをとって食べ，ぺちゃくちゃ話し，トランプをしたりした。このパーティで私はすっかりとけこんでしまった。まるで今までずっと住んでいる外国人みたいな気分になった[126]。

日本ではホストファミリーを引き受けるとなると，どうしても「自分の家族だけ」で引き受けがちであり，かなりの責任と精神的な負担を感じるのではないだろうか。カナダでは，顔見知りのホストファミリーの所や，さらには知人や親戚の所へも日本からの中学生を連れていくということが多い。日本では，時間的な余裕もないし，知り合いを招いたり招かりたりして共に食事をするという習慣がないからかも知れない。ここにもあるように，他の家族と一緒に何かをするということや，他者と接するということは，おそらく現代の日本では極めて稀なことではないだろうか。母親の友達の家族と一緒に食事をし話をするということは，日本ではありえるだろうか。祖父母の家でビリアードをしたり日本とカナダの違いについて話をしたりすること，これも日本ではありえることだろうか。恐らく日本では，そのような状況が起こったとしても，子供たちは意識的に避けるのではないだろうか。ところが，カナダでは全く事情は異なるのである。守口の中学生たちは明確な言葉では述べてはいないものの，他人と接する時にはどうすれば良いのか，大人の中でどのように振る舞えばよいのかを，自然と身につける極めて貴重な体験をしているのである。

Ⅴ　セカンダリースクールを訪れて

守口の中学生が必ず訪れるのは，セカンダリースクールである。同じ中学生ということに加えて，相互交流をしている相手である。また日本語のクラスも設置されており，日本に対する興味関心の強い生徒たちである。守口の中学生たちは，セカンダリースクールを訪れ，何を見て，どのよう

---

[126]「姉妹都市派遣中学生報告書（1999 年）」，11 ページ。

に感じたのであろうか。

1　一番の思いで

ともかく，「一番の思いで」として，セカンダリースクール訪問をあげる生徒たちが多い。生徒たちは異口同音に，次のように述べている。

> ホストファミリーと過ごしたこと，ボランティアの人に色々なところを案内してもらったこと，全部楽しかったです。でも一番印象に残っているのはセカンダリースクールです[127]。

> カナダで一番楽しかった事は観光とかよりも学校へ行って向こうの生徒と話したり，一緒に遊んだ事です[128]。

> また，カナダに行ってセカンダリースクールに行きたいです。短かったけど，とても，楽しかった1週間でした[129]。

> カナダはいろんな人種がいて，ホストシスターの友達やセカンダリースクールの人達ともいっぱい交流ができた。みんなやっぱり結構日本に興味をもっていた。毎日すごい楽しくて最後には帰りたくなくなっていた[130]。

それでは，セカンダリースクールの何がこれほど強烈な印象を生徒たちに与えたのであろうか。次に詳しくみていこう。

2　カナダ人と一緒に授業に参加

守口の生徒たちは，まず一目見て分かる驚くような校舎や設備に圧倒さ

---

[127] 同上，9ページ。

[128]「姉妹都市派遣中学生報告書（2001年）」，6ページ。

[129]「姉妹都市派遣中学生報告書（1999年）」，12ページ。

[130]「姉妹都市派遣中学生報告書（2004年）」，12ページ。

れる[131]。「学校においてある何もかも映画に出てくる物ばかりで血がさわいだ[132]」と表現している生徒もいる。しかし，何よりも一番生徒の心をつかんだのは，そのようなハードの面よりも，カナダの生徒たちと一緒に授業に参加したという体験である。参加した授業は，日本語とドラマの授業である。生徒たちは，その時の様子を次のように述べている。

> 日本語クラスの人ととても仲良くできたことが，楽しかったです。日本語と英語の両方しゃべれたのも，たのしくて，いろいろな所を見学に行くときも，たまについてきてくれたりして，とても仲良くなれて，本当に初めての海外旅行でこんだけいい経験ができて本当によかったです。これで海外旅行もまた，何回も何回も行きたいと思いました[133]。

> 日本語クラスの生徒に学校を案内してもらったり，話をしたりして，とても楽しかったです。それに，みんな日本語が上手なのでおどろきました[134]。

> 特に，ドラマのクラスで，みんなでゲームをしたのが楽しかったです[135]。

> ゲームのルールの説明が英語で意味不明なゲームもあったけど，それはそれで楽しかった。みんなとせっかく仲良くなれたのに一瞬のうちにさよならなんてさみしかった[136]。

---

[131] 同上，20ページ。
[132]「姉妹都市派遣中学生報告書（2001年）」，6ページ。
[133]「姉妹都市派遣中学生報告書（1999年）」，12ページ。
[134] 同上，9ページ。
[135]「姉妹都市派遣中学生報告書（2001年）」，9ページ。
[136] 同上，6ページ。

次の日はセカンダリースクールでそこの生徒と一緒に授業を受けた。時間を忘れるほど熱中した[137]。

時間を忘れるほど熱中した様子が伝わってくる。日本語のクラスでは，カナダの生徒たちもかなり日本語が話せるようであるし，守口の生徒たちは日本の折り紙などを披露することなども組込まれているので，コミュニケーションには問題は起こらない。さらに，ドラマの時間もゲームという要素が組込まれるなど，コミュニケーションの点でも工夫がこらされている。このような結果，生徒たちは上に述べられているように，時間を忘れて熱中できたのである。また，これらの授業の後，学校関係者と守口の生徒たちは学校のカフェテリアで昼食を共にするが，先生たちと一緒にお昼を食べることは，恐らく日本では経験できないことではないだろうか[138]。このような事を通しても，守口の生徒たちはカナダにおける人間関係と日本における人間関係の違いを感じたことであろう。

3　クラスも多民族

上に述べたように，守口の多くの中学生は，授業に参加して非常に楽しい時を過ごしている。そのような中でも，ある生徒は次のように鋭い観察を行っている。

学校に行った日，私は演劇の授業に参加し，そこで一人の韓国人の生徒が普通に白人の生徒と楽しく会話をしている姿に驚かされた。私は他民族国家だなと思うと同時に，差別の少なさに感動した[139]。

私はニュージーランドにいたことがあるが，ニュージーランドもアジア人が多い。そして，ニュージーランド人とアジア人は，水と油の

---

[137]「姉妹都市派遣中学生報告書（2004年)」，5ページ。

[138]「姉妹都市派遣中学生報告書（2001年)」，2ページ。

[139] 同上，3ページ。

ように二つにはっきり分かれている。もっとも，ニュージーランドにいるアジア人は英語を自由に話すことができる人は一握りしかいない。アジア系3世のカナダ人などが多いから，彼らの間でコミュニケーションが円滑にとれるのだろう。

私はこのことで，言葉が通じるということは，差別を少なくするということに影響するということを知った。それと共に，言葉というものは書くとたった2文字だけど，確かに人と人とをつなげる一つの最も重要な道具だと痛感した[140]。

既に日本以外の異文化に触れた経験のある生徒であり，日本の基準以外にも比較する基準を持っており，複眼的に物事を見ているのが分かる。ニュージランドでは英語を喋れるアジア人が少なく，白人との間にも差別があり，そのような社会からカナダを見れば明らかに異なっていることに驚いているのである。この生徒は，カナダの現実を見るまでは，アジア人と白人の関係はニュージランドの基準しかなかった訳であるが，カナダの実情を知ると，さらに複眼的な見方ができるようになったことであろう。

4　自由な雰囲気

守口の中学生たちが一様に驚くのは，カナダの学校と日本の学校との雰囲気が余りにも異なっていることである。生徒たちは，次のように表現している。

月曜日から学校が始るので，Danielと一緒に歩いて30分のSecondary Schoolに行った。2000人生徒がいるという大きな学校で，制服もなく，登校手段や持ち物も自由なのは少しうらやましかった[141]。

ニューウエストミンスターにあるセカンダリースクールを訪れた

---

140 同上。

141 同上，16ページ。

時，みなさん私たちにとても親切にしてくれ，英語で会話をしたりしてとても楽しい時間を過ごしました。それに，先生と生徒が友達みたいな感じだし，校内もすごくきれいで生徒たちも自由でした。日本では，絶対に考えられないことでした[142]。

日本語クラスを見たとき，生徒が授業中でもジュースを飲んだりガムをかんだりしていたので，すごいびっくりしました。日本の学校では，絶対にしてはいけないことをやっていたから，ちょっとうらやましかった[143]。

ニューウエストミンスター・セカンダリースクールに行って，生徒の人達といっしょに昼食を食べた。生徒の人達とも仲良くなれて，校内案内をしてもらった。カナダの学校はみんな自由で，すごく和みやすかった[144]。

私たちは何度かセカンダリースクールとダグラスカレッジを訪れたけど，私はこの場所に来るたび，いつも自由な感じがしてすごくうらやましかった[145]。

そして，責任は伴うのだろうけれどその分カナダの方が，日本より自由！　とてもうらやましかった[146]。

生徒たちが，驚き，そして「うらやましく」思ったのは，一言で言えば，

142「姉妹都市派遣中学生報告書（1999年）」，2ページ。
143「姉妹都市派遣中学生報告書（2001年）」，13ページ。
144「姉妹都市派遣中学生報告書（1999年）」，7ページ。
145「姉妹都市派遣中学生報告書（2001年）」，9ページ。
146「姉妹都市派遣中学生報告書（2004年）」，4ページ。

「自由」ということである。その中身は，「制服なし」，「通学手段自由」，「持ち物自由」，「先生と生徒が友達のよう」という言葉で表現されている。日本語のクラスでは，「生徒が授業中でもジュースを飲んだりガムをかんだりしていたので，すごいびっくりしました」とも表現されている。まさに，「日本では，絶対に考えられないこと」だと言える。ほんとうに，日本の学校は，何から何まで全て規則尽くめであるので，このような感想はもっともなことである。

確かに，日本の学校の規則は規則尽くめで行き過ぎのきらいがある。しかし，全てこの「カナダのように」とはいかないだろう。文化は，その一部分だけを取り上げて真似することはできないのである。とりわけ，「習い事」や「学んだり，教わったり」する時には，日本文化のやり方や伝統があるからである。書道，華道，茶道，柔道，剣道，全て習い事には「教える者と教わる者」が存在し，「学びの空間」が存在する。物事を学び，物事を習う空間では，「ジュースを飲んだりガムをかんだり」することはあり得ない。これは，何も伝統的な習い事だけではなく，教習所で車の運転を習う時も同じであろう。もちろん，教室でも同じことである。これは，日本人のやり方であり，日本文化である。従って，日本に短期研修に来るカナダ人の学生たちは，このような事を知らずにやってくることが多い。そして，日本語の教室でもガムを噛むのである。全く知らずにやっているのであるから，「日本の教室でガムを噛むのはマナー違反です」と教えてあげねばならない。

生徒の一人が「責任は伴うのだろうけど」と述べているが，その通りである。全て，自分で決めなければならないし，その結果は全て自分の責任である。子供の時から，全て何事も自分で決めて生きてきているので，苦にならないのであろう。ところが，日本では「自分で決める」というよりは，周りが決めてくれ，規則通りにやれば良いので，なかなか途中からカナダ人のように自己決定ができる文化を取り入れることは難しいのではないだろうか。生徒たちは表面的な違いに目が行っているだけだが，ここでの問題は，日本文化とカナダ文化の根本的な価値観に関係しているのであ

る。

5　こんな学校に留学したい

このセカンダリースクールでの体験は,生徒たちの心を強く捉えている。やはり，自由な雰囲気の中で，授業に夢中になれたという体験は大きいようだ。生徒たちは，その思いを次のように語っている。

> どれも日本とは全然違っていておもしろかったし，ここに通いたいと思った。学校の授業の雰囲気もとても良かった[147]。

> 私は前から留学したいと思っていたけど，セカンダリースクールにいるたくさんの留学生を見て，もっと留学したくなった。英語さえできれば，もっとたくさんのことを話せるのになあと思ったことがしばしばあったからだ。だから，高校のいろいろな留学制度を使って，英語をまずは話せるようになって，カナダへもう１回１人で行きたいです[148]。

実際に異文化に触れて，異なる教育環境に触れて,「たくさんの留学生」がいるという事実を目の当たりにすることは，守口の中学生たちにとっては強烈なインパクトである。これらは，日本の守口に居ては，知り得ない現実なのである。自分たちが知っている世界とは「異なる世界がある」ということを認識することの意味は非常に大きい。だからこそ，もう一度一人でカナダに帰ってきて，この学校に通いたいと思うのである。

Ⅵ　表敬訪問をして

1　親しみやすい市長

市長や市議会を表敬訪問することは，毎回の日程に組込まれていること

---

147 同上，20ページ。

148「姉妹都市派遣中学生報告書（1999年)」，10ページ。

である。単に市長と会うということ自体も，生徒たちに日本とカナダとの違いを感じさせるようである。生徒たちは次のように述べている。

> 市役所……にいけた事も普通に行くだけでは体験できないことです。市長さんもとても優しい人で親しみやすく，さすが市長になる人だな，と思いました[149]。

> 市の派遣で行けたことにより，普通の旅行では行けないようなところにもいけたし，体験できそうもないこともたくさんあった。NW の市長室に入り椅子に座った事。警察署の中を見て回った事とか。結構日常何かとかかわっているところだけど，あまり知らないところなので，楽しかった[150]。

> なぜ印象に残っているかというと，市長さんを初め，市議会議員さんたちがとてもフレンドリーであったという理由が浮かび上がります。皆，市長さんが目の前にいるというのに気付かないくらいでした。まるで，一般市民と変わらない様子でした。僕は，ここが日本と大きな違いだと思いました。昼食を共に食べながら，携帯電話を通して両国の近代化の進歩について話しているメンバーを見たときは，ほんとうに親しみを感じました[151]。

> 市役所への表敬訪問のときは，久しぶりのごはんがとてもうれしかった。おなかいっぱいになったとき，市議会議員の人に「Full」と言ったつもりが「Fool」に聞こえたらしく笑われた。発音の難しさを知った[152]。

---

149 同上，13 ページ。

150「姉妹都市派遣中学生報告書（2004 年）」，4 ページ。

151 同上，16 ページ。

152 同上，20 ページ。

市長を表敬訪問[153]

日本では，一般の市民が市長と会うということ自体，なかなか普通ではできないことである。ここでは，守口の中学生たちは市長に会うだけではなく，市長や市会議員たちと昼食を共にしている。さらに，携帯電話を通して日本とカナダの話をしたり，「お腹いっぱい」と言ったつもりが〝fool〟と聞き間違えられたりしたようで，楽しい食事の様子が伝わってくる。同じようなことが日本でも起こるだろうか。日本の場合には，市長は外国からの生徒たちには儀礼的に会うだけで，昼食を共にするということは極めて稀なことであろう。さらに，中学生たちが驚いているのは，日本の市長とは態度というか雰囲気が非常に異なっていることである。中学生たちは，市長のことを「優しい」とか「親しみ深い」とか「フレンドリー」という言葉で表現している。ある生徒は，「市長さんが目の前にいるというのに気付かないくらいでした」と述べているが，この表現には日本とカナダの市長との決定的な違いが現れている。日本の場合には，常にお供がいて，市長一人ということはあり得ない。行政の長は，一般市民よりも「一段と上に」居て，決して「フラットな関係」ではないのである。そのような雰囲気が一般的な日本社会から来ると，カナダの市長さんは市民と同レベルに位置し，かつ市民との間に隔たりがないのが目につくのである。これを，

[153] 財団法人守口国際交流協会ホームページより。

生徒たちは，「親しみ深い」という言葉で表現している。これも，カナダ文化の基本的な価値観の一つであると言えよう。

2　初めての刑務所体験

警察署を表敬訪問して，全員が檻の中に入れられるということは，普通の観光旅行では決しておこらないことである。これは，訪問団の日程に組込まれていることでもあり，生徒たちは心待ちにしていることでもある。以下は，生徒たちの言葉である。

> 警察に行って刑務所に入れてもらった。多分，最初で最後やろうなあ[154]。

> ニューウエストミンスターの警察署にいって，ろうやにも入ったりした。これはめったにできないことだと思う[155]。

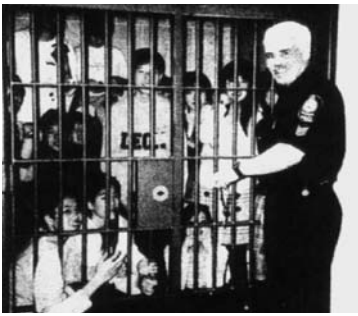
> カナダの警察署のろうやに入ったのは，はじめてだったし，前から「一度入ってみたいなあ」と思っていたので，すごくうれしかったです[156]。

このように，「最初で最後やろうなあ」，「めったにできないこと」，「一度入ってみたいなあ」と述べているように，それぞれ心待ちにしていたのが分かる。生徒たちの視点からすれば，楽しみの一つであり，日本の警察とカナダの警察の雰囲気が何となく違うとは感じているのかも知れないが，そこまで意識しては考えていないようだ。写真で見るように，ほぼ全員が一つの檻に詰め込まれているが，忘れられないカナダの想い出となることだろう。

154「姉妹都市派遣中学生報告書（1999 年）」，3 ページ。

155 同上，7 ページ。

156「姉妹都市派遣中学生報告書（2001 年）」，8 ページ。



牢獄の経験[157]

しかし，このようなことは日本の警察署であれば決して起こらないことだろう。後日，新聞等に載り，批判の対象になることがあるかも知れない。また，外国からの生徒を，檻の中に閉じ込めるということは，日本ではジョークとしても通用しないことだろう。警察官は真面目で，仮にもそのようなジョークをしては，警察の名誉に関わることなのである。ところが，カナダの場合には，姉妹都市交流で訪問する中学生への特別サービスということもあろうが，このようなことは許される文化でもある。守口市の担当者の方も言っていたが，「子供が騒いでいたら，『静かにせ！　来い！』手錠をガチャンやもん。子供，ビックリしてましたわ[158]」とのことで，こんな事も日本ではあり得ないことであろう。つまり，ある範囲内では，警察官の行動も他のカナダ文化と同様に，個人が決めるという傾向があると言えよう。

Ⅶ　帰りたくない ── 涙の別れ

１週間は「アッ」と言う間に過ぎ去ってしまう。特に楽しい時間は，速く過ぎて行く。そして，ほとんどみんな「帰りたくない」という思いと共に，ホストファミリーとの涙の別れを迎えるのである。

---

[157]「姉妹都市派遣中学生報告書（2004年)」，19ページより。

[158] 聞き取り調査：9月22日。

カナダという場所にやっと慣れてきたというのに……もう帰らなければならないということが残念でならなかった。作文のラストによく「また行きたい」と書かれるが，今回だけは心の底から本当に感じている[159]。

なんやかんやしているうちに，もう最後の日！　マジでビビるぐらいあっという間，というよりリニアモーターカー級に走り去った笑い涙有りの７日間。カディナ達と別れるとき，卒業式でも平然と笑っていた私の目から涙がポロリ。まさに世界ウルルン滞在記！　人前で泣くのは嫌だったけど，こらえきれずに泣いてしまった。皆も泣いていた[160]。

とうとう最後の日。長いようで短かった１週間。姉妹のように仲良く暮らしたキャンディスとの別れが悲しくて２人でずっと泣いてた。日本に帰りたくないっ。もっとカナダで暮らしたいと思った。でも，そういうわけにもいかないから，キャンディスが来年日本に来る時，絶対会おうねと約束してキャンディスとホストファミリーとカナダと別れた[161]。

最後のホストファミリーとの別れほどつらいことはほかになかった。自分もホストマザーも泣きかけていた。この７日間はとても楽しく，とても良い経験だったと思う。できることなら，もう少しこのメンバー，このホストファミリーと共に時間を過ごしたかった……[162]。

私は最後のお別れの時，涙がとまらなかった。ホストファミリーと

159「姉妹都市派遣中学生報告書（2001 年）」，17 ページ。
160 同上，10 ページ。
161「姉妹都市派遣中学生報告書（1999 年）」，３ページ。
162「姉妹都市派遣中学生報告書（2004 年）」，５ページ。

のお別れ，セカンダリースクールの生徒とのお別れ，２度と会えないわけではないけれど，カナダと日本はやっぱり遠い。１週間過ごした思いでが，次々とよみがえってきた。英語が通じなくてくやしかったこと，通じて笑いあったこと，本当に短い期間の中で学んだものが多かった[163]。

本当にカナダにいたら，日本みたいな小っこい国なんか帰りたくなくなるし，自分があんな小っこい国に15年も住んでいたんかと思うと恥ずかしくなります。だから，私は，最後の日に「ずっとカナダに住みたいよ」とホストマザーに言いました。そうしたら，ハグしてくれてめっちゃ泣きました。ホストマザーも泣いてくれました。めちゃめちゃ，うれしくて，空港に行くバスにのるまで，ずっと泣いていました[164]。

最後の夜，ホストファミリーの人が僕に「いつでもいいから戻ってきて」「まってるから」カズアキ・テジャ，ラヒーム・渡邊にしようと言ってくれた時，本当にうれしかったです。そして，みんなの前では絶対に泣かないと決めていたのに，別れの時，「今は帰らなければならないけど，また戻ってくるよね」らしきことを言った後に，We like KAZU. と言ってくれて「だから，行かないで」と言われた時，涙が止まらなかったです。ものすごくかっこ悪かったけど，その時，親に何ていわれようとバイトをして，ここに戻ってくると決めました[165]。

僅か１週間のホームステイで，守口の中学生だけではなく，ホストファミリーの側も涙の別れになるなんで，ちょっと想像するのは難しいかもし

---

[163]「姉妹都市派遣中学生報告書（1999年)」，11ページ。

[164] 同上，５ページ。

[165] 同上，14ページ。

れない。普通の状況では，こんなことは起こりえない。しかし，姉妹都市交流のホームステイという状況では珍しいことではない。最初の緊張と不安を抱いての初対面。「やさしい英語」で「ゆっくり」と，何度も何度も「繰り返し」，身振り手振りで，何とかお互いに理解し合おうという共通体験をした結果なのである。そうして，何とか言葉にも慣れてきて，最初は通じなかったことも，どうにか通じるという感覚をお互いに持ち始める時期に，別れがやってくる。泣かないでおこうと思っても，思い出の断片が脳裏に蘇ると，もはや流れ落ちる涙は自分ではどうしようもないのである。

Ⅷ　カナダでの１週間がもたらしたもの

１　１週間の異文化体験が人を変える

カナダで過ごした経験は，柔軟な若い心に様々な影響を与えている。しかも，それらは彼らのこれからの人生を左右するようなものもある。それらが，どのようなものなのかを，次に見ていこう。

(1)　もう一度カナダへ

私は，絶対にもう一度カナダへ帰る事をここにちかいます。お世話になった全ての人たちにありがとうを言いたいです[166]。

カナダに行けて本当に良かった。高校卒業したら，絶対カナダに住もうと思う[167]。

帰国してからは，毎日カナダのことを考えています。また絶対行こうと友達と約束しました。この旅で言葉以外のこともたくさん学べました。これから，積極的に英語にとりくみ，国際交流にも参加していこうと思います。本当にカナダは最高です！[168]

---

[166]「姉妹都市派遣中学生報告書（2001 年）」，６ページ。

[167] 同上，９ページ。

[168] 同上，７ページ。

涙の別れを経験した生徒たちは，ほとんど全員が「もう一度カナダへ」という気持ちを抱いている。「もう一度カナダに帰ることを誓います」という生徒も居れば，「高校を卒業したら絶対カナダに住もうと思う」と言う生徒もいる。友達と「また絶対カナダに行こう」と約束をした生徒もいる。カナダで過ごしたわずか１週間の体験ではあるが，生徒たちにはこれほどまでに大きな影響を与えているのである。

⑵　行動して，世界が広がる

僕は，初めはカナダに行くことを，あまり期待していなかった。それどころか，不安で不安で仕方なく，行きたいとは思わなかった。あまりうまく話すことができない英語だけで，どうやったコミュニケーションをとることができるのだろうか不安だった。ところが，いざカナダへいってみると，楽しいことばかりだった。例えば，NBAにしても，あまり興味のなかったバスケットボールを，なまで見ると迫力があり，とてもおもしろかった[169]。

今，本当に心からありがとうといいたいのは，国際交流センターの人，親はもちろん，安田さん，あなたです！　正直に言うと，最初，声をかけられた時カナダに行きたいという気持ちはあったけど，実際に行くという気持ちは，口で言ってたほどなかったかもしれないです。でも，カナダに行き帰ってきて，「あの時さそってくれてありがとうございました」と心からいいたいと思いました。このカナダでの１週間は，僕にとって大切な経験になったと思いました[170]。

初めの生徒は，カナダでは「英語でのコミュニケーションだから大変だろうな」と不安で行きたくはなかったと述べている。ところが，自分の知らない世界の現実に出会ってみると，「こんなに楽しいんだ」と気づくので

---

[169]「姉妹都市派遣中学生報告書（1999年)」，６ページ。

[170]「姉妹都市派遣中学生報告書（1999年)」，14ページ。

ある。バスケットボールも興味はなかったが，生で見ると迫力が違うと分かるのである。ちょうど iPod で聴く音楽しか知らずに，生の演奏を聴いて別物だと感じるのと同じ感動なのだろう。

また，二つ目の例も，センターの安田さんから誘われた時は，口では良い返事をしたものの，心ではそれほど強くは思わなかったということである。ところがカナダでの１週間の経験は，自分では想像もしたことのないような経験だったのだろう。それだからこそ，心から「あの時さそってくれてありがとうございました」と言いたいのである。

このように一歩踏み出して行動してみるということは，中学生の頭では考えられない別世界に遭遇するということを如実に示している。生徒たちにとっては，行動する前にはとても想像しきれない世界と出会うということを意味しているのである。

(3) 英語を勉強する意欲

> 今回カナダに行けて本当によかったです。もし又外国へ行くなら絶対に自然もたくさんあるカナダに行きたいです。その時まで英語を一生懸命に勉強したいです。今回私がカナダに行く事でお世話になった方々に本当に感謝しています[171]。
>
> カナダで学んだ色々な事，うれしかった事や，困った事，悲しかった事，その思い出一つ一つ，全部を私は絶対に忘れない。あの一週間をバネに，これからはもっともっと英語を勉強して，いつかカナダにもう一度行って英語ペラペーラの私を見せてやるゼィ!![172]
>
> そして，英語を話して相手に伝わった時の，あの言葉で言い表せない気持ち，何もかも全部自分にプラスになった。今回学んだことは，

[171]「姉妹都市派遣中学生報告書（1999 年）」，13 ページ。

[172]「姉妹都市派遣中学生報告書（2001 年）」，11 ページ。

私の小さい頃からの夢である「留学」をかなえるための第一歩となった。私はこの夢をはやくかなえるために，もっと英語を勉強しようと思う[173]。

単に英語を学ぶというのではなくて，具体的なターゲットが意識されたこと，これも貴重な経験である。英語を使っての生活で経験した「嬉しかったこと」,「辛かったこと」，これらを通してどのような英語を学べばよいのかというターゲットが明確になったのである。そして,「相手に伝わった時の言葉で言い表せない経験」は強力なモチベーションとなる。これから英語を勉強する場合には，具体的に経験した状況を頭に浮かべながら勉強することになり，より実際的な学びとなるはずである。

(4)　留学したい

日本に着いた時，私は強く決意した。今回のホームステイのように，やりたいと思ったコトは何年かかるかわからないケド，いつか実行する。だから，やりたいと思ったことは絶対やり通す!!　そして，いつの日か，カナダに留学として帰ってきてやる[174]。

本当にあっという間でしたが，一日一日がとても充実していて忘れられない思い出となりました。これを通じて私はさらに英語が好きになりました。また留学生を見ていて私も留学してみたいなぁと思いました。だからこれからもっと英語力を伸ばしていきたいと思います[175]。

また他の国や，カナダに絶対行きたい。今度は，英語と相手国のこともっと勉強して行こうと思う。そして，できたら将来日本以外で暮

---

[173]「姉妹都市派遣中学生報告書（1999年)」，11ページ。

[174]「姉妹都市派遣中学生報告書（1999年)」，3ページ。

[175]「姉妹都市派遣中学生報告書（2004年)，14ページ。

らしたい。日本が嫌いなわけではない。住んでいる人，留学している人に何人か会い，憧れた[176]。

今までも漠然とした留学という夢があったかも知れない。しかし，それは夢であり，現実的なものではなかったのである。ところが，セカンダリースクールやダグラスカレッジに行けば，そこには多数の留学生たちが勉強しているのである。そして，セカンダリースクールでカナダ人の生徒と一緒に授業を受けてみて，ますます留学したいと思うようになるのである。つまり，目の前には現実のモデルがあり，留学するという夢がより具体的な目標として意識されるようになったといえる。

⑸　体験から得た自信と度胸

もちろんカナダの自然はきれいだったし，かわいい動物もいたから，それだけでもこの旅行はよかったと思えたのに，第２の故郷ができてしまった。これは僕の勝手な判断だ。「なにいってんねん」と言われてもかまわない。ただ，英語が下手な僕があそこまで仲良くなれたのは，自分でも不思議に思っている。そして，「英語があと少しわかれば」というくやしさが残っています[177]。

私は，外国に行ったのは初めてで，中学生の間にこんな体験はもうできないと思うので，今回カナダに行けて本当によかったです。また８日間の間，大半の時間を共にした14人の友達と先生，その他色々な人に助けてもらったからこそ忘れられない楽しい思いでができたんだと思います。これからも自信をもって英語をしゃべっていきたいです[178]。

176「姉妹都市派遣中学生報告書（2004年），４ページ。

177「姉妹都市派遣中学生報告書（1999年）」，14ページ。

178「姉妹都市派遣中学生報告書（2001年）」，12ページ。

この春休みの１週間で私が１番感じた事は，学校で習う英語も大切だけれど，なにより度胸が１番大切だと思いました。私は，カナダにホームステイをしてとても積極的になれたと思います[179]。

これらの表現には，それぞれ生徒たちの体験から得た自信が現れている。「英語が下手な僕があそこまで仲良くなれたのは，自分でも不思議に思っている」という表現には，英語ができなかったが何とか良い関係を作り上げることができたという自信が現れている。その次の「これからも自信をもって英語をしゃべっていきたいです。」という表現には，「あんな風に英語を話せば良いんだ」という経験から得られた自信である。そして，「この春休みの１週間で私が１番感じた事は，学校で習う英語も大切だけれど，なにより度胸が１番大切だと思いました」という表現は，まさに実戦によって得られた結論であり自信でもある。このように，僅か１週間のカナダ滞在によって，子供たちは日本の学校教育では得ることのできない宝物を手に入れているのである。

第４章　ダグラスカレッジ短期留学生が見たカナダ

ダグラスカレッジ奨学金短期留学生たちは，守口市の一般市民の応募者から選ばれた人々である。年齢も職業もまちまちであるが，留学して英語を学びたいという強い思いは共通している。さて選ばれた人たちは，ニューウエストミンスターに滞在して，何をみてどのように考えたのだろうか。

Ⅰ　街の中で目にすること

全てが日本とは異なった風景だが，まずは容易に目に入ってくる緑の多さ，街の中を行き交う日本車，多様な人々の存在，そして人々の行動の仕

[179]「姉妹都市派遣中学生報告書（1999年)」，15ページ。

方などに目が向けられる。とりわけ驚かされるのは，目を向ければ意識せずにも入ってくる緑の多さである。街の中にも緑があり，少し車で移動すると大自然の中に入ったという感じである。

1　街と自然

守口からの留学生を驚かせるのは，やはり大阪に隣接する守口の見慣れた景色とは異なる圧倒的な緑の多さである。その驚きを，ある学生は次のように表現している。

> 私がカナダに着いて一番驚いたことは，緑や公園が多いことでした。バンクーバーは，カナダで第三の都市なのですが，都心から少し車で移動すれば，まるで大自然の中に来たと感じる所があちらこちらにあります[180]。

ほんとうに緑の多さ，大自然を目の前にして，驚く以外にはないのだが，実は街の中に緑が多いのも，郊外の大自然のように見える場所も，カナダ人が自然とどう向き合うのかということを表しているのである。人間と自然との関係を維持・管理する強い意志の現れであり，これもカナダ文化なのである。しかし，街の中の緑と自然に圧倒されて，なかなか最初の出会いの時に，そのような事まで思いが至らないのが普通である。

2　日本製品

少し街の中を歩くと目に触れるのが，日本製品の多さである。まさに嫌でも目に入ってくるのである。

> バンクーバーの市内やショッピングセンターを歩いていたら，日本車や日本の電化製品がやたらと目に入りました。(多いとは聞いていま

---

[180]「ダグラスカレッジ夏期英語講座派遣留学生報告書 5 月 11 日～ 6 月 28 日」財団法人守口市国際交流協会，2002 年，17 ページ(以後，「ダグラスカレッジ（2002 年)」と略す。)

したけど。)[181]

カナダに行って見てまず気づいたのは,日本製品の品質の良さです。電化製品や車など日本製品をたくさん見かけました。海外から来た人が秋葉原や日本橋に電化製品を買いに走る姿も〝うーん，なるほど。納得！〟と思いました[182]。

カナダ人に受け入れられている日本製品を見るのは，日本人として誇りに思い嬉しいものであり，おそらく守口の留学生たちも同様の思いを抱いたことであろう。日本製品がいかにカナダ社会に浸透しているかは，このように街の中でも分かるし,ホームステイの家庭内でも分かることである。しかし，一目で分かる日本製品にたいして，その根本にある日本人の考え方や文化については，それほど理解されてはいないということは，もう少し滞在してみないと分からないことであろう。

3　街の中の多様性

さらに観察は，モノから人へと向かう。ここでも，日本とは異なっている。嫌でも応でも，異なる多様な人たちが目に入ってくるのである。

カナダは多民族国家である。学校に向かうスカイトレインに乗ると，「ここはどこや。」と思うほどいろいろな国の人がいる。カナダは移民の国だということを改めて知る[183]。

街の中を歩いていたら，アジア系の人々が非常に多いです。日本人

---

[181] 同上，18ページ。

[182]「ダグラスカレッジ夏季英語講座派遣留学生報告書5月7日～6月22日」財団法人守口市国際交流協会，2001年，11ページ(以後,「ダグラスカレッジ(2001年)」と略す。)。

[183]「ダグラスカレッジ（2002年)」，6ページ。

も多いことは多いですが，住んでいる人は中国系の人々が，勉強に来ている人は韓国系の人々が多いです。私自身，街の中を歩いていて気づいたことですが，日系移民の２世・３世はほとんど英語を話していますが，中国系の人々は２世・３世でも中国語を話します。外国に住んでいても母国語を後世に伝えることは大変なことです。最近バンクーバーではアジア系の移民が急増しているため，人口の約半数近くが英語母国語としない人々です。このことは知らなかったですし，驚かされました[184]。

やはりダグラスカレッジへの留学生は大人であり学ぶ意欲も強いし，上述の後の方の観察は非常に鋭い。そして，「日系移民の２世・３世はほとんど英語を話していますが，中国系の人々は２世・３世でも中国語を話します。」とあるのは，その通りであろう。その次の「外国に住んでいても母国語を後世に伝えることは大変なことです」というのも，その通りであるのだが，上の文脈では中国人がその大変なことに成功して，日本人は成功していないというように解釈される。確かに，日系移民の場合は，２世はまだ日本語が話せるが，３世になると普通は日本語が話せなくなる。日本人の場合には，カナダ社会に溶け込もうとして，必死に英語を学ぶのである。だから，日系２世や３世の店に行くと，客が日本人であろうがなかろうが，応対は英語である。一方，中国人の店は，誰がお客であれ中国語で応対してくることが多い。このような違いは，カナダ社会に溶け込もうとする日本人と，どこの地にあっても中国文化を固持しようとする中国文化との違いが現れていると解釈する方が適切であると思われる。

4　他者に対して

日本にはないモノ，日本では見慣れない光景，これらは容易に目に留るものである。電車の中の，次のような光景もその一つである。

---

[184] 同上，18ページ。

ここではスカイトレインという電車の中でも，お年寄りの人や障害者の人に席を譲るのは常識です。日本のように，たまに目の前にお年寄りの人が立っていても，寝たふりをしてて席を譲らないなんて，カナダでは考えられない事です。誰かが困っていれば，スッと助けの手を差し伸べるという場面を何度も見かけ,暖かい気持ちになりました。私はカナダという国や，人の懐の広さやおおらかさをいっぺんに大好きになりました[185]。

ほんとうに，この観察の通りである。カナダ社会における人と人との関係がよく現れている。もちろん，社会における人と人とのルールということが根本にあり，どのような社会が望ましいと考えるのかという価値観を現している。しかし，日本とカナダとの，このあまりにも大きな違いは，どのように考えれば良いのだろうか。ここには，それぞれの社会の空間と時間の豊かさにも関係があるように思われる。と言うのも，日本と言っても，札幌と大阪では事情が異なるからである。札幌のJRや市電では,「優先者席」には大人や若い人たちが座っていることは,普通はまず無いと言ってもよい。ところが，大阪（東京でも同様である）あたりでは，若者や普通の人が「優先者席」に座っていることが極めて多い。札幌では大阪や東京に比べて，遥かに時間や空間に余裕があり，通勤にも時間やエネルギーも大してかからない。多分，日本の大都市圏に住む人たちは，通勤や移動に疲れて，精神的にも肉体的にも「他者を気遣う余裕」がないのではないだろうか。カナダの場合にも，日本の大都市の通勤のように多大の時間とエネルギーを使うことはない。5時には仕事を終えて帰宅し，毎日家族そろって夕食を共にすることができる。このような余裕のある生活が，他者に対する接し方の違いになって現れてきているのではないだろうか。

185「ダグラスカレッジ（2001年)」，9ページ。

II　クラスの中は異文化そのもの

1　同じアジア人学生とともに授業を

まずは前半の2週間は，主にアジアを中心として世界の国々からやってきた学生たちと一緒に授業を受ける。そして，このような授業環境も初めてであり，授業が始ると自分たちの立場を認識することになる。ある学生は，次のように観察している。

> この2週間を一緒にすごしたのはインターナショナルと言っても国籍は，日本・中国・タイ・韓国・インドネシアと全員がアジア人です。初日に，教室へ行って驚いたことは日本人の多さです。30人の生徒の内の約半分が日本人で，行く前から日本人が多いとは聞いてはいましたが，その数は想像以上でした。日本では英語の授業でも英語を話す機会がなく今回が初めての留学で，英語を話すこと自体をためらっている私は彼らの積極的に英語を話す姿勢に感心しました。初めに4人ずつのグループに分かれて自己紹介などをしたのですが，彼らは文法の間違いなど全く気にせず自分のことを話し話題を投げかけてくれました[186]。

ここでは主にアジアからの留学生しか触れられていないが，時にはヒスパニック系の学生も含まれるようだ[187]。30名のクラスの約半数が日本人なので驚いた様子ではあるが，同時に一瞥すれば全て同じアジア人なので，心のどこかでホッとしたのではないだろうか。しかし，同じアジア人でありながら，日本人の方は「英語を話すこと自体をためらって」発言しないのに対して，他の国の学生は「文法の間違いなど全く気にせず」に積極的に話をするのである。同じアジア人と一緒に学びながらも，このように「自

---

186 〝Summer English Language Institute Bursary Program Spring Session〟財団法人守口市国際交流協会，2004年，1ページ。

187「ダグラスカレッジ（2002年）」，18－19ページ。

分たちを客観的に」認識する機会はおそらく初めてのことであろう。

2　ケベックからTSUNAMIがやってくる

さて3週間目からは，ケベックからやってくるケベッカー（フランス系カナダ人）ケベッカーとともに授業を受けることになる。そして，そこで体験することは，アジア人学生とともに受けた授業とは比べ物にならないほどのカルチャー・ショックである。ある学生は次のように述べている。

> ケベッカーがやってくる直前に先生が「Tsunamiがくるよ」と言っていた。いろんな国の友達ができた私はその「Tsunami」と表現されるほどのカルチャーショックに半信半疑だった。しかし，彼らがきたその日にすぐに実感した。本当にカルチャーショックである。間違いをすることを全く恐れず,間髪入れず話し続ける彼らに本当に驚いた。先生に躊躇なく意見し，嫌なものは嫌だとはっきり言ってしまう彼らに先生もたじたじである[188]。

また別な学生も次のように述べている。

> 始め2週間のウォーミングアップの後にケベック州からきたフランス系カナディアンの人たちと一緒に5週間のクラスを受けました。が，予想どおりの大変さでした。彼らは文法,スペルなどに苦手意識を持っているそうですが，英語はペラペラ話します。クラスでも先生に負けじと，常に何か意見を言う彼らに，私も正直圧倒されました。
>
> 日本人は文法等はできても，なかなかうまくしゃべれなかったり，〝人が話しているときはおとなしく聞きましょう〟と教育されているため，なかなか話すタイミングがつかめない。ケベックの人達はそんなことおかまいなしで，自分の主張をしてきます。また，あなたはどう

---

[188] 同上，2－3ページ。

思う？とよく聞かれるので，自分の意見がないと彼らと会話もできないので，まずその辺の練習が必要になります。また，彼らは常に努力をしていました。宿題もちゃんとしてくるし，分からないところは納得がいくまで質問する，一生懸命勉強する姿に尊敬の気持ちがうまれ，私もガンバロウ！とおもいました[189]。

今まで経験したことのないケベッカーという異文化に出逢ったときの驚きが伝わってくる。自分とは異なるものとの出会いにより，自己の客観的な認識が可能となり，これからやらねばならない方向性をハッキリと認識することになったのである。もはや，日本の教室でのように受け身的な態度では乗り越えられない。「分からないところは納得がいくまで質問する，一生懸命勉強する姿に尊敬の気持ちがうまれ，私もガンバロウ！」と決意せざるを得ないのである。まさに異文化と接することから生まれてくる衝撃であり醍醐味でもある。これが，それまでの自分を変えていく原動力となるのである。

3　自分を表現するということ

7週間の英語集中講義を通して日本人学生が身につけるのは，簡単に言うと，彼らが日本の教育では体験したこともないこと，つまり「他者に対して自分を表現すること」と言っても良いだろう。これを身につけるのが，「プレゼンテーション」という体験を通してなのである。それでは，どのようなことを経験したのか，参加学生の具体例から見ていこう。

やはり会話が中心の授業でプレゼンテーションが多くありました。与えられたトピックについて1人またはグループでポスターを作り，クラスメートの前で発表するのですが，今までこのような経験があまりない私たち日本人は人前で発表するということに馴染みがなく，毎

[189] 同上，11ページ。

回苦戦していました[190]。

プレゼンテーションすることが何回かあった。プレゼンは一番大変なものだった。前日はお腹が痛くなるほど緊張した。そのうちの一回は，生徒一人一人がプレゼンをした人の評価をつけ，プレゼン終了後みんながつけた自分の評価を受け取るというものだった。ジェスチャーの評価項目があった。ケベックの生徒はとても上手にジェスチャーをする。が，日本人にとってはなかなか難しいものだ。メモを見ないようにしてプレゼンするだけで精一杯だった。評価表のジェスチャーの欄は点数が低くコメントにも「もっとジェスチャーをいれてね。」と書かれたものが多かった[191]。

現地の人々にアンケートをとって，リサーチした結果をみんなの前で発表する，プレゼンテーションもありました。日本では全く経験したことがなかったので，とても緊張しました[192]。

わたしのいたクラスでは7週間のうちに5回のプレゼンテーションをしなければならないという私にはハードなクラスでありました。詰め込み型の受け身の授業の経験しかない私にとって，プレゼンという自分から発信型の授業は大変なプレッシャーと困難がありました。具体的には，テーマを与えられ，その中から発表するのを自ら選択し，いろいろな方法で調査し，それをまとめていかに効果的に発表する方法を考え，自らの意見もまとめた上で原稿を書き，視聴者の前ではアイコンタクト，Gambits，ユーモア，ゲーム，Handoutsなどを使って

---

190 〝Summer English Language Institute Bursary Program Spring Session″ 財団法人守口市国際交流協会，2004年，3ページ。

191「ダグラスカレッジ（2002年）」，8ページ。

192 同上，11－12ページ。

最終のプレゼンの形までもっていくのです[193]。

全く今までに経験したことのないことだから，大変なプレッシャーを感じ,「前日はお腹が痛くなるほど緊張し」たり,逃げ出したい気持ちにもなったことだろう。７週間のうち５回のプレゼンテーションというのは，ほぼ毎週１回という感じだったと思われる。具体的に述べられているように，自らテーマを選び，自分の足で調査をし，情報をまとめて，自分の意見を付して，いかに効果的に発表するのかということを身を以て学んでいったのである。教室で座って講義を聞くだけの授業ではなくて，まさにその正反対であり，自らの行動によって情報を集め分析して，発信していくのである。全く新しい文化との遭遇と言っても良い。そして,「発表が成功した時の充実感を味わったとき，それまでの苦労は報われた」気持ちになり，さらに次に進むのである[194]。

そのような７週間にわたる研修を振り返って，学生たちは，次のように述べている。

> （プレゼンでは）そのつど事前の準備段階での十分な情報量と練習の大切さ，質疑応答のアドリブの必要性を思い知らされました。しかしここで一番大切な，人前で英語を使う度胸がついたと思います[195]。

> 私は，７週間の英語研修の間，主体的に自分の意見を発表し，議論する訓練を集中的に行ったように思う。……今まで日本で体験したことのないような生徒の主体性を引き出そうとするすばらしいものだっ

---

[193] 〝Summer English Language Institute Bursary Program Spring Session〟財団法人守口市国際交流協会，2004 年，10 ページ。

[194]「ダグラスカレッジ（2002 年）」，11－12 ページ。

[195] 〝Summer English Language Institute Bursary Program Spring Session〟財団法人守口市国際交流協会，2004 年，14 ページ。

たと思う。常に，自分から行動し，考えることを求められ，話し合う機会があった。自分の意見を述べるには，知識や会話力など様々な能力が求められる。自身の能力向上に大いに役に立った[196]。

この言葉にもあるように，「今まで日本で体験したことのないような」体験をしたのである。日本とは異なる教育システムとの出会いである。自分を表現するということ，これは日本の授業では，英語の授業のみならず，普通の授業の中でも他人の前で日本語で意見を述べるということは経験してはいない。授業以外の場所でも，雑談はできるが，自分の意見を他人に述べるということは経験はしないのだ。日本語でもやったことがないことを，英語でやることを要求される訳であるから，このこと自体が日本人学生にとっては非常に大変なことである。そして，その「大変なこと」を乗り越えたとき，学生たちは自分が成長したことを味わうのである。

4　もう迷わない ── 教師になる決心

上のようなダグラスカレッジの英語集中講座を経験すると，学生たちは発言能力が向上したと感じている。しかし，能力の向上だけではなく，日本とは全く異なる授業との出会い，とりわけ今までに出逢ったことのない先生との出会いによって，英語教員になる覚悟を固めた学生もいる。

私は現在教師を目指している。カナダのダグラスカレッジのジャニス先生に出会い「教師になろう」と再び決心した。出発する前までは，本当に教師になりたいのかどうか迷いがあり，自分自身よくわからなかったのだが，ジャニスに出会い迷いが消えた[197]。

それでは，ジャニス先生の授業のどんな所に惹かれたのだろうか。簡単に言えば，学生の興味を引く内容の教材を使いながら，自然と単語や文法

196「ダグラスカレッジ（2001年)」，4ページ。

197「ダグラスカレッジ（2002年)」，6ページ。

を覚えていかせる教え方のようである。例えば，具体的には次のような授業展開がされるようだ。

> デスティニーズチャイルドの歌や映画「ポカホンタス」で使われている歌を聴き,聞き取りをする。なじみやすい教材を選んでいると思った。韻を踏んでいる。英語はリズムをそろえるのが好き。歌詞の意味がそれぞれ対になっているものを選ばせる。そうすることによって，自然と単語を覚える。微妙な文法の違いを難しい文法用語を多用することなく理解できる。
>
> また文法を間違えて話したりすると,「ものすごい大きなアクションと声で『ダアアアーーッ！』と叫ぶ」ことにより，生徒の心に残るような指導をするそうだ[198]。

同時に，ジャニス先生がクラスに着てくる服自体が，伝えたいことを表現しており，これも大きく心をつかんだようだ。

> ジャニスは，日本の羽織，中国のチャイナドレス風の上着，ウェスタン調の服など，時々民族衣装を着て現れた。それを見て，服を着ることで文化を教える方法もあるんだと思った。日本の小学校の卒業式で，女性の先生が袴を着ているのは，生徒にこういう文化もあるんだよ。と伝える意味もあって先生が袴を着るのだ，と私の友だちがいっていたことを思い出した[199]。……
>
> 彼女が好んでよく着ていた服がある。世界の国旗がプリントされているＴシャツだ。そのＴシャツが彼女の伝えたい事をよく表している。私はジャニスに出会って教師を目指そうと思った。ジャニスのような教師になりたい。世界の国旗がプリントされているＴシャツを着て。

---

198 同上，６，８ページ。

199 同上，７ページ。

はたしてなれるのだろうか[200]。

そして異文化の教え方も具体的な指導をする。日本人，タイ人，ケベック人がいるクラスでは各国の挨拶の仕方を学ぶのだ。日本は，お辞儀，タイは両手を合わせてお辞儀をする。ケベックはハグとキスである。簡単なようで，実際にやってみると，なかなか難しい。珍妙で，とてもおかしくて笑い合ったようだ。しかし，同時にお互いの国を少し知った気がして，みんなとの距離が近くなるのだ。そして卒業式には，ケベックの学生が「日本式かタイ式かは不明だが」クラスで学んだ挨拶をした時には，「自分たちだけが知っている挨拶」なので胸にジーンと熱いものがこみ上げてくるのだった[201]。

実際には，日本の教室の中ではこのような教え方をすることは難しいかも知れない。しかし，異文化の中での授業により，自分たち自身が大きく変わる経験をした学生たちは，自分たちがダグラスカレッジで得たものを日本の子供たちにも伝えたちと思っているのである。

> 私は一教育者として，ここで得た感覚，経験，技術といったものを一人でも多くの子供達に伝えて行きたいと思っています。そして日本人に欠けているもっと自分をアピールすることの大切さ，それがないと外国では認められないということも合わせて伝えられたらと思っています[202]。

異文化の中で今まで全く経験したことのない授業に出会うことにより，自分自身の物の見方や考え方が変わったことが，はっきりと現れている。

---

200 同上，2002年，9ページ。

201 同上。

202 〝Summer English Language Institute Bursary Program Spring Session〟財団法人守口市国際交流協会，2004年，10ページ。

そして，これから日本の教育現場で何が必要とされるのかということをも，明確に認識されるにいたったのである。

Ⅲ　英語とフランス語のバイリンガルの国

1　「二つの公用語」

カナダはバイリンガルの国であると実感するのは，カナダに向かう AIR CANADA の機内で始るかも知れない。機内でのアナウンスが，英語とフランス語の両方でなされるからである[203]。そして，このような点に興味があれば，カナダに到着してからも自然とその方面に関心が向かうようである。ある学生は，次のような観察をしている。

> バンクーバーのあるブリティシュ・コロンビア州は英語圏であるというのに，いたるところでフランス語を見聞きする。というのも，全ての商品にフランス語表示が義務付けられているからだ。例えばパックのジュースにしても，ある面には「orange juice」，そしてもう一方には「jus de orange」と書いてある。そして日本からの輸入品である醤油にさえも「soy sauce」と「sauce de soja」とかかれている。商品名だけでなく，成分表示もそうである。このように，全てにフランス語表示と英語表示がされている。カナダでは英語表示だけのものは違法にアメリカから輸入されたものらしい。
>
> その他にも，銀行の ATM や公衆電話も，最初に「English」「Francais」の選択をする。そして，バスやスカイトレインなどといった公共交通機関の非常非難経路の表示も二つの言語で書かれている[204]。

まさにここで述べられているように，スーパーで売られている商品の説明や，公共の施設の説明や表示などが英語とフランス語の両方で書かれて

---

[203]「ダグラスカレッジ（2002 年）」，１ページ。

[204] 同上，１－２ページ。

おり，否応無しに目に入ってくるのである。さらに，ホテルの受付などでは，フランス語を耳にすることがあるかも知れない[205]。そしてダグラスカレッジに通い始めると，フランス語を話すモニターに出会ったり，ホームステイでもFrench Immersionについて知ることになる。

> ダグラスカレッジでモニターとして私たちが英語を勉強する手伝いをしてくれる人たちも，ほとんどの人がフランス語を話せた。彼らは「French immersion（フランス語にどっぷりつかるという意味）」といって，授業全てがフランス語で行われる学校に小学生の頃に通っていたらしい。そして私のホームステイの家族もそういった学校に通っていたというので「French immersion」が盛んであることがわかる[206]。

さらに，ケベックからの学生と一緒に授業を受けるだけではなく，様々なことを話し合う機会があり，彼らはカナダ政府の公的支援によりプログラムに参加しているということを知るのである。

> 参加したケベッカーは，バンクーバーまでの交通費と自分が遊びに使う以外は支払っていないという。その他は政府が支払い，税金によってまかなわれている。ホームステイ先から学校まで通う電車やバスの通学定期まで無料で配布される。
>
> このように，カナダ政府は公用語が二つあっても問題が起きないように，またカナダに住む人たちがバイリンガルになることに力を入れていることがわかる[207]。

そして，このような新たな知識と情報に基づいて，次のような結論に至

---

[205] 同上，2ページ。

[206] 同上。

[207] 同上。

るのである。

> カナダで英語とフランス語が話せるということは仕事につくときなどに重要であるため，そういった学校に通う人が多いという。サービスがフランス語で行われずに訴訟問題になるといった事件も起きているぐらいである。
>
> カナダは英語の国であるというイメージが強かったが，今回の経験によって二つの大きな文化が共存している国カナダという印象が強くなった[208]。

日本から行った日本人が，上に述べたような情報に出くわすと，恐らく同じような結論にいたるものと思われる。スーパーで二カ国語表示の商品を目にし，ホストファミリーの家族が French Immersion の学校に行ったり，ダグラスカレッジのモニターがフランス語も話せたり，ケベッカーから「政府の補助で英語を勉強しにきている」と聞いたりすれば，上のような結論にいたるのは当然のことであろう。

ほんとうに，スーパーで商品を手に取り，英語とフランス語で書かれているのを見ると，「スゴイ，カナダ人は二つの言葉ができるんだ」と思ってしまう。カナダ政府の法律により，全国的に流通する商品の表示は英語とフランス語で表記しなければならない。しかし，ケベック州以外では英語しか知らない人の方が多く，印刷されているフランス語の説明は実際には読まれないのである。French Immersion についても，もちろん上に指摘されたような盛んな地域はあるだろう。しかし，French Immersion の教育を受けてバイリンガルになったとしても，一番の働き口はバイリンガルが条件である連邦政府の公務員や連邦政府関係の通訳になることであろう。もちろん，ホテルや旅行業で必要とされることはあろうが，民間企業でフラ

---

[208] 同上，２，５ページ。

ンス語が必要とされる分野は多くはない。英語を母国語とするカナダ人にとって，フランス語をマスターすることは就職という点では大きなメリットではない。ケベック州以外では，英語さえできれば民間企業において就職ができるのである。つまり，フランス語ができなくても民間企業には就職できるのだ。その逆に，ケベック州の中で仕事をするのであればフランス語だけで用が足りる。しかし，フランス語しか話せないケベッカーが，ケベック以外の地域で就職するには英語が必要となるのである。つまり，単純に「英語とフランス語が話せるということは仕事につくときなどに重要である」ということは正しくはない。「フランス語を話すケベッカーが，英語もできれば，カナダ全国で仕事につくチャンスが増える」ということが事実であろう。

カナダ政府が二カ国語政策に力を入れていると言うのは，その通りである。しかし，これは連邦政府のレベルであって，州政府のレベルでは同じではないし，民間企業の場合には当てはまらない。連邦政府の種々のサービスは，英語とフランス語の「いずれかの言語」で受けることができるが，これは州政府や民間企業には当てはまらない。従って，上に述べられている「サービスがフランス語で行われずに訴訟問題になるといった事件」に関しては，連邦政府の法律で決められている分野のケースだと思われる。

Ⅳ　ケベッカーとの出会い

守口からの学生たちは，既に触れたように後半の3週間はケベックから来たカナダ人学生たちと一緒に授業を受ける。フランス語訛の英語を話し，フランス文化を持ったカナダ人たちと一緒に授業を受けるという極めて稀な経験をするのである。一緒に授業を受けて，「仲良くなればなるほど，ますます〝この子達の故郷って，一体どんな所なのだろう？〟という」興味関心がわいてくるようである[209]。また，ケベッカーと一緒に授業をうけな

[209]「ダグラスカレッジ（2001年)」，12ページ。

がら，ケベックの独立についての話まで聞いているようである。ある学生は，次のように述べている。

> ケベック州は独立を主張し，独立に関する住民投票では 50％の人が独立を希望しているという。あと，一歩のところで踏みとどまっているということである。独立を引き止める英語圏のカナダと独立を望むケベック州との問題はカナダでも最も大きい政治問題のひとつであろう。独立に関する住民投票が行われたときにモントリオールに英語圏の人が集まってきて「独立しないで！」という行進を繰り広げたという。それでも「あと 10 年，20 年したらケベックはカナダではなくなってしまうだろう」と友達のケベッカーが言っていた[210]。

そしてプログラム終了後，親しくなったケベッカーの故郷ケベックを訪ねる人もいる[211]。そこで目に入ってくるのは，次のような光景である。

> カナダでは一般の住宅のベランダや庭，街のいたるところでカナダ国旗を見かけたのだが，ケベック州では赤いカナダ国旗よりも青いケベック州旗を多く見かける。カナダ国旗を見つけるのが難しいくらいである。他の州でも州旗は見たが，私が行った州の中で，ケベックほどたくさん州旗を見かけたところはなかった[212]。

このような光景の中でも，「一番強くケベックの主張を感じたのは自動車のナンバープレートである」と，次のように表現している。

> 車のナンバープレートは日本のように地方名だけが書いてあるので

---

[210]「ダグラスカレッジ（2002 年）」，4 ページ。
[211]「ダグラスカレッジ（2001 年）」，12 ページ。
[212]「ダグラスカレッジ（2002 年）」，4 ページ。

はなく，それぞれの州別にコメントのようなものが小さく書かれている。例えば，ブリティッシュ・コロンビア州は「Beautiful British Columbia」である。ケベック州では「Je me souviens.（私達は忘れない）」と書かれている。これは，ケベッカーがイギリス文化であるほかの英語圏に溶け込んでしまわず，自分たちの文化を忘れないようにしようという意味であるという。カナダとして成立する前の植民地としてのカナダでのフランス文化とイギリス文化の戦いを感じずにいられない[213]。

さすがにブリティシュコロンビア州で，この〝Je me souviens〟と書かれたケベックのナンバープレートをつけた車を見ることは稀である。しかし，オンタリオ州では比較的よく見かける。そして，そのフランス語の意味を知ると，一体「何を，私は忘れない，というのだろう」と思い，自然と〝Remember Hiroshima〟とか〝Remember Pearl Harbor〟を連想する。もちろん，上に触れられているように，「（ケベック）がイギリス文化であるほかの英語圏に溶け込んでしまわず，自分たちの文化を忘れないようにしようという意味である」というのは間違いではないが，それだけではない。さらに，「カナダとして成立する前の植民地としてのカナダでのフランス文化とイギリス文化の戦いを感じずにいられない」と述べられているが，そんなに単純なものではない。1608年にケベックを根拠地として成立したニューフランスの歴史を知れば，その意味が分かる。ニューフランスとは，現在のケベック・シティーからメキシコ湾にいたるまでの広大な領土に展開するフランスの植民地である。このニューフランスは，イギリスとの戦争に破れ消滅。以後，フランス人たちは現在のケベックに残り，「征服された民」としてイギリスに支配されるという歴史を経験するのである。だからこそ，ニューフランスが存在した日々，そしてイギリスに「征

[213] 同上。

服された民」であることを，忘れてはならないのである。また，人によれば，イギリスに攻撃された時に本国フランスは助けにきてくれなかったこと，その無念さを，忘れてはならないことになろう[214]。

V　ホームステイにて

1　ホストファミリーはシングルマザー

ダグラスカレッジの留学生たちのホームステイは，夏期集中プログラムに登録した学生たちに対して，大学側が斡旋するホームステイである。「若いカップルや，おばあさんの独り暮らし，大家族など，さまざまな形態の家庭」があり，中でもシングルマザーのホームステイが多いようである。あるシングルマザーの家庭にステイした学生は，次のように語っている。

> 私もシングルマザーのホストファミリーにあたり，年齢を最後まで教えてくれなかった母親ベルニスと，８歳のダニエルという男の子一人がいて，私を年の離れたお兄ちゃんのように慕ってくれました[215]。
>
> 母親のベルニスは近くの会社に勤め，仕事を持ちながらも通信教育でいくつもの大学の単位を取得するという勉強家で，私も大学生なので話題は尽きませんでした。ベルニス家では日曜日には家事，その他の仕事は一切しないという母親完全休日があり，夕食はピザを取ったり，外食するというユニークな決まりがありました[216]。

この学生のステイ先は，シングルマザーで，子供がいて，仕事を持ち，しかも通信教育で大学の単位を取得中とのことである。非常に頑張って生きているということが分かるし，カナダでは珍しいことではない。そして，このような状況であれば，日曜日は「母親完全休日」で家事は一切しない

---

[214] 加藤恒男『ケベック・わたしは忘れない』冬青社，1995 年，６ページ。
[215]「ダグラスカレッジ（2001 年）」，21 ページ。
[216] 同上，22 ページ。

ということにしないと倒れてしまうだろう。何も,「夕食はピザを取ったり，外食するというユニークな決まりがありました」ということではないのである。

ダグラスカレッジに限らず，英語集中プログラムがある大学は，世界中からやってくる学生にホームステイを斡旋している。ダグラスカレッジの留学生たちがステイする家庭もこのようなホームステイであり，特に守口市との姉妹都市交流に関係する人たちという訳ではない。従って，姉妹都市のホームステイとは異なる，ビジネスとしてのホームステイであり，通常の料金が支払われている。一人学生をステイさせると，月収の1/3ぐらいになるので，かなり経済的に助かることになる。そのような理由で，本来の姉妹都市交流の制度の中では見られないようなホームステイが存在するのである[217]。

2　ホストマザーは80過ぎ

90歳を越えた独居のご夫人がホストファミリーとして守口からの随行員の世話をしたことには既に述べた通りである。ダグラスカレッジのホストファミリーの中にも，高齢者が存在している。ある学生は，次のように述べている。

> 私はこの2ヶ月で本当に多くのことを学びました。英語についてももちろんですが，私はいろんな人と出逢って学んだことのほうが大きかったと思います。私のホストマザーは80歳を過ぎたおばあさんだったのですが，彼女は本当に暖かい人で，私と接する時間をとても大切にしてくれました。この2ヶ月間に出逢った人は……自分の考えかたや夢を持っていて，この人たちに出逢って一緒に生活し，私が得たものは言葉では表すことができないほど貴重なものでした[218]。

---

[217] 同上，21ページ。

[218] 〝Summer English Language Institute Bursary Program Spring Session″ 財団法人守口市国際交流協会，2004年，6ページ。

80歳を過ぎた高齢の婦人が一人で生活をしているだけではなく，守口からの留学生を迎えて，生き生きと毎日を送っている様子が伝わってくる。守口からの留学生も色々な事柄について教えてもらい大人の会話が楽しめたものと思われる。日本の場合には，80歳を越えた老人がホストファミリーになることなんて，そもそも考えられない。事実，長年にわたり姉妹都市交流をしている日本の都市ではホストファミリーの高齢化のためにホームステイが不足するという問題も起きている。カナダの高齢者のように，異文化を持った若い人と楽しい時間を共にすれば良い刺激になるだろうし，若者にとっても人生の先達から学ぶことが多いことであろう。さらに日本では想像もできないこのような生き方に出会えば，若い人のこれからの人生も変ったものになっていくかも知れない。

3　家族の一員として

7週間にわたるホームステイでは，どうしてもホストファミリーと上手くいかずホームステイ先を変更せざるをえない場合もあるようだ[219]。しかし，ほとんどの場合，快適なホームステイを体験してきている。そして，そのためには，各々が家族の一員となるための努力をしているのだが，その具体例を見ていくことにしよう。

(1)　異文化の中で “Yes” or “No”

カナダでのホームステイでは，おそらく次のような事柄は最初に誰でも経験することであろう。

> ホストファミリーによって生活ルールや食事がまったく違うために戸惑うことは，日本でいきなり見知らぬ人の家に滞在しても同じことだとは思いますが，そこに言語，文化の違いが加わって本当に神経を使わなければならなかったことを憶えています。最初は，英語が上手く話せないということも手伝って受け身がちになっていましたが，常

[219] 同上，10ページ。

に「イェス　オア　ノー？」とはっきり答えるようにホストマザーに促され，一生懸命英語で食らいつくようになっていきました[220]。

やはり，ここで述べられているように，日本人にとっては「イエス　オアー　ノー」と態度を明確にすることは難しい。日本語でのコミュニケーションでは，特に「相手に対して明確に『ノー』と言うこと」は極めて困難なことなのである。頭の中では分かっていながら，なかなか明確な態度表明をすることは難しく，これが日本人学生が最初に突破しなければならない文化的バリアである。この段階で，ホストファミリーとのやり取りが上手くいかずに，いきなりホストファミリーに追い出された日本人学生もいるようである[221]。

(2)　ホームステイ成功の工夫

ダグラスカレッジの留学生たちは，やはり大人である。ホームステイでも快適に過ごすことができるように，様々な努力をしているのが窺える。ある学生は次のように述べている。

私は，その日から家族の一員として，7週間生活する家族のことを知りたいと思い,部屋に閉じこもらずに,まずはリビングルームにいって，当たり前ですが英語でのコミュニケーションをはじめました。最初は知らないことばかりですが最初が肝心です。家庭のルールやリズムはその家庭により全く違うことを頭において，分からないことははじめにどんどん質問すべきだと思います[222]。

別の学生も次のように述べている。

---

[220]「ダグラスカレッジ（2001年)」，21－22ページ。

[221] 同上，22ページ。

[222]「ダグラスカレッジ（2002年)」，15ページ。

何か困った事があったり，手助けが欲しい時は，自分の心の中にしまいこまずに，キチンと家族に自分の意思を告げるように心がける事が必要だと思います。私はとにかく，「これはどうしたらいい？」の質問の嵐でした。もちろん，始めから何もかも助けてもらって当たり前！という態度ではなく，あくまでも，自分でできる範囲の事は自分でやります！という態度で相談すべきです[223]。

ここで二人の学生が述べていることは，ホームステイ先のルールを知り，分からないことは尋ねるということである。さて，こうしてホームステイ先のルールが分かると，家族の生活リズムを乱さないような行動をとることを心がけている。

私ははじめの一週間で生活リズムをつかめたのでその上で自分がすべきことをしました。お客さんではないので家事も積極的にしたり，子供達のスポーツを見に行ったり出来るだけ家族と一緒に行動しました。また，私が一番早く起きて学校へ行っていたので，ランチも自分で作って持っていきました。夜は子供たちが8時には寝るので速やかにベッドへいってもらうため，テレビをつけたり音楽を聴いたり，彼らにとって刺激になるような行動はつつしみました。自分の出来る範囲で思いやりを持って接すれば短期間でお互いに理解し合えるのではないでしょうか[224]。

客人ではなく家族の一員として，家族の生活のリズムを崩さないような心遣いと行動が大事だということが分かる。たったそれだけのことではるが，これを全て英語でやりとりするのであるから，「相手を知ろう・相手に

---

[223]「ダグラスカレッジ（2001年）」，8ページ。

[224]「ダグラスカレッジ（2002年）」，15ページ。

伝えよう」とする意思とコミュニケーション能力が重要である。このように出来れば，ホームステイでの生活も意義あるものになるであろう。ある学生は，「結局私は学校が終わった後，１ヶ月程滞在を延長したのですが，３ヶ月弱の滞在中，一度もイヤだなと思う出来事がありませんでした。[225]」と語っている。

4　家事は家族で

ホームステイの期間中，日本ではあまり見かけない光景を目にして，驚いたり，感心したりする点も多い。カナダ人の家庭における，以下のような家族関係もその一つである。

> ホストファーザーのピーターは典型的なマイホームパパです。仕事が終わると５時半ごろ帰宅し，夕食の用意を手伝ったり，子供たちと遊んだり。夕食後はもちろん後片付けを手伝い，私の宿題を教えてくれたり，とてもたよりになる存在でした[226]。

> 週末になると，朝からパンケーキを焼いてくれたり，草刈したり，洗濯したり，とにかく働き者のいいお父さんでした。また，ピーターはコールスローを作る達人です[227]。

> これは日本も見習うべきだな，思った事をいくつか挙げたいと思います。まず，子供達やお父さんがよく家のお手伝いをするなぁ，と感じました。食器洗い機が家にはなかったので，日替わりで兄弟が食器洗いの当番になっていました。もちろん，男の子なので，お母さんに言われてしぶしぶ……という時もありましたが,ゴミ出しにいったり，リサイクルの空き瓶などをお店に引き渡しにいったりと，家事全般を

---

[225]「ダグラスカレッジ（2001年)」，８ページ。

[226]「ダグラスカレッジ（2002年)」，14ページ。

[227] 同上。

手伝っていました。カナダの家庭の多くにプロパンガスを使ったバーベキューセットがあるのですが，カナダでは肉を焼くのはお父さんの役目というのが,割と一般的と聞きました。もちろんうちのホストファミリーのお父さんも，よくバーベキューで照り焼きチキンやビーフ等を焼いてくれていました。自分のシャツにアイロンをあてていた姿なども，日本ではあまり見かけないなー，と思いました。子供の時から家事を手伝う事に慣れている，というのが背景にあるのかもしれませんが，みんなで家事を分担するという習慣はとてもすてきだなと思いました[228]。

日本と違うのは，まずは父親の存在である。5時半には帰宅し，夕食の用意や後片付けを手伝ったり，子供と遊んだりする。週末には朝食にパンケーキを焼き，芝刈りをする。バーベキューで肉を焼き，自分のシャツにアイロンをあてる。このような父親は，日本では目にしたことがないはずだ。ところが，カナダでは珍しいことではない。そして，子供たちも食器を洗ったり，ゴミをだしたりして，家事を「手伝う」のである。こうして，「子供の時から家事を手伝う事に慣れて」，やがては父親のようになっていく。「家事を手伝う」と言えば，なるほどそうなのだが，ここには「自立するというカナダ的価値観」が関連してくると思われる。つまり，自分のことは自分でするということである。そして子供でも，それ相応の仕事をするのが当然という考え方である。日本でも昔は，庭の掃除とか近所の八百屋にお使いに行くとか，子供の仕事が存在していた。しかし，日本の子供たちは，今では「お手伝い」よりも勉強をしていれば良いという雰囲気なので，カナダの子供たちを見ると余計にその違いを感じることになるのであろう。

---

[228]「ダグラスカレッジ（2001年)」，8－9ページ。

5　子育ては親の責任

今の日本では，子供の行儀や言葉遣いに注意をしたり叱ったりする家庭は珍しくなってきているのではないだろうか。カナダでは子供を育てるのは親の責任という感覚が強い。そして父親と母親が共同で子育てにあたっている。

(1)　カナダの親子関係

父親と母親が共に子供たちに関わっている姿は，学生たちにとって非常に珍しく映るようであり，次のように観察している。

> (父親のピーターは)子供たちが行儀がわるかったり，悪い言葉を使うと注意した後でなぜ悪いのか，どうすればいいのか，おだやかにきちんと説明する姿に感心しました[229]。

> 私のホストファミリーは，お父さん(リチャード)，お母さん(バレリー)，15歳，13歳の男の子（ケイル，ジェリー）が2人，猫が2匹という構成でした。とにかくにぎやかな家庭でした。子どもはまさに反抗期でティーンエイジャー真っただなか！という感じだったので，生意気な言葉遣いや，親をからかったりする度に，ほぼ毎日両親（特にお母さん）に本気で怒られていました[230]。

ここから見えてくることは，まず日常的なレベルで親子の間にコミュニケーションが存在しているということ。そして，母親だけではなく父親も一緒になって，行儀や言葉遣いといった基本的な躾を行っているということである。今や日本では躾に関して，本気で子供を叱ることは珍しくなってきているのではないだろうか。カナダの家庭では，子育ては親の責任であり，社会に出て「して良いこと，してはイケナイこと」をしっかりと教

229「ダグラスカレッジ（2002年)」，14ページ。

230「ダグラスカレッジ（2001年)」，6ページ。

えている。

さらに学校のプロジェクトへの取り組みについても，父親がどのように関わっているのか，別の学生は次のように観察している。

> 小学生のマッケンジーは夏休み前のプロジェクトで火山の研究・発表をしていました。お父さんと一緒に火山の模型作りをしたり，火山にまつわる単語をおぼえたり，プレゼンのリハーサルもしていました。こうして親子一緒に協力して一つのものを完成させることは，大変すばらしいことだと思います[231]。

小学生が夏休み前のプロジェクトとして，火山のことを調べ，模型を作り，しかもプレゼンをするということ。ここにもカナダ社会の価値観を見る思いがする。火山の模型を作ることは，日本でもできるだろう。しかし，その模型を提示してプレゼンをしようという訳である。これは守口の留学生たちがダグラスカレッジで散々苦労したことであるが，カナダでは小学校のレベルからそれをしているのだ。さらに，プレゼンの助言に父親が積極的に関わっている。日本では，このように父親が関わることは，おそらく時間的に難しいことだろう。そして，子供を「独立した存在」という認識がなければ，ついつい余計な口出しをしてしまい，親子一緒にプロジェクトを完成させることは難しいことであろう。

6　ホストファミリーと共に過ごす

ホームステイをいかに過ごすかによって，得られるものも大きく違ってくる。ここでも学生たちは，様々な工夫をしているのが分かる。

(1)　宿題を媒介として

毎日の英語の宿題をホストファミリーに教えてもらうというのは，極めて自然で緊密な関係を築くのに適した方法である。何人かの学生が，宿題を通じてどのような関係を打ち立てていったかは，次の通りである。

---

[231]「ダグラスカレッジ（2002年）」，15ページ。

私は，宿題をホストファミリーと一緒にすることが多かった。おかげでホストファミリーと話す機会が増え，カナダと日本の考え方の違いなどを見つけられた。いくつか，面白い教材があったので，ホストファミリーに見せたところ，とても気に入ったらしく，コピーしてあげたらとても喜んでいた。ジャニスの宿題は，ホストファミリーと仲良くなるためにも一役買ってくれたようだ[232]。

ホストマザーのジュリアは週に2・3度病院で働きます。彼女はとても頭が良く，常に冷静ですが心の温かい方でした。私にとってはお母さんというより良きアドバイザー，親友でした。夜，宿題を通して日本の話をしたり，カナダの話を聞たり，学校での出来事を報告したりしました。パーティなどでなかなか顔をあわせない日が続くと，話したいことがたくさんあって困ったほどでした。ジュリアは常に真剣に私の話に耳を傾けてくれ，発音，文法等で私の言うことを理解できないときでもあきらめずに聞いてくれました[233]。

私は学校から帰ると，自分の部屋ではなく，だいたい家族がよく集まるリビングに居ました。カナダに居る間に少しでもボキャブラリーを増やして，英語のリスニングとスピーキングの力をつけたいという目標があったからです。もちろん学校の宿題を自分の部屋でする事もありました。でも，もし私が部屋のドアを締めきったまま，自分の部屋にこもってしまっていれば，家族とあんなにも楽しくコミュニケーションが取れなかったかもしれません[234]。

このように，まずリビングに出て，宿題を通してホストファミリーと新

---

[232] 同上，7ページ。
[233] 同上，14ページ。
[234]「ダグラスカレッジ（2001年)」，8ページ。

しい関係を築くことが可能である。そして，英語のみならず，日本のことやカナダのことについても，話しができるような関係になっていくのである。このような経験から，学生の一人は次のように的確なアドバイスをしている。

> 自分の部屋にこもって学校の予習・復習をする事も，もちろん大事だとは思いますが，特にホームステイを初めてすぐは〝部屋のドアを閉め切ったままの状態＝心の扉も閉ざしてしまっている〟ように，ホストファミリーには映るかもしれません。英語のうまいヘタは問題ではなく，つたない英語だとしても，何かを伝えようとする姿勢があれば，ホストファミリーにもその努力は理解してもらえると思います。……まず何よりも大切なのはコミュニケーションを取りたいという気持ちを明確にする事だと思います[235]。

「英語のうまいヘタ」は問題ではなく，つたない英語だとしても，何かを伝えようとする姿勢があれば」という表現に象徴されているように，これが文化を越えて相手とをつなぐ鍵であると言えるだろう。

⑵　料理を通して

「ヘルシーで太らない」ということで，日本料理に関心を示すカナダ人も多い。もしホストファミリーが日本料理に興味がある場合には，料理は言葉なしにお互いに理解しあえる優れた術である。ある学生は，次のように語っている。

> 彼女は日本という国に興味をもち，中でも特に食べ物に強い関心をよせていました。私が作る料理を観察し，どう作るのか，調味料の種類も質問されました。カナダのスーパーで手に入る調味料をつかって

---

[235] 同上。

自分でアレンジした日本食（実際には中華風）を作ったので，カナダの人達にも作りやすいと思います。ジュリアはきっと日本食作りに挑戦していることでしょう。

私も，ジュリアの作る料理やおやつが大好きで，いくつかレシピをいただきました。時間があるときに作ってみようと思っています[236]。

ここで述べられているように，「中華風」でも何でも良いのである。海外の日本料理店で出されているようなものである必要はない。日本人が毎日家庭で食べている料理で良いのだ。日本人が毎日どのような食事を食べ，どのような味付けで，どのように作るのかということ，これはまさに日本の文化であり，価値である。料理は人間の基本的な営みと言っても良い。カナダのホームステイの家庭で，この料理という共同作業を通じて，そして出来上がった料理を舌で味わうことにより，まさに言葉なしにお互いを理解することができるのである。

7　驚きのカナダ流皿洗い ── 濯ぎなしでO. K.

カナダの家庭には自動食器洗い機が設置されていることが多い。それも12人分の食器が一度に洗えるような大きなものが一般的である。もちろん少しの食器を洗うのであれば,食器洗い機を使わずに手で洗う場合もある。しかし，単に使用済みの食器を洗うという単純なことなのだが，そんな所にも文化的な違いが現れることがある。そんな状況に遭遇したある学生は，ショッキングな心境を次のように述べている。

まず向こうに行って驚いたのが全自動食器洗い機があったことです。日本でそんなものを使ったことがなかったので，使い方が分からず教えてもらいました。ただ入れるだけでとても簡単でしたが，たまに大きい物が食器洗い機に入らない時に自分達で洗っていました。そしてその日も僕が手で洗っていた時ルームメイト（フランス系カナダ

236「ダグラスカレッジ（2002年)」，14ページ。

人）が（言ったのです。）

ルームメイト：「KOUJI，ちょっと貸してみーやー。もっと早くできるように教えたるわ。」

僕：「善い奴やわー」

ルームメイトが炊事場のところに水を溜め，石鹸を投入。大きい物（なべとか）をその石鹸水に浸しゴシゴシと洗っていたけど，そこまで僕との差が無かった。次の瞬間，水ですすいでいないのに，いつもならキレイになった食器を乾かすところに置いていた。

僕：「ここに置いたら，他のんに石鹸つくで。」

ルームメイト：「終わったやん。それ洗うのん。」

僕：「ん，何言うてんねん。聞き間違いか？」「まだ石鹸ついてるやん。」

ルームメイト：「大丈夫や。そんなん気にすんな。少しだけやし。」

僕：「ウェンディ，ウェンディ（ホストマザー）あんなんでいいの？あかんよねー。」

ウェンディ：「いいよ。」

ルームメイト：「KOUJI やってみ。もうやり方分かったやろ。」

僕：「そらわかるけども」

ゴシゴシした後，おんなじように石鹸がついたまま終了。「納得イカン！」[237]

このような展開になれば，日本人なら絶対に「納得イカン」という気持ちになって当然のことだろう。食器を濯ぐことなく石鹸が残ったまま乾かすということは，まさに日本ではあり得ないことである。洗うとは食器を奇麗にすることであり，石鹸が残ったままの状態を，普通日本人は「きれいに洗った」とは考えないのだ。しかし，一般的にカナダ人にはこのような「潔癖性」はなく，石鹸の泡が残っていようが気にしない。多少，石鹸

[237]「ダグラスカレッジ（2001 年）」，15 ページ。

が残っている食器を次回使うとしても,「体に害がある訳ではない，そうであれば，とっくの昔に健康被害がでているはずである。」と考えるのであろう。ところが，石鹸の泡も残らず落とし全て奇麗に洗うのが日本流である。このようなことはかなり時間がたっても慣れないことなのかも知れない。このような感覚は，カナダのバスルームにお風呂とトイレが設置されているのは感覚的に受け入れがたいと感じる日本人の感性に通じるものかも知れない。

8　カナダは，まだ貧しい！

守口の留学生の中には,「(カナダは) 一応先進国の一員ですが，まだまだ貧しいようです。」と認識した学生もいる。筆者はこれまで50近い自治体を訪れてカナダとの姉妹都市関係を調べてきたが，インタビューでも報告書でもこのようなイメージと出逢ったの初めてのことである。特異なケースかも知れないが，どうしてカナダは貧しいという印象を抱いたのかについて興味が湧いたので敢えてとりあげることにした。具体的には次のように述べられている。

> カナダは一般に治安がよいと言われています。時間の流れも日本よりゆっくりです。一応先進国の一員ですが，まだまだ貧しいようです。なぜなら産業がありません。産業といえば，木材加工，漁業・農業・観光業といったところです。日本みたいに大企業はたくさんありません。年収も驚くほど安いと言っていました。その分，物価もいくぶん安いです。よって食事や着る物などの日常生活も質素です。
>
> 私のステイ先は，学校から歩いて5分の所にありました。家の人は，チャックさんとアントネラさん夫婦で子供はいません。共働きのため，平日はあまり家にいません。アパートメントで生活も質素でした。家の人は気さくな人で細かいことは言わなかったので，助かりました[238]。

---

[238]「ダグラスカレッジ (2002年)」，17－19ページ。

なるほど「時間の流れは日本よりゆっくり」だろう。何しろ，朝8時から働いて4時で仕事は終わりだ。それで即家に帰り，毎日夕食は家族で食べることができる。しかし，なぜ「貧しい」先進国というイメージがでてきたのかは謎である。強いて言えば，産業は「木材加工，漁業・農業・観光業」しかなく，「日本のような大企業」はないからという箇所が当てはまるかもしれない。しかし，バンクーバーの街の中には総ガラス張りの高層ビルが立ち並んでいる姿を見れば，このイメージと合致するだろうか。バンクーバーの海辺にいけば多数のボートやヨットが停泊しているが，日本人でそのような生活をしている人はいるだろうか。ノースバンクーバーの緩やかな地形を登っていくと，日本では見られないような豪華な住宅が立ち並んでいるのが分かる。

「年収も驚くほど安く，食事や衣服も質素である」とのことであり，この学生がホームステイした所も「アパートメントで生活も質素」だったとある。このことからホストファミリーから聞いたりホームステイをした感想も含まれているようである。もちろん，どこの社会にも低所得層は存在するが，カナダ人の年収が日本人と比べて「驚くほど安い」ことは考えられない。むしろ，購買力平価を考慮するとカナダの方が上のようである[239]。カナダでは，「ある一定の価格帯の商品」しか存在しない。日本のように牛肉にしろ何にしろ「高額商品」は存在しない。そして自分で選んだ物は長く使う傾向にある。その意味で，「生活も質素」だと言えるかも知れない。しかし，日本から中学生研修団に随行して行った中学校の教員が，カナダ側の教員宅に招かれて，その余りにも豊かな住環境に驚くことはよくある。日本では中学校の教員であれ高校の教員であれ，カナダの教員のような「豪華な家」に住むことなど，夢のまた夢なのである。

そして休暇についても，日本では有給があっても全部は取りきれないのが普通である。カナダでは，普通夏休みやクリスマス休暇にまとまった休

---

[239] http://fxnavi.if.land.to/2012/03/31/世界各国の平均年収は？/

暇を取り，多くの人は2週間から1ヶ月程度の夏休みが取れるのである。これでも，まだ「一応先進国の一員ですが，まだまだ貧しいようです。」と言えるだろうか。

Ⅵ　多様性の認識

街の中でも，学校でも，ホームステイの関係でも，そこで観察される日本と異なる大きな違いは，多様性の存在である[240]。しかも，それぞれが堂々と生きている様子に驚くのである。学生たちは，次のような観察をしている。

1　カナダの多様な家族と民族

カナダの家族も人種も多様であり，日本のように均一的な社会からいくと非常に驚かされる。ある学生は，この点について次のように述べている。

> 子供が養子だったり，シングルマザーだったり，色々な家庭がありました。日本だと違う文化をまだ〝珍しい〟と興味本位で見てしまう所があるような気がします。けれど，カナダの人達はお互いの文化の違いをそれぞれ認め合って生活しています[241]。

> カナダを訪れてみるまで，私もよく知らなかったのですが，カナダは多民族国家です。本当に色々な文化や家族構成がここカナダにはありました。もちろん小さい頃から，学校の同じクラスの中に中国系，インド系やアフリカ系等の様々な国からの移民の人達に囲まれているので，自分と違う肌の色，文化，言葉なども自然に受け入れやすい環境だと思います。13歳のジェリーのクラス写真をみせてもらった時にも感じました[242]。

---

[240]「ダグラスカレッジ（2001年)」，21ページ。

[241] 同上，9ページ。

[242] 同上。

このようなことは，ホームステイをしながらカナダ人に囲まれて生活をするようになると，自然と分かってくる事柄である。日本であれば，養子の場合は，普通は話したがらないので，表にでることはない。しかし，カナダの場合はオープンである。ホームステイの家庭も，シングルマザーで仕事を持っている所も多い。普通，日本ではシングルマザーの家庭でホストファミリーを引き受けようということは想像できない。まして，働いている場合は尚更である。ところが，普通に生活をしながら，ホストファミリーとなるので，そのような事情に慣れていない日本の学生にとっては非常に目を引くことがらなのである。そして，学生たちは，ここニューウエストミンスターでは子供たちも小さな時から学校で顔立ちや肌の色の違う仲間たちと一緒に育っているということを知るのである。

2　多様な民族が一緒に

さらに，アメリカでの経験がある学生の場合には，同じように多様な民族を抱えるアメリカ社会と比べ，次のように両者の決定的な違いを指摘している。

> 実際にニューウエストミンスター市に7週間住んでみて感じたことは，様々な人種や民族の人々が，ニューウエストミンスター市に住んでいるということである。そして，居住地域に区別がなく，同じマンションやアパートに一緒に住んでいたりする。私は，大学の1回生(1997年)のときに，3週間カリフォルニアに滞在したが，ヨーロッパ系アメリカ人が多く住む地域と，アフリカ系アメリカ人の多く住む地域があったことを覚えている。そのことに比べると，ニューウエストミンスター市では，様々な人種や民族の人々が，一緒に住んでいるというのは，私にとって非常に驚きであり，非常にすばらしいことであると感じた[243]。

---

[243] 同上，4ページ。

もちろんカナダの都市の中には，イタリア人地区とかギリシャ人街とか中華街とかのように，同じ民族が固まっている所もある。そして，あからさまな差別ではないにしろ，ある人種にとってはアパートの契約が難しいというようなこともある。またインドとパキスタンの関係が厳しくなった時などは，それらの国からの移民同士で対立し合うようなこともある。しかし，異なる民族同士が混在しながら，割と穏やかに住んでいることも確かであり，これがカナダの特徴であり，アメリカとは異なる点であると言えるだろう。

Ⅶ　公式行事に参加

姉妹都市の関係では，相手方の公式行事に招待されることは，よくあることである。ダグラスカレッジの留学生たちも，守口市の代表としてニューウエストミンスターの伝統的な行事であるメイ・デイ・セレブレーションに出席し，カナダ人の伝統行事の祝い方を知るのである。その時の様子を，学生たちは次のように述べている。

> このお祭りは……（ブリティシュ・コロンビア）州の中で最も古い歴史をもつニューウエストミンスター市が毎年の平和と繁栄を願って，また神様への感謝の意味も込めて行われるものです。毎年10から15歳の少女からメイ・クイーンを選び，このお祭りではもちろん，後におこなわれるHYACKパレードにも登場します。市の文化財，IRVING HOUSE資料館には，歴代メイ・クイーンの写真が展示されてあります[244]。
>
> また，ダンスも見ることが出来たのですが，それは長い歴史を感じさせる様なクラッシックなおどりでした。大きなグラウンドに白い柱

[244]「ダグラスカレッジ（2002年）」，10ページ。

が 15 本位たっています。音楽にあわせて正装した子供たちが入場します。一つの柱にようにスタンバイします。一人一人，ポールからたらされているカラフルなひもを持って笛の合図で，スキップで他の子供たちの間を行き来しながらぐるぐる周ります。そのよう周っているうちに，ポールにひもが巻きつけられていき，美しい模様になるのです。カナダに来て最初の伝統文化を体験できたすばらしい日でした[245]。

その夜，夕食に招待され，4 人で会場にむかいました。会場には正装された方々がたくさんいらっしゃって，私は大変恐縮したのをおぼえています。同じテーブルにすわっていた TOM さんという方はオルガン奏者で 28 年間，このパーティでの BGM を担当されてきたそうです。演奏もすばらしく，とても感動しました。料理も伝統的でした。ローストビーフ，マッシュドポテトにグレイビーソース，プラスとっても甘いチョコ・バニラのムースをいただきました。

この様なパーティに参加したことがあまりなかったので緊張しましたが，回りの温かく親切な方々のおかげで楽しく過ごすことができました[246]。

今年で 134 回目のメイデイとなったそうです。そこに長い歴史を感じます……。印象的なことは，毎年 May Queen として小学校中学校くらいの女の子が選ばれます。その May Queen を中心として，男の子が Maid of Honour，Medal Bearer，Register Bearer として選ばれ，また女の子が Second Flower Girl，Third Flower Girl，Fourth Flower Girl として選ばれます。選ばれた子供達をみると，移民の国を象徴していろいろな民族から選ばれているようでした。ここにも素敵

[245] 同上。

[246] 同上，10－11 ページ。

なものを感じましたが，一番感動したことは，その会はただ集まってメイデイをお祝いし食事を頂くのがメインではなく，ダンスがメインだということです。そのダンスというのは，今年のMay　Queen，Flower GirlsとRoyal Lancersと呼ばれる紳士（これらの紳士は毎年ボランティアで市のいろんなところから集められます。）の方がラインダンスをするのです。そこに長く繋がっている歴史と人々がウエストミンスターを愛している心を感じることができました。また，レセプションには以前のMay Queenであった淑女の方も参加されており，きちんと何代のMay Queenであったと参列者の前で紹介されていました[247]。

招待された方々は正装で会食に臨むようであり，そのような雰囲気に慣れない守口の留学生たちにとっては，緊張を経験する場でもあるようだが，普通の旅行者では体験できない貴重な機会でもある。さらに重要なことは，カナダ人の伝統的な行事の祝い方に，そのカナダならではの特徴をつかんでいることである。つまり，May Queenという祝賀行事のシンボル的存在

May Dayに招待されて[248]

[247] 〝Summer English Language Institute Bursary Program Spring Session〟財団法人守口市国際交流協会，2004年，11ページ。

[248] 守口市国際交流協会のホームページより。

が存在し，中学生ぐらいの少女から選ばれるということ。日本では，このように個人が象徴的な役割を果たすことは珍しい。May Queen に付き添う役割を果たす子供たちは，民族の違いを考慮して選ばれているということ。ダンスに参加する人々も市民のボランティアから選ばれており，市民が一体になって祝う姿勢が見てとれる。さらに，オルガン奏者として 20 年以上にわたり参加している人，そして歴代の May Queen も参列し紹介され，そこには歴史的な継続と繋がりが見られるのである。

そして，このようなニューウエストミンスターの伝統的行事に参加した学生の中には，それまでになかった異なった物の見方を得た人もいるようだ。それは次の言葉に表されている。

> 私自身も小学校からずっと守口で 35 年暮らしてきて，守口市に大変愛着があります。守口もニューウエストミンスターのような一年に一度その市の歴史を感じるようなパーティがあれば素敵ではないかと思いました。守口の市民祭りもその中の一つではあると思いますが，メイデイのラインダンスのようなこれからの守口を支える人と今までの守口を支えてきた人との何か接点が見えるようなものがあるとすごくいいと思いました[249]。

日本社会では，どの町でもどの村でも，年中行事のなかの祭りは，地域の習慣として受け継がれてきている。去年と同じ祭りではあるが，今年の祭りは今年限りの祭りでもある。集団の行事であるが，過去との「人と人とのつながり」が意識されているわけではない。個人が祭りの象徴となり，昨年の担い手から今年の担い手へ，そして今年の担い手から明日の担い手へ，というように「引き継いでいく」という意識はされていない。歴代の May Queen も紹介されて，個人がどのような役割を果たし過去とつながりをもっているのかということが明示されるのは，個人を中心とした社会が

---

[249] 同上。

基礎にあるからであろう。その意味で，この学生が指摘するように，「これから支える人」と「今まで支えてきた人」との接点が見えるようなものが生まれるのは，日本人の考え方が変り始める時であるのかも知れない。

Ⅷ 「日本の良さ」を認識

カナダに7週間も滞在すると，カナダの生活と日本人が当たり前としている生活の仕方が随分違っているのを感じるようになるものである。そして，ついつい次のように考えてしまうのである。

> ショッピングモール等も日曜などは夕方6時には閉まってしまうので，不便だなー，とよく思いました。日本に居ると，便利な事に囲まれて，それが当たり前と思い勝ちですが，こうやって日本の外に出てみると，改めてその便利さに気づかされる事も多かったです[250]。

確かに日本からカナダに行って生活を始めると，このように思うのが普通であろう。日本の普通の生活の「便利さ」に気づかされるというのも，その通りである。さらに，日本での生活では，いかに物事が迅速に処理され，時間が厳守されているのかも知ることになるのである。これも，スーパーとかお店で買い物をする時によく経験することであり，ある学生は次のように述べている。

> 日本の良さにも目をむける事もできました。例えばスーパーのレジに並んだ時などは，だんぜん日本の方が速いです。また1 HOUR PHOTO（1時間で現像ができるカメラ屋さん）でさえ，日曜などで忙しくなると，1時間後に写真を取りにいっても，平気で，「今日は数が多く現像に時間がかかるので，また後で来てください。」と言われました。「じゃあ，あとどれぐらいかかるの？」と聞いても，「はっきりわ

---

[250]「ダグラスカレッジ（2001年）」，11ページ。

かりませんので，もう一度30分後に来て下さい。」と言われ，30分後に行ってもまだ出来ていませんでした。「そんなん，1 HOUR PHOTOとちゃうがな！」とイライラしましたが，「まぁ，ここはカナダやし，しょうがないよな。」と，その度自分に言い聞かせるのでした[251]。

新しいものに出会う時，今までに自分の中にある基準に基づき理解し判断しようとする。つまり，日本とはことなるモノ，異なるやり方に出会って，それを理解しようとするのは「日本の物事」が基準となっているのである。そして，ここでは，夕方6時に閉店になるカナダの店を見て，遅くまで買い物ができる「日本の便利さ」を再認識するのである。また，カナダのスーパーでのレジでの処理具合や写真の仕上がり時間についても当てにならないという経験をして，「日本の良さ」を再確認するのである。多分これが多くの日本人が共有する感覚であろう。そして，これはあくまでも「日本的な基準」で判断しているからに他ならない。1年，2年，3年とカナダに住み「カナダ的基準」が理解できるようになれば，このような解釈とは異なった解釈をするようになる。日本はなるほど便利だが，「そこまで便利なことは必要なのだろうか？」と思い，早く店を閉めるということは「家族と団欒できる時間が増える」ということではなかろうか，と考えるようになることだろう。さらに，写真の仕上がり時間が守れないのは，店の受付係やその他の従業員全員が「日本のように一つのチーム」として働いているわけではないと知った時に，カナダの店員の行動が理解できるようになるだろう。自分たちとは異なる文化を理解することは，まことに時間のかかることである。

おわりに

本稿では，守口市の姉妹都市交流担当者，セカンダリースクールに派遣

---

[251] 同上，9ページ。

される中学生，およびダグラスカレッジへの短期留学生という3つの分野において，異文化カナダとの接触がどのような影響を及ぼしたのかを考察してきた。ここでは，それらのうちから特筆すべき影響を指摘して，まとめとしたい。

まず第一に，守口市の担当者とニューウエストミンスター市の関係者との間には，組織重視と個人重視というかなり重要な価値観が関係する問題が見られる。日本側は行政が関係しているので何事にも稟議書を関係部署に回して上司の決裁を仰ぐのが普通である。ところが，ニューウエストミンスターからやってきたカナダ人は「日本的な手続」に関係なく物事を運ぼうとするのである。カナダ側の関係者は，プログラムごとに異なるので，本論でも触れたように，現実的な対応としては，守口の担当者が述べているように「何回も言い含め」ることが必要であり適切な措置であろう。

守口の担当者が歓迎晩餐会の席でカナダからやってきた市会議員の行動に驚いたのも，この組織重視と個人重視という価値観と関係している。このような公式行儀の席では，日本的な振る舞いは式次第にしたがって行動するのが普通であるが，カナダからの議員は何とエルビスプレスリーの真似をしてパーティーを盛り上げようとするのである。守口の担当者は「フランクに言いたいことは言うし，喋るし，非常に和みますね」と述べているように，その捉え方は肯定的である。日本側の担当者によれば，このような行動を嫌う人もいるかも知れない。しかし，好むと好まざるとに関わらず，日本的やり方とは異なったやり方が存在するということを認識することは，姉妹都市交流を進めて行くうえで非常に重要なことであると言える。

第二に，ニューウエストミンスターでホームステイをした市の職員や引率教員を驚かせるのは，カナダ人が大切にする個人主義という価値観である。91歳の老婦人が，ホストマザーになり，食事も作ってくれるなんて，日本人の想像もできない事柄である。しかも，その老婦人の息子さんが車で2～3分の所に居るにも関わらず，お互いが独立した一軒家に住んでいるのである。日本的常識からすれば，一軒家に同居すれば光熱費などの基

本料金も一軒家分で済むし，何よりも同じ屋根の下に住んでいるという安心感があると考えるだろう。しかし，カナダはそうではないのである。生まれてから，親とは異なる存在として育てられてきて，大学生にもなれば家を出て独り暮らしを始め，それ以後親とは同居することはないのが「当たり前」の社会なのである。このように，91 歳の老婦人のホストマザーが存在するということ自体，日本人にとってはカルチャーショックなのである。

第三に，ニューウエストミンスターの市長を表敬訪問した引率の教員や生徒たちを驚かせたのは，行政の長たる市長と一般人の間に存在する「フラットな関係」である。引率教員は「ざっくばらんな感じ」という言葉を使い，生徒たちは「フレンドリー」という言葉で表現している。日本では，市長などの「行政の長」は普通の一般市民よりは「一段上」という感じで距離感がある。しかし，カナダでは「市長さんが目の前にいるというのに気付かないくらい」で，「一般市民と変わらない様子」だと生徒の一人が述べているが，まさにその通りである。相手が中学生であれ誰であれ，個人として同じ高さに位置する「フラットな関係，平等な関係」がカナダ的価値観の一つである。

このような「フラットな関係」という価値観は，守口の生徒たちがセカンダリースクルを訪問した時にも感じていることである。ほとんどの生徒たちは「自由な雰囲気」について述べているが，ある生徒は「先生と生徒が友達みたいな感じだ」と観察している。これも同様の「フラットな関係」であろう。そのような関係が基本に存在するから，生徒たちも自由に発言ができるのだが，それがまた日本の中学生を驚かせるのである。

第四は，守口の中学生たちが驚き憧れたのは，セカンダリースクールの「自由な雰囲気」である。「制服もなく，登校手段や持ち物も自由」である。日本では，とても考えられないことである。さらに，「生徒が授業中でもジュースを飲んだりガムをかんだり」している光景を見て驚いている。このような自由な光景を見て，自由には「責任は伴うのだろうけど」と生徒の一人が述べているが，なかなか言葉だけでは理解するのは難しい問題で

ある。表面的には，日本とは全く異なっているのがよく分かるのだが，これは個人主義と集団主義の根本的な価値観に関する事柄である。そして，この「おわりに」でも取り上げた個人主義に関する他の項目とも密接に関連している。日本では，子供の時には「川の字」で寝るが，カナダでは生まれた時から両親とは別室で独り寝である。「独立すること」を重視するという価値観があり，大学生になり家をでてからは両親と一緒に住むことはない。守口の中学生が憧れるセカンダリースクールで見た「自由」とは，このようなカナダ的価値観の一部分に過ぎないのである。

第五に，ホストファミリーとのコミュニケーションにおいて，守口の中学生たちは生まれて初めての貴重な経験をすることである。ホストファミリーたちは，「やさしい英語」や「簡単な表現」を使って「ゆっくりと」，しかも「分かるまで」，「何度も」繰り返して話してくれる。子供たちは，「身振り手振りや，時には絵に描いたり，辞書を片手に」，何とか必死に伝えようとするのである。こんな風に，なり振り構わず必死になって他人とコミュニケーションをした経験はおそらく皆無であろう。日本語でも，このようなことは経験したことがないはずである。そして，このような経験を通して，お互いが必死になって伝えようとして，「伝わらなかったことが，伝わった時の感動」を体で感じるのだ。ここで初めて，大切なのは「伝えようと努力すること」だと知るのである。そして，ホストファミリーとは「伝え合うという共通体験」をすることにより，別れの時の涙となるのである。生徒たち自身は，このような実戦的経験を味わうことにより，今までにはなかった「自信」を感じるようになるのである。

第六は，ダグラスカレッジの留学生にとって，一番のカルチャーショックは異文化の中で「日本では経験したことのない教育システム」との出会いである。まずは，自ら発言するという授業形式自体が馴染みがないものである。しかし，発言しないということは，「個人として存在しない」ということを意味している。「他者に対して自分を表現すること」は，日本語でもやったことがないことである。それを英語を使ってやらなければならない。そのような教育システムでの3ヶ月にわたる授業は，まさに日本の教

育により形成された「自分自身の再編成」という作業だといえよう。集団主義の社会で身につけた教育は，個人主義の社会での教育現場では通用しないということが分かるのである。そして，そのような教育システムを体験した留学生たちは，留学前の自分とは全く異なる自分自身に生まれ変わったという意識を持ち，どこででもやっていけるという自信を持つことになるのである。

第七は，強烈な個性を持つケベッカーたちとの出会いにより，ダグラスカレッジの留学生たちは大きな影響を受けていることである。授業で一緒に3週間を過ごし，ケベッカーの視点からの話を聞き，非常に親近感を覚えるようである。しかし，一方的にケベッカーの話を聞くだけでは，ケベックのことカナダのことを客観的に捉えることはできない。カナダが国家として成立する前の歴史を知れば，ケベッカーの発言をより客観的な文脈の中で理解できたことであろう。ニューフランスと呼ばれるケベック市からニューオリンズにいたるまでの広大な領土はイギリスとの戦争に破れ消滅し，以来イギリスに支配されてきた歴史を持つという事実を知っていれば，ケベッカーの話もケベック独立問題もより客観的に捉えることができたに違いない。この点はカナダ政府の二カ国語政策とも関連しており，「英語とフランス語が話せるということは仕事につくときなどに重要である」という表現は適切ではなく，むしろ「フランス語を話すケベッカーが，英語もできれば，カナダ全国で仕事につくチャンスが増える」ということが事実であることを知ったことであろう。

第八は，ダグラスカレッジの留学生たちが，カナダ文化の特徴として，カナダの家族のあり方をホームステイで発見したことである。日本と大きく異なるのは，母親だけではなくて父親も日々の子育てに関わっているということである。さらにカナダの場合，皿洗いをしたり「パンケーキを焼いてくれたり，草刈したり，洗濯したり，とにかく働き者のいいお父さん」という言葉で現されるように，彼らが知っている日本の父親とは大いに異なっているのである。子供たちも父親と同じように皿洗いや家事全般を手伝うなど，この点でも日本の子供たちとは異なっている。ここには，家族

全員で家庭を動かしていこうという価値観，そして個人的に独立してもやっていける能力を身につけさせようというカナダ人の価値観を見ることができる。

以上のように，守口の姉妹交流担当者，派遣される中学生やダグラスカレッジの留学生たちは，カナダ人とカナダとの接触を通して実に様々な影響を受けている。そして，中学生の場合にはホームステイで実戦的なコミュニケーション体験をすることにより，またダグラスカレッジの留学生たちの場合にはカナダの教育システムで鍛えられることにより，カナダに行く前の自分とは異なる自分に成長したという実感を持つようになっている。さらに，姉妹都市交流担当者についても，日本的な価値観とは異なるカナダ的な行動様式に触れることにより，柔軟に対応していこうという姿勢が見られる。

聞き取り調査資料

・第1回聞き取り調査：財団法人守口国際交流協会にて，2005年9月21日。
　南　文裕（広報課長）
　助川勝彦（事務局次長）
　坂口智子（庭窪中学校英語教諭）
・第2回聞き取り調査：財団法人守口国際交流協会にて，2005年9月22日。
　南　文裕（広報課長）7年間事務局長
　助川勝彦（事務局次長）
　谷本芳夫（商工農政課主任）

（南文裕氏はインタビュー当時には既に広報課に移動されていたが，二日間にわたるインタビューの日程は南氏が全て設定してくださった。それまで既に7年間にわたり国際交流協会の運営にあたってこられ事情に精通されている。普通は元の職場の件に関して，日程の設定のみならずインタビューにまで同席していただくことなどあり得ないことである。ここに心より感謝の申しあげます。なお，肩書きは当時のものである。）

資　　料

・議事録『日本カナダ姉妹・友好都市会議「21世紀における多様な交流をめざ

して」』2001 年 7 月 9 日，カナダ大使館。
・「姉妹都市派遣中学生報告書（3 月 25 日～ 4 月 1 日）」財団法人守口市国際交流協会，1999 年。
・「姉妹都市派遣中学生報告書（3 月 22 日～ 3 月 29 日）」財団法人守口市国際交流協会，2001 年。
・「姉妹都市派遣中学生報告書（3 月 25 日～ 4 月 1 日）」財団法人守口市国際交流協会，2004 年。
・「ダグラスカレッジ夏季英語講座派遣留学生報告書 5 月 7 日～ 6 月 22 日」財団法人守口市国際交流協会，2001 年。
・「ダグラスカレッジ夏期英語講座派遣留学生報告書 5 月 11 日～ 6 月 28 日」財団法人守口市国際交流協会，2002 年。
・〝Summer English Language Institute Bursary Program Spring Session″ 財団法人守口市国際交流協会，2004 年。
・細井忠俊「レポート：カナダの視点」（2001 年 5 月～ 6 月実施）
・Report, City of New Westminster, http://www.newwestcity.ca/council_minutes/0831_Aug31/CW/Reports/CW%20Asiapacific.pdf

参 考 資 料

・市岡政夫『自治体外交』日本経済評論社，2000 年。
・伊藤善市他編『自治体の国際化政策と地域活性化』学陽書房，1988 年。
・井上真蔵「異文化接触とコミュニケーション」，『北海道から』（特集：国際交流の光と影）北海学園大学，1985 年。
・井上真蔵「異文化接触としての姉妹都市交流 ── 日本とカナダの事例から考える」，『開発論集』第 84 号，北海学園大学開発研究所，2009 年。
・井上真蔵「カナダとの姉妹都市関係 ── 何を学ぶか ──」北海学園大学国際会議場，日加修好 75 周年・日本カナダ学会及び北海道カナダ協会創立 25 周年記念事業。『めいぷる』北海道カナダ協会会報第 71 号・創立 25 周年記念号，北海道カナダ協会，2004 年。
・井上真蔵「カナダとの姉妹都市関係の特徴とその影響 ── 牛久市とホワイトホース市のケースについて ──」『人文論集』（第 31 号），北海学園大学，2005 年。
・井上真蔵「カナダとの姉妹都市関係の特徴とその影響 ── 板橋区とバーリントン市のケースについて ──」『人文論集』（第 34 号），北海学園大学，2006 年。
・井上真蔵「カナダとの姉妹都市関係の特徴とその影響 ── 江東区とサレー市

のケースについて ――」,『北海学園大学人文論集』(26・27 合併号),北海学園大学,2004。
・井上真蔵「カナダとの姉妹都市関係の分析 ―― 世田谷区とウィニペグ市の姉妹都市関係 ――」『人文論集』(第 31 号),北海学園大学,2005 年。
・井上真蔵「事例に見る効果的な姉妹都市交流推進のヒント」,『めいぷる』第 79 号,北海道カナダ協会,2010 年 3 月 31 日。
・井上真蔵「転換期にたつ姉妹都市交流 ―― 交流成果を明日に架ける橋に」,『北海学園大学学園論集』第 141 号,2009 年。
・加藤恒男『ケベック・わたしは忘れない』冬青社,1995 年。
・毛受敏浩「岐路に立つ姉妹都市交流」,『自治体国際化フォーラム』2010 年 3 月。

インターネットのサイト

・「財団法人守口市国際交流協会」ホームページ:http://m-interex.daa.jp/dagurasu1.html
・「姉妹自治体優良事例紹介」財団法人自治体国際化協会:http://www.clair.or.jp/j/exchange/jirei/shimai/oosaka.html#moriguchi